
幸せのを見つけ方

桜井 桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せの見つけ方

【Nコード】

N0315D

【作者名】

桜井 桃

【あらすじ】

美月の家庭は幼い頃からの父の酒乱で幸せとは言兼ねる。その反動か、自分は幸せな家庭を作るのが美月の夢。高校から付き合い始めた彼との幸せを噛み締めながらも…お互いの恋愛観の違いに美月は悩む。別れや傷心を繰り返すが、26歳で美月は子供を授かる。自分と優しい旦那様、そして愛する子供が産まれて…。やっと夢見てた幸せを手に入れたはず…だった…。美月が辿り着いた幸せとは…？

1 修羅場（前書き）

この度初めて小説を書きました。
至らない部分もありますが、初めてだという事で大目にみて
やって下さい。

宜しく願います。自分の書いたモノで、たった一人でもいいの
で心の隙間が埋まるようなモノを作りたい、そう願います。

1 修羅場

いつも聞き慣れてる乱暴な車の停車音が、砂利の敷き詰められた屋外に聞こえた。

母と姉と、一瞬緊張した面持ちで目が合う。

テレビを見ていた三人は慌てて一斉に電気とテレビを消すと、逃げるように自室へ走る。

逃げるように…というよりは、正に逃げているのだ。

父は酒乱である。

時刻は10時を回ったところ。

この時間の帰宅は酒が入っていることを表す。

さも既に寝静まったかのように、布団の中で息を殺す。

扉の開く音がして、床を歩く足音が聞こえた。

父は台所へ行き何かを食べているようだ。

今日はおとなしく寝てくれますように…。

目をぎゅっと閉じて、一階の様子をそばだてた耳で伺う。

父はそのまま風呂に入ったようだった。

とりあえず危害が加わる事が無さそうなので、スタンドライトを点けて枕元の読みかけの本を捲る。

ふと、睡魔に襲われ始めてうとうとしかけた11時過ぎ、階下から母の叫び声が聞こえたのだ。

「みづき！みづき助けて！」

母の切羽詰まった声。

中1の美月は素早く布団をはね飛ばすと、慣れた自宅の階段を暗闇

にも関わらず、一段抜かしで飛ぶように降りる。

恐怖の夜が今夜も始まるのだ、と認識しながら…。

元々は両親の部屋だった6畳の洋間から母の声は聞こえた。不仲な両親は、いつの間にか別室で寝るようになっていた。

「お母さん!!」

叫びながら母の寝室へ走る。

運動の得意な美月は母の叫び声から5秒かからず部屋についたはずである。

だが開け放たれたドアから見えたのは、既に床につつぶした状態で泣きながらも頭を両腕でガードし、化け物と化した父に殴る蹴るを繰り返されていた母の姿だった。

後ろから振り上げた父の腕を掴み、その勢いで母から遠ざけるべくどついた。

「酔っ払って暴れるなよ!シラフの時にやってみろよ!この馬鹿親父!」

美月は母の前に仁王立ちしたまま、憎々しげに父に怒鳴った。

奥二重の美月が睨むと目つきが悪く見える。美月に遅れること10秒で姉の優佳もドアのところ立っていた。

「やめなよ!」

父に向かって叫ぶ。

だが酒が入ってもはや化け物に化した父が止めるはずなどなく、鬱憤をぶつけるべく相手の前に立ち塞がり、更に罵声を浴びせる娘にその矛先はあっさりと変わる。

「お前は女のくせに生意気なんだ！」

美月は果敢にもやり合うべく拳を振って、蹴りも出す。

だが40代の働き盛りの肉体の父に敵うはずもなく、頭に相当の回数拳が降り注ぐ。

今度は母がやめて！と父の腕を押さえようとまわりついていて、ドアのところにいる優佳も同様に腕を押さえようと四人がバタバタともがく。

部屋の中にある鏡台に誰かが当たり、置いてあった母の化粧品がガシャンと音を立てて落ちる。

降り注ぐ拳の隙間から、チラリと化粧品を見る。

割れてない。良かった。

殴られるのには慣れていたのだろう。

それより化粧品の瓶が割れるほうが怖い。

前に父が暴れた時は、観賞用のベンジャミンが乱闘中に折れ、父はそれを手にすると

「お前なんかいらねえんだよ！嫁なんかいけねえようにしてやる！」と美月の腹に蹴りをいれて、美月が倒れたところに上から美月の顔面：多分狙いは目だろうが、ベンジャミンを刺そうと襲いかかった

のだ。

首を空いた手で押さえられ身動きできなかった美月は、こりゃマジでまずいかも、と他人事のように思ったのを覚えている。

母と優佳が必死に振り下ろされる腕にしがみついていたので、難を逃れたのであった。

今回は父の素手でボコボコになった美月だが、15分も乱闘が続けていると父も疲れたらしく

「てめえらふざけんじゃねえ！俺を馬鹿にしやがって！」

と捨て台詞残して自室に消えた。

しばらく母娘は放心していた。

美月はかなり派手に上から殴られたので、体育座りのようになっていた。

「みづき、ゆか、大丈夫？」

と母が声を掛ける。

優佳が答える。

「お母さんこそ大丈夫だった？」

泣き腫らした母は髪もぐちゃぐちゃで痛々しかった。

「美月、おでこやバイよ。デカいたんこぶできてる。とりあえず片付けよう。お母さんこれじゃ寝れないよ。」

荒れ果てた室内を片付けながら、優佳は美月に言った。

「美月、頭大丈夫？」と母は心配そうにもう一度言ったが、美月は頷くだけしかできなくなっていた。

なんでいつもこうやって殴られなきゃならないのか。
言葉を発すると、悔しさと涙が出そうになるからだ。

部屋をあらかた片付け終わると、姉妹は揃って母におやすみと言って部屋を出る。

父の部屋からは、5分も前から、今夜はもう安全だという代わりの豪快な鼾が聞こえていた。

言葉も交わさず姉妹は自室に戻る。

父が暴れた後は、疲れと悔しさだけが残る。

二日に一度以上の割合で我が家にはこんな事がある。

もう慣れてはいた。

でも何故殴られなきゃならないのか、割りに合わないと思月月親を選べない自分の運命を呪った。

美月は知らなかったが、親戚の間では美月と優佳が不憫だと、二人を預かるうという声も上がっていたらしい。

それぐらいに凄まじい乱闘が繰り広げられていた。
母と美月の青痣は消える事を知らない。

新たな痣が追加されるからだ。

優佳は利口である。

口答えはしないのだ。

だから殴られることはほとんどない。

いつも父を押さえる役目だ。

美月は母をかばおうとして、父に反抗的な口をきくからやられるのである。

でも美月は言わずにはいられない。
思春期真っ盛りで気の強い美月に、殴られる母を見て文句を言うな
というほうが無理だろう。

その分余計に美月は学校が楽しかった。自己主張の強い美月ははっきり意見を言うので、先生にも気に入られていた。
自己主張の強い分上級生には目を付けられていたが、しょっちゅう校舎裏に呼び出されていても

「ちよつと目立ちすぎない？あんた気をつけなさいよ」

ぐらいな上級生の文句は、家での事に比べればなんてことなかった。
美月の生活はなんら変わりなく、相変わらず酒乱の父に怯えながらも3年になる頃には体も成長して、小柄な父とたいして変わらない身長になっていた。

美月は所属していた陸上部で副部長を務め、進んで男子の筋トレに参加していた。

男子のほうが、バーベルも倍近く重いし、腹筋なども女子の倍だ。
何故キツイほうを選ぶかというと、父にやり返すだけの筋力をつけたかったから。

それに美月には他にも楽しみがあった。

男子が筋トレする校庭の片隅からは、野球部の練習が見えるからだ。
美月は野球部のピッチャーの橋本公平に片思いしていたからだ。
1年の時に同じクラスだった公平だが、あまり話したことはない。

数か月前から美月は意識し始めた。

そのきっかけは、二年の時の真冬に行われたマラソン大会の練習の時からである。

美月は陸上部だし運動は得意だ。

練習でもいつも1、2番をとっていた。

2クラス合同で行われた練習で、いつもと同じようにスタートした。男子に混じって先頭付近を走る美月だったが、靴紐がほどけているのが目に入った。

練習だしいいか、と思い、あとからあとから走ってくる人を避けて道路の端に寄る。

後ろからガッツリ抜かしてやろうとゆっくり結んでいると、ガシャーンと派手な音が聞こえた。

脇の家の庭からのようだった。

低い木の柵で囲われた平屋の家を美月が覗きこむと、おばあさんが土の庭に倒れていた。

脇には割れた鉢が落ちていた。

ギョッとなった美月だが、勝手に体が動いて柵を超えて庭に入ろうとする。

そこへ先生からさばる者がいないかチェックを頼まれた公平が、ラストを走ってきた。

公平はおとなしいが勉強もできるし、先生から信頼されているようだった。

柵を超えようとする美月を見付けると

「吉川さん！何してんの？」

普段から口数の少ない公平は不思議そうな顔をしてこちらを見ていた。

「おばあちゃんが倒れてんの！」

公平も慌ててスピードを上げて美月の後に続き柵を超える。

美月は

「おばあさん！大丈夫ですか？おばあさん！」

と体を起こしてあげて声を掛ける。

おばあさんは目を閉じたまま意識もなく、答えもない。

公平は平屋の縁側がある締め切った窓を叩くと

「すみません！どなたかいらっしゃいますか！」と何度も叫んでいる。

そんな二人の慌てた素振りには似合わない

「どうした？」と間延びした男の声が奥から聞こえた。

やってきたおじいさんは倒れているおばあさんに驚いた表情で固まった。

おじいさんが動けないでいるのを悟った公平は

「救急車呼んだほうがいいですよ？電話どこですか？お邪魔します。」

と早口にまくしたてると、靴を脱いで縁側から家に上がった。

美月はおばあさんが土だらけになっているので、起こした顔と上半

身の土をはたく。

幸い最近雨が降らなかったで、さほどの汚れを残さず土は落ちた。

おばあさんは小柄で、多分美月にもお姫様抱っこできそうな気がしたが、状態がわからないので半身起こしたまま美月の膝枕に乗せて待っていた。

2分はかからず公平とおじいさんが帰ってきた。

「救急車呼んだから、多分すぐ来ると思う。」

公平は美月にそう言うとおじいさんに向き直り、少し大きな声で

「学校目の前なんですけど、救急車来るまではいようと思うんで、学校に電話していいですか？」

とゆっくり言いながら、また部屋の奥のほうへ歩き始めていた。

おじいさんはオロオロしていたが、公平に続き、電話帳は…と言いながら公平に着いていった。

おじいさんは少し耳が遠いようだ。

二人はすぐに戻ってきた。

美月はおじいさんに

「とりあえず保険証とか用意していたほうがいいですよ？あとおじいさん救急車に乗ってかなきゃいけないから、戸締まりして靴履いてこつち来てもらえますか？」

美月は中1の時に大好きな自分の祖父を亡くしていた。

すぐ近くに住む祖母から、おじいさんの様子がオカシイと電話を受け、自宅と一緒にいた姉と自転車で祖父の家に向かった。祖父は口から泡を吹き、鼾のように鼻を鳴らしたままこたつに横になったまま意識がなかった。

慌てて救急車を呼んで一緒に病院に行った美月だったが、医師に保険証はありますか？いつ頃倒れました？

と医師に聞かれても、祖母とタドタドと答えるだけしか出来なかったのだ。

祖父は脑梗塞で入院したが、意識を取り戻す事なく四日後に亡くなった。

それが教訓になって今落ち着いて対処できたのだ。

おじいさんはハッと少し曲がった背筋を伸ばすと

「ばあさん！」

と慌てて靴を履いて出て来る。

出て来たおじいさんに膝枕を譲り、美月は

「すみません、保険証ってどこですか？あとおじいさん上着は？」
と言いながら部屋に上がる。

おじいさんは、保険証は茶色のタンスの引き出しに、と言われた事には答えてくれた。

他人の家の保険証を勝手に探るのも悪いが緊急事態だ。

公平は上着を取りに行ってくれた。

その矢先にサイレンの音が聞こえた。

「おじいさん、家の鍵は？」

公平はおじいさんに縁側からゆっくり聞くと、靴を持って鍵の在処へと急ぐ。

美月も靴を取りに行きながら窓の戸締まりをし、手近にあった、おばあさんの物と思われるバックに保険証を入れ、公平と共に玄関から出る。

鍵もバックへしまった。

そこへ救急車が到着した。

おじいさんは担架に乗せられたおばあさんの脇に吸い付けられたように歩いて救急車に乗る。

その手に美月がバックを無理矢理持たせる。

救急隊員の一人に公平が短く事情を話し、救急隊員は頷くと

「では病院に向かいますので、二人は学校に戻って大丈夫ですよ。ご苦労様でした。」

と一瞬微笑みながら救急車に乗り込んだ。

中学生に言うのには丁寧過ぎる言葉に労いを感じながら、二人は救急車を見送った。

二人はマラソンコースではなく、元来た道を学校へとゆっくり歩く。

美月は口数の少ない公平のしっかりした面を見て意外だったので、
「公平君で意外にしっかり者なんだね。何か見直したよ。おばあさん大丈夫かねえ？」

思っありのままを言った。

公平のほうは

「吉川さんが落ち着いてたから。」

返事はそれだけだ。

美月にはよく解らなかつた。

公平はそのまま無言で歩いていたが口を開いた。

「吉川さんが…助けたんだから、おばあさんは絶対助かるよ。」
そう言つて軽く笑つた。

いつも無表情な感じの公平の笑顔にちよつとドキツとしてしまった美月だつた。

桜の花が膨みかけた蕾を重たそうにぶらさげ始めた頃、
まだ肌寒い卒業式が行われていた。

一つ上の優佳が卒業する。

在校生として体育館の後ろの席で優佳の姿を目で追つていた。
自分の卒業式ではないので、感動とかはないが、これから起こる面倒事に考えを巡らせていた。

卒業生に呼び出されていたのである。

式が終わってから駐輪場に来いと言われている。

美月は仲のよい数人に教えたが、皆

「終わったら部活やらないで速攻逃げなよ!」

と心配してくれていた。

美月もその通りだと思い、HRが終わると親友の紗季だけにバイバイと告げて走って駐輪場の自分の自転車に向かう。

だが既に遅かったのである。

自転車と駐輪場の柱は、仲睦まじく、間に鎖伸びていた。

この状況には似つかわしくない、可愛らしいデイベアの描かれた鍵がかかっており、鍵が無い限り外れそうもない。

やられた〜と思いながら、一応鎖が外せないかと試みる。
無駄なことはすぐ解ったが。

仕方なく呆れ顔でいる美月に上から声が掛けられた。

いつもの上級生が窓から見下ろしている。

「ちよつと待ってなよ！」

帰る事も出来ない美月は素直に待っていたが…後悔した。

いつもは5・6人で来る上級生が、今日は大勢引き連れていたからだ。
だ。

10人程いるだろうか。

上級生はちよつと来なよと腕をとって美月を校舎裏に連れて行く。

19人の女がソロソロと歩いて行く。

いつも口でグダグダ言うけど、手を出された事はなかったのだった。
たが…。

今日はソフト部に所属していたガタイのいい先輩が、わざわざ指名

されて来てくれたようだ。
当たり前のように美月はひっぱたかれる、どつかれるを繰り返された。

10人くらいがニヤニヤしながら、輪になって美月を勢いよく中央に押す。

美月が転べば、ソフト部の先輩が髪を引っ張って立ち上がらせる。
美月は終わるのを待つのと、反撃して隙をついて逃げるのと、どちらが得策か考えていた。

だが、叩かれても押されても、たいした痛みではないので前者を選ぶ事にした。

しかし、一番のルーキーはまだまだ足りないらしく、髪を引っ張りひっぱたくを繰り返し始めた。

大人しくされるがままだった美月も、これにはキレた。

髪を掴まれながらも、金髪に近いショートカットのソフト部の先輩に、同じ事をしてやろうと睨み付けて手を伸ばす。
そこに勢揃いで押さえにかかる。

まるでスローモーションのようだった。

美月はコンクリートに倒されて、何本もの足から蹴りをくらう。
美月はルーキーだけを狙って必死に手足を降り出す。

3分はくらい経ったろうか。
すごく長い時間に感じた。

「先生！こっちです！」と男子の声がする。
ルーキーは恨めしそうに美月を見ながらも、声とは逆方向に走って行った。

口々に

「ばーか！」だの恨み言を言いながら、みんなが続く形で美月だけが残った。

美月には声で解っていた。

数人の足音が近付いて振り返ると、やはり公平が走ってきていた。
いつものグループの面々の中に紗季もいた。

紗季には公平がちよつと気になるかも…と話してあったのだ。

紗季はわざわざ公平を呼びに行ったの？

そんな事したらバレバレじゃない！と美月は焦った。

表情で読み取ったのか、そんな心配は無用と紗季は口を開く。

「美月大丈夫かねって話してたら、私、前見てなくて橋本君にぶつかっちゃって。美月の事考えててぶつかってたって言ったのよ。」

公平が口を開く。

「助けに来たのが女だとまた面倒になるだろうし。先生の名前出せば散るだろうと思って。」

必要最低しか言わない。

でもとにかく助かった。

紗季の起点のおかげなのだが、公平に惹かれ始めていた美月の頭の中には、公平に助けられた…となっていた。
だが、ふと自分の姿を見下ろすと、ブレザーの制服は上から下まで埃まみれ、スカートは捲れて腿まで露わになっていた。

160cm50kgの美月としては、あと2キロ落とさないといつも思っている次第である。

いつも、というのは、ダイエットは明日から派なので、なかなか始まらないからだ。

恥ずかしくて立ち上がって埃を払う。

髪もどうなっているやら。

慌てて手で撫で付ける。

一呼吸ついて、美月はまだ言葉を発してないことに気付く。

「もうみんな本当に有難う！さすがにやばかったよ。」

美月の声に大丈夫と判断した公平は、そのまま戻ろうと歩き出した。
美月はその後ろ姿に目をやる。

野球部なので短髪だが、背の高い公平の後ろ姿が一際と格好よく見えた。

「公平君有難うねっ！」

と手を振る。

公平は無言で振り返り大きい手を軽くあげた。

紗季はニヤニヤしながら美月を肘でつついて、小さくVサインをし

てみせた。

それからの美月の目には公平しか移らなくなっていた。いつでも公平が見える位置にいたいのだ。

休み時間も公平のクラスにいる仲の良い友達に、紗季と顔を出しに来てはチラッと公平を盗み見る。

休み時間に友人とふざける時だけ見せる笑顔もまた素敵：

美月はそんな事を思っているなんて、全く顔には出さずに友人達と無邪気に笑っていた。

次の休み時間は紗季の意中の永山のクラスでおしゃべりだ。

中学生の恋はお互い譲り合い。

自分にしてもらった分は自分も精一杯協力、応援するのが友情。

紗季と美月はあうんの呼吸でそれができた。

紗季は可愛い。

お世辞抜きで美月は紗季の顔が好きだ。

兄がいる紗季の家庭は円満で、家族揃って必ず食事、それも紗季は会話が楽しいと言う。

幸せの象徴のような家庭だ。

そんな紗季だから、守られているという幸せが滲み出たような笑顔、美月はそれが好きなのだ。

守ってあげたいような気にさせる紗季。

顔は可愛い。

美月はコクればと進めていた。

春休み中、二人は3年になってすぐの、永山の誕生日の為にプレゼントにタオルを買いに行った。

永山の誕生日、美月が永山に声を掛ける。

美月は男子の生徒とよく話すので、永山にも普通に
「ながつち、ちょっと用あるの！来て！」

と言えは永山もなぐに？とニコニコしながらついてくる。

今は空いてる事を下調べしてある家庭科室前で止まると永山は
「どこまで連れて行く気よ？」

とオネエ系でふざける。

「ながつちに大事な用のある、私の愛しの人がいるのよ。」

とガラツと戸を開ける。

紗季は教室の後ろのほうで、既に顔を真っ赤にしてプレゼントを握り締めている。

永山は、美月と紗季の顔を交互に見ると察しがついたようでニコリと微笑んだ。

「了解。」

永山は紗季のほうへ歩いていった。

美月は知っていたからコケればと進めていたのだ。

永山は絶対紗季が好きなのである。

明らかに他の女子と扱いが違うのだ。

案の定二人は永山の誕生日当日からラブラブになった。

2 夏の気紛れ

まだ爽やかな暑さと言えた夏休み前に、3年生は最後の試合を悔い残すことなく終えた。全力を尽くした美月は県大会まで進んだが、推薦を取る成績までには至らなかった。

小麦色に焼けた肌は、それまでの努力は無駄ではなかったと、美月に呼び掛けているようだった。

しかし部活を卒業した3年生にとっては、これからが正念場である。受験という大きな戦争が待っているのだ。

永山と紗季の交際は順調に進み、同じ高校に通うべく、二人はよく図書館で勉強をしていた。

永山と付き合う前の紗季は、美月といつも一緒に下校していたのであったが、美月はもちろん気を利かせて二人の邪魔にならないようにしていた。

少し寂しさもあったが、何より紗季の為だ。

夏休み中の夏期講習には多くの生徒が申し込み、美月もそれに倣う。

特に行きたい高校がある訳ではなかったので、夏期講習をしている間に何か目標ができるかもしれない、と思ったからだ。

八月に入り、毎日午前九時からの講習を美月は受けにきていた。

まだ九時だというのに、照り付ける太陽に青空、そこにはまるで張

り付けられたような入道雲が、青空においてけぼりにされたように佇んでいた。

講習を終え、熱気の強い真昼の屋外へ出る。

いつの間にか入道雲は姿を消し、その代わりに暗い大きな雲が辺りを覆っていた。

遠くの空には青空が見えるのに、まるでこの町だけがグレーの雲に食べ尽くされたかのようだった。

一雨きそうな状況に、皆が慌てて自転車を走らせて帰って行った。

美月は急ぐ訳でもなく駐輪場に向かう。

駐輪場に着いた美月はデジャウを見たかのような自分の自転車を見付けて目を丸くした。

自転車と駐輪場の柱を繋いで、鎖がかかっているのだ。

自転車の脇には辺りをウロウロ模索している紗季と永山がいた。

前にも美月の自転車は、上級生に呼び出された時に鎖で繋がれた拳句、錠を掛けられていた。

しばらく錠を探すことになったが、籠の裏に隠れるように貼ってあったのだ。

「錠探したんだけど、見付からないんだよ。また先輩の嫌がらせかなあ？先輩も夏休みだろうし。」

と紗季は顔を上げて言った。

永山も溜め息をつく。

美月は二人に心配を掛けまいと、軽く笑顔を見せて

「いいよ。どうせ雨降りそうだから、ゆっくり探すよ。雨来る前に帰りなよ。」

と言ったが、二人は探すのを止めない。

美月も探しながら

「本当に大丈夫だよ。有難ね！」そうは言ってみたが、自転車付近に無いなら探すアテが無い。

結局このままで帰る訳に行かないと、二人は探し続けてくれた。

仲の良い女子も何人か心配して探してくれたが、鍵は一向に見付からない。

自転車の前タイヤをチェックしていた美月に、突然上から公平の声が降ってきた。

「吉川さんの自転車は派手だね。」

顔を上げると公平は、美月の真ん前に立っていた。
相変わらずのポーカーフェイスだ。

突然目の前に現れた公平に驚いた美月は、顔が赤くなるのを見られないように、慌ててタイヤの下部のチェックを続けるフリをしながら平静を装う。

「先輩も今更何がしたいのか全くわかんないよ。みんなが探してくれちゃって、申し訳なくて。」

「後ろタイヤは見た？」

「ううん、まだ。」

それを聞くと公平は当たり前のように後ろタイヤのチェックに取り

掛かった。

公平が美月の為に鍵を探してくれているので、こんな状況下なのに顔が綻んでしまいそうになる。

「公平君、悪いからいいよ！」

美月が声を掛けるが、公平はそれには答えず黙々と探し続ける。

皆にも悪いからと声を掛けるが、みんなで探せば早いからと続けてくれる。

美月はみんなに申し訳なくて頭を巡らせる。これだけの範囲探して無い。先輩は校舎に入っていないだろうから外のはずだが。

チラリと公平に目をやると、公平は排水路を探していた。

排水路には格子状の金属の蓋がしてある。

枯れ葉や泥ばかりで水はないので、中は見える。

美月は公平とは逆側から、排水路の金属の蓋の上を目を凝らしてゆっくり歩く。

その時公平が、あった、といつも通りの声を出した。

自転車から2mほど離れた排水路の中に、鍵は落ちていた。

格子は手が入るほどの大きさはない。

公平は迷わず蓋を持ち上げようとしたが、蓋はしっかりハマって持ち上がる気配はない。

美月も永山も持ち上げようと引っ張るが上がらなかった。

「これ無理だね。針金探してくる。」

美月は部室に走った。

細い針金を持って戻ると、みんなが公平の回りに集まり頑張れ！と騒いでいた。公平は何とか鍵を取ろうと、二本の枝を箸のようにして奮闘していた。

美月が針金を公平に渡すと枝は役目を終え、公平は針金の先に小さな輪を作り鍵先の細い部分に掛けようと試みる。

すぐにうまく掛かって持ち上がったが、格子に当たり鍵は落下した。格子の幅は鍵の頭が通るか通らないか、ギリギリの幅だった。

そこに待ちきれずに通り雨が激しく振り始めた。一同は慌てて駐輪場の軒下に避難したが、通り雨は数分で小降りになった。再度公平は鍵を取ろうと排水路に向かったが、美月は

「自分でやってみるから大丈夫だよ。本当に有難う。」

と笑顔で言った。

公平から針金を受け取ると

「まだ遠いみたいだけど、雷の音するからまた降るだろうし、みんな本当に有難う。私も速攻鍵取って帰るから大丈夫だよ。」

と笑顔で声を掛ける。
排水路にしゃがんで針金を差し込み、鍵に引っ掛けるとうまく上がってきた。

しかしまた格子に当たり落ちてしまう。

「ほらね！あとちょっとで取れるから！本当にみんな有難ね！」

皆は付き合つと口々に言うが、美月はここまで必死に探してもらつて、申し訳なさで心が痛いのだ。

「大丈夫だつて！大事な時期に雨に降られて風邪ひかれたら、そのほうが辛いもん。みんな本っ当に有難うね。」と軽く頭を下げる。皆も美月の気持ちを察したようで、困っているようだ。

そこに公平が

「俺やり途中で気になるから、あと3回だけチャレンジするよ。それで取れなきゃ先生に業者呼んでもらうから。」

そう言くと、紗季は機転をきかせたのか

「よし！公平君に任せた！ダメだったら業者さんだよ！じゃあ雨降る前に退散します！」

と早口に言つて永山の腕を取る。

皆もまだ心配そうな顔をしていたが、取れなかったら業者呼びなよ、と声を掛けてそれぞれの自転車に向かう。

紗季は自転車を漕ぎ出しながら

「頑張れ！」と言つて永山と連なつて校門へと向かつていった。

この

「頑張れ！」は間違いなく公平の事を指しているのを美月も解っていた。

頑張るも何もどうしたらいいのかと美月は思ったが、振り返ると全く解っていない公平は鍵と格闘していた。

公平は器用に針金を操っていたが、1回目はやはり格子に邪魔されてしまった。

二回目は鍵を排水路の端に寄せてから輪に引っ掛け、排水路のコンクリートに沿わせてゆつくり持ち上げる。

鍵はあっさりと取れた。

「すごい！公平君器用〜！有難う〜！」

美月は無邪気にぴょんぴょん飛び上がって拍手した。

公平は少し照れたように口を曲げて笑い、鍵を手渡す。
美月は早速錠を開け鎖を外しながら

「こんなのどこから持ってくるんだろうねえ？」
と公平に話しかける。

「さあ…。それより帰り待ち伏せとかされてないの？」

と美月が考えてもいなかった事を言う。

「今までされた事ないし、大丈夫でしょ。」

公平は鎖を外し終えると、自分の自転車のほうへ向かって歩いていってしまった。

3 受験

美月は慌てて公平に駆け寄ると

「本当に有難う。助かりました！お礼したいんだけど、とりあえずジューズ奢らせて！」

「じゃあ…戴こうかな。」

公平はそう言つて自転車を漕ぎ出す。

公平はいつも校門を出て右へ帰るのだ。

その通り沿いを少し走ると自販機がある。

美月も後に続いて自転車を走らせる。

しかし公平は校門を左へ曲がった。

美月はびつくりして公平の脇に自転車を並べながら

「公平君でいつも右じゃなかった？自販機もそこにあるからと思つたんだけど…？こつち方面に何か用事あるの？」

美月は公平の行動がよく解らず、とりあえず横に並んで走っている。でもこちらに用事があるなら、しばらくは一緒に走れるな、などと思ひながら。

公平は空を見ながら

「雷近くなつてきたね。この天気で先輩も待つてないだろうけど、一応。」

…つまりは、美月を送ろうという訳だ。

美月は驚きのあまり言葉が出なかった。

まず、自分を心配して送るだなんて、そんな事をしてくれる人間が

いる、という事に。

そして今一番気になっている存在の公平が、それをしてくれるという事、そんな偶然など有り得るのだろうか。

美月の思考はしばらく固まったままで、自転車を漕ぐ玩具のようになっ

「あ…もしかして都合悪い？」

あまりの沈黙に戸惑ったのか、公平のほうから声を掛けてきた。

「そんな事全然ないけど、公平君遠回りになっちゃうじゃない。悪いよ。」

「でも飲み物奢ってくれるんでしょ？…俺向ここの自販より、この先のサン〇リーの自販のが好きだし。」

公平は前を向いたまま、ゆっくり自転車を漕ぎながら答える。

自販機は10分程走らなければならない。

わざわざ理由をつけてくれているのだろうか、と考えたが、せつかく並んで走れるのだから甘える事にした。

「じゃあサン〇リーで買おう！でも公平君には卒業式の時も助けてもらっちゃったよね。二度目だ。本当お礼しなくちゃ。」

「よくトラブルに巻き込まれてるよね。」

「何でだろうね？髪も真っ黒だし、何が気に入らないのか。ホントわかんないよ。」

しばし無言が続く。

公平が口を開いた。

「その時々が一生懸命なのが気に入らないんじゃない？」

「え？そんなんで？損な性格な訳か。目立たないようにするにはどうしたらいい？」

「喋らないとか。」

「無理！無理って解ってて言っていない？」

公平は少しタレ目気味な目を細めてハハッと笑った。空はまだ灰色の重そうな雲が覆っていた。

さつき小雨だった空は雨足を休め、雷鳴だけを美月達のすぐ近くまで連れてきていた。

「どこかに落ちそうだね。」

ジューズを買いながら美月は声を掛けた。

二人でペットボトルを同時に開けたその時、激しい通り雨がまた降り出した。

慌ててカバンを取って自販機の狭い軒下に駆け込む。

「公平君傘は？」

「忘れた。でもまたすぐ止むよ。」

美月より15cmほど背の高い公平の腕に、美月の肩が触れるくらいの距離で二人は立っていた。

「そつえば絶対お礼させて！何がいいかな？」

「いや…別に」

「でも気が済まないよ！何かさせてもらわないと。」

公平は少し考えていたが、雨を見上げながら

「じゃあ受験無事終わらせたらお礼してもらおうよ。それまで考えとくから。」

「え？あと半年先だよ???」

「今思い付かないし、受験終わればゆっくり時間取れるし。」

時間？と美月が考えを巡らせていると公平は慌てたように

「いや…受験終わるまでに考えておくから。雨止んできたよ。行くか。」

と早口に言ってカバンを自転車の籠に入れると、自転車を漕ぎ出した。

美月も後に続きながら、受験後に時間取ってくれるつもりなのか？と、一人頭の中での公平とのデート（？）の妄想に飛躍していた。

ほどなくして美月の家に着き、美月は公平に傘を貸した。

「じゃあ借りる、と公平はそれだけ言つと自転車の向きを変え、あっさり」

「じゃ、また明日講習で。」

と軽く手をあげながら言つて、自転車を走らせて帰って行く。

普段女の子と帰ってくると、家の前でもまだおしゃべりが止まらな

いものである。

自宅に着いたのに、一時間も喋っていたりするものだ。

あまりにもあつさり帰る公平に美月は

「送ってくれて有難う。」と後ろから声を掛ける以外に何も浮かばなかった。

あれからは毎日受験に対しての講習に明け暮れ、二学期も週3回の放課後の補習に忙しい日々を送っていた。

講習は過去の出題プリントを先生が用意してくれ、それぞれ苦手科目のクラスに出ると言うものである。

美月は今日は数学のクラスに出る予定だ。

早い者勝ちなので、席が満タンになる前に行かなくては受けられない。

クラスの皆も急ぐ。

たまに公平と同じクラスに出る事もあった。しかし受験に向けて頑張っている公平に、話しかけるタイミングを見付けられない美月は、あまり公平に関わりを持たないままに冬休みに入ろうとしていた。

願書の締め切りも間近だ。

美月は公平の目指す高校よりワンランク下だが、高校二年になると英文科と普通科が選択できる高校を目指していた。

母に願書を渡し、受験にかかる費用などの相談をしていた。

学校からは滑り止めも必ず受けなくてはいけないと言われていたの

で、まずは私立の願書製作だ。

そこにいつもの乱暴に車を走らせる音が近付いてきた。

母は慌てて明日またやろうと電気を消す。

母娘は自室に駆け込み息を殺した。

しかし美月は願書を下に忘れてきた事に気付いた。
捨てられる前に取りに行かなくては。

父が寝てからにしようと思き耳を立てた。階下では、父がドカドカと歩き回る音が続く。

しばらくすると、足音が止み、父の話声がする。
独り言らしい。

「こんなの…」

だの、あまり聞き取れないが、文句を言っているようだ。
まさか…と思い、電気を点けず、足音がしないように階段を降りてリビングを覗く。

予感的中した。父は美月の願書を台所のシンクで燃やしていたのだ。

仕方がない。

また明日貰えばいい、と階段を昇りかけたところに父がリビングから出てきて、振り返った美月と目が合う。

あまり呂律の回らない口調で

「お前に出す定期代なんかないからな。姉ちゃんには出してやるけど、お前のは出さねえよ。」

と言い捨てて風呂へ歩いていった。

美月は部屋に戻りベットに入ると考えこんでしまった。

定期代を出さないと言うのは本気なのか、それとも酔った勢いなのか、検討がつかなかった。

本当なら進路を変えるしかない。

悩みながらも美月はいつの間にか眠りに落ちていった。

その晩美月の見た夢は、ハイエナに追いかけられる夢だった。

追いつかれては噛み付かれ、腕からも足からもトマトジュースのような液体が流れ出していたが、美月は逃げ続けていた…。

翌日母に定期代の話を話すと、母は自分が何とかするから好きな高校に進めと言ってくれた。

美月は多少安堵したが、父に頼らねばならないまだ15の自分を呪った。

私立の願書を無事提出し、受験勉強も佳境に入った頃には、公立高校の願書の提出期限が迫っていた。

母と相談し、美月の本命の高校の願書を書いていたその時、ガチャリとドアの開く音がした。

母娘は息を飲む。

やはり泥酔した父がリビングに入ってきた。

母が車は？と聞くと、途中でぶつけたらしい事を乱暴に答える。

美月の願書が目に入った父は、テーブルからそれを取ると破り捨てた。

「お前に出す定期代なんかないって言っただろ！」

そう言うのと、座っていた美月をいきなり殴り始める。

母も優佳も呆気にとられて、一瞬身動きが取れなかった。

父の拳がちょうど顔を上げた美月の鼻に入った。

殴られた勢いで床に倒れ込み、鼻血を出しながら父を睨み返す。

母と優佳が慌てて止めに入った。

「お前なんか中学出たら乞食になれ！」

せせら笑いながらそう言い放ち、尚も殴りかかろうとするのを、母と優佳は必死に父の腕と腹にしがみついて止めようとする。母と優佳に押さえられていた父は

「解った。放せ、放せてば！もう寝る。」

そう言つてリビングのドアのほうに体を向けた。

今までで一番の恐怖を味わうことになるなどと、この時美月はまだ気付いていなかった…。母と優佳はまだ父の両脇で腕を持ったままだったが、父がそれを振り払う。

「寝るって言うてんだろ！車ぶつけた時に肩痛めたんだから、放せ！」

母娘は固まったままだった。

父がドアのほうへ向かった。

かと思ったら、台所に小走りに走りだし、ガチャガチャと何かを探しているようだった。

慌てて美月は台所に向かったが遅かった。

ニヤニヤした父は、包丁を手に使っていた。

美月に向かって振り下ろす。

母はその場で動けず、キヤーと叫び声を上げた。

優佳は慌てて台所に来て美月の腕を引っ張り、リビングに連れ戻す。

美月の着ていたトレーナーは、少し不揃いな切れ目が10cmほど入り、腹にうつすら血が滲んでいた。

美月は殺される、と思った。

自分は二十歳まで生きれるのだろうか。

いつかこの父と刺し違えて、この短い人生を終わらせる時がくるだろうと、覚悟はしていたつもりだった。

だが、目の前で刃物を振るう父を前にすると、美月は動くことができなかった。

それほどまでに必要とされていない自分の存在が、急に可哀相に思えて仕方なかった。

まるで他人事のように自分のトレーナーを見る。

傷は薄皮を切ったくらいでたいした事はない。

美月の目からは涙がこぼれていた。

美月は涙がこぼれてから、自分が泣いている事に気付いた。
涙が頬を伝う冷たさが、美月を冷静にさせた。

母の自由な生活の為ならば、美月は刺し違える覚悟だったのを思い出した。

父を睨みつけ、殴りかかっていく。

「お前なんか死ね！」と言った父の顔は般若のようだった。

美月の脳裏には、白く薄い靄がかかったように、みんなで鍵を探した駐輪場、公平と帰った湿った道、母と優佳との団欒が映画の回想シーンのように流れていた。

死を覚悟すると、走馬灯って本当にあるんだ、本当に一瞬で思い出

が蘇るんだな、などと思いながら振りかぶる。

優佳がやめたと叫ぶのが聞こえたがお構いなしだ。

父は向かってくる美月に刺さるように包丁を向けていた。

その時、ピンポンと場違いなチャイムが聞こえた。

父は向かっていく美月より、チャイムのほうが気になったらしい。
包丁が美月から逸れた。

美月は咄嗟に包丁を持っている父の右手に噛み付いた。

父はギャツと叫び声をあげて包丁を落とした。落ちた包丁を優佳が素早く拾う。父は凶器が無くなったので美月に殴りかかろうとしたが、またピンポンピンポンとチャイムが鳴った。

美月は噛み付いた拍子に膝をついたまま、父は美月を殴ろうと振りかぶったまま、優佳は包丁を手に立ち尽くしたまま、母はその場で固まったまま、四人は凍り付いたように動けなかった。

母が慌てて玄関に向かう。

来客としては遅すぎる１１時近く、母がドアを開けた音がした。

隣に住むおじさんが、叫び声に心配して来てくれたようだ。

おじさんは母に促されてリビングに入ると、包丁を持った優佳と鼻血を出して膝まづいている美月に驚き、目を丸くする。

状況を察すると父に

「酔っ払って暴れたらダメだよ、今日はもう寝なよ。部屋どこだい？」

と父の肩を抱きながらリビングから連れ出す。

美月は座り込んでいた。

またもや流れ出した涙は、安堵の涙だった。

父はそのまま寝たらしく、5分もすると鼾が聞こえてきた。

おじさんはリビングにやってくると、三人の怪我はどうかと質問した。

たいした事がないと解ると

「他人が来るとお父さん冷静になれるから、暴れ出したらすぐうちにおいで。」

と言って美月の肩をポンポンと叩いた。

美月は深々と頭を下げ、止まらない涙を隠すように階段を昇って自室に入った。

階下では母がおじさんを送りだしたようだった。

疲れた美月は鼻にティッシュを突っ込むと、ベットに潜り込んだ。

あ、鼻血拭くの忘れた、などと思いながらも、もうリビングに戻る気はなかった。

何もかも忘れてしまいたかった。

数日後、進路を自宅から自転車を通える高校に変えた旨を先生に伝えた。

先生は説得を試みてくれたが、美月の決意は変わらなかった。

母も好きな高校に行けと何度も言ってくれたが、また父が暴れる理由を作りたくなかった。

美月は最初、高校に行かないと言ったのだが、高校だけは出てほしいと言う母の強い希望で一番近い高校にしたのだ。

美月の学力ならほぼ合格間違いないだろうと太鼓判を押されたので、美月は受験勉強しなくてもいいから楽になった、と前向きに考える事にした。

高校はたいした勉強もせずにあっさり合格し、受験生の苦しみ、感動を味わう事なく美月の中学生活は終わろうとしていた。

4 近づく距離

桜もまだ蕾をつけ始めたばかりの3月上旬。卒業式を間近に控え、無事永山と同じ高校に合格した紗季と、美月は公平へのお礼について顔を合わせれば密に話し合っていた。

卒業式間際まで二人は計画について話し合い、はしゃいでいた。

春から別々の高校に進学する公平に、今アピールしておかなくては、ただの同級生止まりに終わってしまう。

二人の計画としては、卒業式後に公平に

「ボタンをちょうだい」から始まる事になっている。

敢えて本命の第2ボタンとは言わないのは、ここで断られたら卒業後に会いにくくなるからだ。

どのボタンでもいいから記念にと貰い、前に助けてもらったお礼に映画を奢るから、紗季と永山と4人で出掛けないかと誘うつもりだ。

これなら公平も四人ならいいと気兼ねなくOKするだろうと二人は、卒業式終わったらね、と手を振り式に臨んだ。

それまでキャピキャピとはしゃいでいた二人だが、式の最中から号泣だった。

式が終わっても

「高校別でもいっぱい会おう！」

と号泣する二人のところに、陸上部やブラスバンド部の後輩が詰め掛ける。

「吉川先輩！バッチください！」

から始まり、紗季は美月の身に着けてる物を捌く係りになった。

中には男子も混ざっており、リボンくださいだのブレザーくださいだの、美月はブラウスとスカートだけになってしまった。

美月が驚いて紗季に

「…何で？」

と問い掛けると紗季は

「美月男子に混じって鍛えてたからねー！音楽室から見えるから、ブラバンの子に人気あったよ！美月鈍感だから！」

そう言いながら大笑いしている。

そうだったのかと美月は納得した。が、思い出した。

公平は帰っていないだろうか？

自転車はあった。

視線を公平のクラスの駐輪場に向かわせたので、紗季も気付いて公平を

「探そう！」と教室に戻る。

校舎に入ると一階の廊下を歩く公平を見付けて二人で呼び止める。

紗季は気を利かせて

「美月ブラウスじゃ寒いでしょ？ジャージ持ってくるから」と自転車に戻っていった。

美月は意を決して計画を遂行しようと息を整えた。

「あの…公平君、記念に…ボタン貰えるかな？どれでもいいんだけど。」

公平は驚いた表情で無言で立っていた。

美月はまずいと思い、慌てて付け加える。

「いいの！記念だから！色々助けてもらったし、袖のとかでも。」

公平は美月を見つめたまま立っていたが、おもむろにボタンに手を掛けてプチッと外した。

公平が差し出したのは、第2ボタンだった。

あんぐり口を開けた美月に公平は

「迷惑だったら処分してもらっていいから。あとこれ。」
と言って青い封筒を渡して

「よければ返事もらえる？
春休み中だと助かる。」

そう言つと歩いて行こうとした。

美月は思考回路がやっと働き出した頭で【お礼】を思い出し、公平に早口で言つた。

「あのっ！来週の月曜は暇？」

「…手紙、今読んでもいいよ。」

美月は一瞬迷つたが、第2ボタンを目にして期待に鼓動は高鳴つていく。

ゆっくり頷くと、特に封をされていない封筒を開いて、手紙を取り出す。

公平らしい短い文面だが、中1の頃から美月が好きだったこと、特に困らせるつもりはないから、ダメなら一言、ごめんなさいとだけ連絡をくれ、と書かれていた。

美月はすぐ読み終わると顔を上げ

「返事、今してもいいかな？」
と公平を見る。

「迷つてゐるなら引き伸ばしてもらいたいけど、即決なら仕方ないでしょ。」

公平はボーカーフェースで美月に言った。

美月は右手を差し出した。

公平はゆっくりと美月の右手を握る。

「友達でつてことかな？」

そう微笑む公平の右手を引き寄せると、美月は爪先立ちになり、公平の右頬に素早くチュツとキスをした。

「来週の月曜ダブルデートしよ！」

勝手に笑みがこぼれてしまい、美月は笑顔を押さえるのが大変なくらいだった。

目を丸くした公平からは、え…ああ…といった返事しか帰ってこなかった。

美月は公平に日時をゆっくり伝えると

「約束のお礼！させて下さい！

映画奢らせてね！」

と言って紗季の待つ駐輪場に走っていった。

突然恥ずかしさが襲ってきて、その場にいられなくなったのだ。

頬を染めて走ってくる美月に紗季は、どうだった？と声を掛けたが、返答に困った美月はとりあえず紗季を促して自転車を漕ぎ始めた。

美月はキラキラ胸に降る、ついさっきの甘い記憶を思い出しては二ヤけてしまった。

美月の心には、何でも乗り越えられそうな、幸せ、というエネルギーが満ちあふれていた。

翌週月曜、公平は待ち合わせ場所に現れ、まだぎこちないながらも、二人の距離は縮まっていく。

映画は4人並んでの席が空いておらず、2組は別々の席で見ることになった。

美月が5列ほど前に座っている紗季に視線をやると、紗季は永山と繋いだ手を持ち上げて降ってみせる。

美月達もという意味であろう。

美月は動揺して公平を見たが、公平は相変わらずのポーカーフェイスで紗季の行動を見ていた。

公平はクスツと笑うと美月側の左手を差し出し、美月の手が置かれるのを待っている。

美月はドキドキして手、汚れてないかなあ？などと思いながら公平の手にそつと自分の手を乗せた。

公平はその手をぎゅつと握ると、紗季に向かってブンブン降った。普段冷静な公平がそんな事するとは誰も思わなかったので、みんな驚いてぎこちない笑顔になったろう。

ブンブン降った公平からは、公平の家の臭いだろうか、少し花の香りのような臭いがした。

そんな距離に居られる自分を美月は幸せに思った。

高校が始まってからも交際は続き、土日のどちらかは会つ…という
かデートするようになった。

高校が別で美月が自転車通学なので、学校帰りには時間が合わない
のだ。

相変わらず手を繋ぐだけで幸せな美月であった。

家で父が暴れようと、今死ぬ訳には行かない、と奮起して更に鍛え
たり、ボクシング部の男子に殴り方を教わったりと忙しい日々を送
っていた。

公平はだいぶ本性を出してきているのか、前ほど口数が少ないとい
うことはない。

公平曰く、普段は自分を出さないようにしているんだそうだ。

美月はそれも嬉しかった。

美月にだけ本音で喋ってくれているのである。

二年になり、交際も1年3ヶ月を迎えた夏日の帰り道、美月はいつ
もの道を自転車で帰っていた。

後ろから

「おおーい」という声が聞こえて美月は振り返ってみた。

後ろには中学の同級生の脇田が猛スピードで追ってきていた。

「ワキンちつてこつち？つーか学校自転車だつけ？」

「いや俺お前のとこの近くの私立に編入したのよ。チャリ盗んで売ってたのバレて退学になっちゃったから。」

ヘラヘラしながらそう答える。

昔からこんな奴だっけ？と美月は不思議に思った。

まあ悪いグループにはいたが、そんなに目立つ存在ではなかったはずだ。

脇田は女の子紹介してよだの、美月は彼氏がいるのかだの、ヘラヘラ話していたが、美月は適当に話しながら自宅に向かっていた。

「ねー、吉川ってば、ちよつと女っ気出てきたんじゃね？やっぱ吉川もありかな。」

などと失礼な事を言いながら脇田は横に並んで走る。

と脇田の自転車が美月の自転車にぶつかり、美月は派手に転んだ。

脇の空き地に投げ出され、美月はしたたか頭と肩、腰を打った。

いた〜いと言いながら起き上がろうとしたところに自転車を寄せた脇田が走ってくる。正確には寄せた、と言うより、足で乱暴に空き地に押し込んだようなものだ。

美月が起き上がろうとすると、脇田が上から覆いかぶさってきた。

「ちよつと何すんの！」

美月は脇田の肩を押さえ、近付かれまいと押す。

脇田は美月の腕を取り、横にある三つのドラム缶の後ろに連れ込もうと引きずる。

美月は手を振り払ったが、17歳の男の力は凄まじかった。

脇田は公平より身長があるようだった。

180cmくらいあるのだろうか？などと思ってる自分に驚いた。

ドラム缶の後ろの、道路からは見えない位置にくと、脇田は美月を草の上に倒してキスしてきた。

やめてよ！と言い掛けた美月の口に、ニユルリと気持ちの悪い物が入ってきた。

舌を入れてきたのだ。

美月は脇田の舌を嚙んでやった。

「いてえ！何すんだよ！ちゃんと恋人らしくやろうぜ！」

意味不明である。

無理矢理草むらに連れ込んで押し倒して、恋人らしくも何もある訳がない。

美月が起き上がろうとすると、脇田は後ろに回って左手で美月のウエストを抱き寄せる。

座った格好のまま、腕は後ろに回されてしまい、脇田の体で圧迫されているので抜けようがない。

空いた右手で美月の胸を触りだした。

ブラウスのボタンを慣れたようにサツと外し、直に胸をまさぐってくる。

好きでもない男だと、こんなにも嫌なものかと美月は痛烈に実感した。

怖いと言うか、気持ち悪い。

だから抵抗できたのだと思う。

「誰かー！」

と美月が叫び声をあげると、脇田は美月を草むらに押し倒した。

手を頭の上で押さえ、キスしてきて、また舌を入れてくる。

美月は顔をブンブン降った。

脇田の空いた右手は、美月のスカートの中に入ってきた。

美月は鳥肌が立った。

身の毛もよだつとは、正にこの事である。

美月は最終手段を取ろうと、タイミングを見計らって膝を勢いよく立てた。

固い物にヒットし、脇田は

「うっおっ！」と声にならない声を出して手を放した。

美月は一目散に自転車に走る。

漕ぎ出そうとした美月に

「誰にも言つなよー！またなー！！」

座り込んで股間を押さえている脇田が叫んでいた。

また…？。またなどと二度とごめんだ。

明日からは絶対道を変えよう、と美月は考えていたが、ふと気付いた。

美月のファーストキスは…脇田だと…。

神様は不公平過ぎる。

世の中には優しいパパなるものを持ち、彼氏が出来て、初めてのキス。

そんなことが当たり前の人がいるはずなのだ。

美月と言えば、乱暴な父と毎日のように喧嘩をし、ファーストキスは犯罪のように草むらで無理矢理だ。

脇田は誰にも言つなと言ったが、言える訳がない。

公平に知れたら…。

真面目な公平の事だ。

別れようとも言われたら…、そう考えると美月は眠れなかった。

よく晴れた土曜日、公平との待ち合わせ場所に美月は向かう。

いつも駅で待ち合わせだ。

電車で出掛け、買い物や映画など、その時に好きに歩く事にしていく。

今日はいつもより涼しいから、公園を歩くのもいいな、などと考えながら駅に向かうと、既に公平は待っていた。

公平に駆け寄って手を取ろうと…、いつもの行動だ。

まずは挨拶代わりに手を繋ぐ。
いつものこと。

しかし公平の大きさに先日の脇田が一瞬重なった。
美月は公平の手を取れなかった。

立ち止まった美月に公平は

「知ってる。」

と声を掛けた。

知ってる…？何をだろう。

まさか脇田のこと…？

美月の顔から血の気が引いた。

公平に知られた？というのと、脇田のことを思い出したからだ。

「脇田がいいふらしてるみたいだよ。」

やはり知っていたのだ。

美月は緊張で口の中がカラカラになっていた。
声も出せない。

「押し倒してキス止まりだったって。
逃げられたから、次はって言ってたらしい。うちの学校に脇田とつ
るんでるのいるから。」

自分で言うなと言っておいでいいふらしっているなんて、あの男は本
当にろくでなしだ。

公平は美月の手をそつと握ると、怖かった？と聞いた。

美月は首を横に降った。

唾を飲んで、美月は仕方なく答える。
気持ち悪かった、と素直に答えた。

公平は美月を抱き締めた。
抱き締める、というより、ふんわり覆った感じだ。

「俺がこうするの、今はまだ気持ち悪い？」
美月は首を横に降る。

公平は暖かった。
夏の熱気と合わさっても、嫌じゃなかった。

駅に入っていく人が、チラチラこちらを見ていくのが目に入ったが、
公平は構わないようだ。

「怪我は？」

「大丈夫。青痣がちょっとできたくらい。」

「言わなくてごめんなさい。…言えなかった。」

「何されたか聞いても平気？」

美月は一瞬迷ったが、他人から言われるよりいいと思い、ゆっくりほぼありのままを言った。

スカートに手を入れた事は、いくら美月でも言えなかったのだ。

ふんわり掛けていた手を美月の肩におき、公平は、もう大丈夫だから、と言ってうつむいている美月の顔を覗きこんだ。

そしてそのままそつと美月の唇に自分の唇を当てた。

キスというより、ちょっと触れた、くらいなものだった。

「トラウマになる前に、ね。」

公平はそう言つと、さっきより少し強めに美月を抱き締めた。

この人の腕は嫌な訳がない。

美月はこの上なく幸せを感じていた。

待ち合わせから1時間以上が経過して、やっと二人はいつものように手を繋いだ。

「今日はどこに行く？」

と公平に声を掛けた。

「もう少し待ってくれる？」

と公平は答える。

待つって何を、と美月が問い掛けようとしたところに、駅の正面から自転車が来た。

脇田だった。

何で脇田が！？と目を丸くする美月に、脇田は普通に声を掛けた。

「よう。何だよ。公平と付き合ってたの？」

公平は自転車にまたがったままの脇田の胸ぐらをいきなり掴むと

「俺の彼女だから、二度とやらないでくれる？」

脇田は普段口数の少ない公平に脅されたので、言葉もなかった。

そのまま公平は振り返り、美月の手をとって
「行こう」と改札に向かった。

歩き出した公平は突然立ち止まり

「吉川さんから聞いた訳じゃないから。お前が友達にベラベラ喋ってるから、俺の耳に入ったんだよ。自慢になんかなんねえからな。」

そう言い捨てて、ポカンとしてる脇田を残して美月の手を引き、改札を抜けた。

ホームで美月は公平に聞いた。

「公平君がワキ呼んだの？」

「うん。人の彼女にはさすがに手出さないでしょ。」

人の彼女…。

美月はそんな言葉にさえ幸せを感じていた。

さっきの駅でのキスといい、公平の意外と大胆なところにまた惹かれた。

電車が来て乗り込んだ二人は、しばらく黙ったまま4駅ほど通過した。

美月は今日の公平の行動を思い出しては、ニヤけそうになる自分を押さえるのに苦労していた。

「美月って、呼んでもいい？」

公平は突然こちらを見ながら言った。
普段公平は特に名前を呼ばなかった。

呼んでも吉川さん、くらいなものだった。
それが突然名前で？

でも美月は嬉しくて、車内なのを忘れて少し大きな声で
「もちろん！」
と笑顔で答えた。

5 近づく距離2

「美月、何飲む？」

白い息を吐きながら、公平が美月に振り返る。

「公平と同じの！どーせコーンポタージュでしょ？」

美月は白いコートのボタンをはめながら答える。

美月はコーンポタージュを飲みながら、先程見ていた映画の話始めた。

「面白かった！でも最後が自分も幽霊でした！とは！」

「そう？ラスト見る前にそんな気がしてたけどなあ？」

季節は冬になり、付き合って二度目の冬休みを迎えていた。

薄曇りの空は雪でも降らせそうなくらいに重たく見え、クリスマスの近づく明るい街には少し不似合いだった。

もう冬休みという事もあり、街は学生らしき若者で混雑していた。

いつもは人のいない二人のよく行く公園も、今はクリスマスの洒落た飾り付けがなされた為に、腕を組んで歩くカップルでいっぱいだ。

「これじゃ行くとこないね。」

「電車で移動しようか？」

二人はたまには違う所に行ってみるのもいいかと電車に乗った。

クリスマスは美月も公平も部活があるから会えない。

高校になって美月はバドミントン部に所属し、公平はサッカー部に所属した。

美月は部活後にケーキ屋のバイトもある。

冬休みのほとんどにバイトを入れているので、休みはほとんどない。部活はクリスマスが最後で次は始業式からだが、ケーキ屋は元旦に営業時間が短くなるだけで休みはないのだ。

少しでも父に頼らずにいられるように、自分の物は自分で買おうと夏休みに面接を受け、美月は学校帰りと日曜にバイトを入れていた。公平は毎週土曜日しか美月と会えないのだが、文句一つ言わないでくれた。

今日は一足早めのクリスマスをやろうと話していたので、美月はプレゼントを用意していた。

紗季と一緒に作ったのだ。
紗季の趣味は編み物である。

鍛えていたり、共学なのに女の子から告白を受けたりする（笑）美月には無縁な編み物だったが、紗季に教えてもらって頑張って作ったのだ。

紗季は美月のバイトの無い、水曜の学校帰りに毎週寄り、紗季はマフラー、初心者の美月は帽子という具合に内職していたのである。美月は水曜に紗季と近況を話しながら、初めての編み物を楽しんでいた。

編み目があまりわからないようにとの紗季の勧めで、太めのモスグリーンのもヘア系で編んだ。

見た目は手編みとはわからないように出来た…と本人は満足している。

紗季の木の葉編み、模様入りのマフラーと比べたら、ただ編んだだけの帽子だが、先生が良かったので上出来だ。

始めて降りる駅で電車を降りると、公平は

「さみい〜！」

と首をすくめた。

美月は早速帽子を出して、ワックスでツンツン立った公平の頭に被せた。

「クリスマスプレゼント！あまり上手じゃないけど、気持ちを込めて作りしました！」

「…すっげえ嬉しい。有難う。」

公平は帽子を一旦取ると、まじまじと眺めた。

「編み目が不揃いだからあまり見ないですよ。」

「手作りには見えないよ。バイトもあるのに、本当有難う。」

公平は満面の笑みを浮かべて帽子を被った。

嬉しそうに帽子を擦りながら歩く公平を見て、美月も満足だった。公平はふと立ち止まると

「俺もプレゼントあるんだ。」

と言ってポケットから小さな箱を差し出した。

「安物だけど……。」

開けていい？と聞くと公平は頷く。

美月はリボンをほどき箱を開けると、小さな水色の石の付いた指輪が入っていた。

「サイズよく解らなかったから、合つといいけど。」

美月は指輪を出して、右手の薬指にはめてみた。

ユルユルだった。

「入らなかつたらと思って大きめにしたんだけど、大き過ぎたか。」

と顔をしかめる公平に

「中指ならぴつたりだよ！」

と中指にはめた指輪を見せた。

「アクアマリン…だって。いつか…もっとちゃんとしたの、プレゼントするから。」

公平はそう言ってキスした。

安物と言えど、アクアマリンなら高校生には精一杯だったろう。その気持ちが嬉しかった。

公平は美月がバイトを始めてから、空いている日曜にこっそりバイトしていたらしい。

そのお金で美月に指輪を買ってくれたのだ。

「私、帽子だけで何か悪いなあ。よし！今何か探そう！欲しい物は？」

と公平に笑顔を向けると、公平は目を逸らして

「…欲しい物は、あるにはある…けど…」

「なあに？」

美月は公平の視線の先に移動して、見つめながら聞いた。

公平は

「……美月」と見つめ返しながら答えた。

美月は目をパチクリさせながら考えをまとめていた。

公平は美月の返事を待っている間、沈黙したままだった。

しかし沈黙に耐え切れなくなったのか、真っ赤な顔をして
「ごめん、忘れて」と美月の手を取り歩き出した。

少しそのまま見知らぬ街を歩いていたが、美月は少し先にホテルまで30mの看板を見付けていた。

美月は公平の腕に自分の腕を絡ませ、そのままホテルの看板のほうへ歩いて行く。

「ここ、行こう?」

看板を指差し笑顔で公平に言うと、腕を引っ張ってホテルに向かう。驚いた表情の公平を連れて、二人は一言も発する事なくホテルに入っていた。

公平は先にシャワーを浴びていた。

あと3ヶ月で付き合って二年になる。

そこまで手を出さないのは公平くらいではないか、と今更美月は感心していた。

きつと美月が忙しいのを解っていて、我慢してくれていたのだろう。

美月はそんな事も気付いてあげられなかった事を反省した。

公平は白いガウンを着て出て来ると、可愛いピンク色のソファに座

った。

美月は公平にキスすると、無言で入れ替わりにシャワーを浴びに行く。

鏡に映る自分の姿をなぜか直視できない。

目を逸らし、髪は洗わず手早くシャワーを浴びる。

覚悟を決めた美月はガウンを羽織り、ソファの脇で立ち止まった。

公平は美月の手を取り、二人はベットに潜った。

公平は美月を抱き締めてキスした。

「…無理しなくていいよ。このままで充分だから。」

美月はガウンの紐を解き、ガウンをベットの下に落とした。

「今しなかったら、私が後悔するから。」

美月がそう言うのと、公平は美月の髪を撫で始めた。

そしてゆっくり公平は美月の背中に手を回すと、抱き寄せてキスした。

初めてのディープキスだった。

美月の上に覆い被さると、公平はガウンを脱ぎ捨てた。

「美月、愛してる。」

ぎゅっと抱き締めあいながら、初めてのお互いのぬくもりを確かめ

あう。

胸に公平の手の平がそつと触れた。

美月は突然緊張してきて、体を強張らせた。

「怖い？」

キスしていた公平が顔をあげて尋ねた。

「緊張：してきた。公平、愛してる。」

美月はそう答えると公平をぎゅっと抱き締めた。

「俺ら好きって言った事ないね。初めて気持ち言ったのが【愛してる】だね。」

微笑んだ公平は唇を重ねながら、遠慮がちだが今度はしっかりと美月の胸に手を置いた。

公平の手に全てを委ね、美月は頭の所にあるパネルで、部屋の電気を消した。

薄明かりの中で公平は段々大胆になり、美月の体の端から端までを確かめるように全てに触れていく。

指が美月の一番敏感な部分に触れた。

受け入れ具合を確かめたのか、今度はゆっくり指を差し込んできた。

美月は痛みで

「んっ」と声を出した。

それに気付くと公平は、殊更ゆっくりと指を動かしながら、美月の感じる部分を探すようにあちこちに口づけする。

公平は一旦体を起こしてベットサイドを探り、備え付けのゴムを取り出した。

愛してる、ともう一度囁きながら、舌を絡ませる。

公平自身が美月の中に少し入ってきた。

美月は痛みで顔を逸らした。

「やめようか？」

と公平は腰を引こうとしたが、美月が公平の腰を押さえた。

「愛してる。でもちよつと痛いね。」

美月は笑顔を作った。

公平は美月をぎゅっと抱き締め、ゆっくり、ゆっくりと美月の中に入ってきた。

美月は痛みで顔をしかめ、公平の肩にしがみつく。

公平は耳元で

「愛してる」の囁きを繰り返し、動きは徐々に激しさを増す。

目をぎゅっとつむったままの美月を心配したのか、息を切らせながら公平は

「痛い？」と聞いた。

「まだちよつと。公平は気持ちいい？」

「美月の中温かい。もうヤバそう。」

美月が公平にしがみついた。

二人はきつく抱き締めあう。

公平は今までで一番激しく動くと、微かな溜め息と共に果てた。

しばらく余韻に浸り、抱き合う。

公平は美月に軽くキスをした。

「俺、美月のストーカーになりそう。」

「なあに？それ。」

二人はフフツと笑いあった。

二人の交際も順調に二年を迎え、美月の高校では三年なると、就職組と進学組でクラス分けされた。

美月はもちろん就職組である。

これ以上の学費を出してもらうつもりはない。

あと一年で自分でやっと稼げるようになるのだ。

美月は相変わらずバイトと部活に、何より公平とのデートに忙しかった。

車の免許取得の為に、毎週土曜日のデートは互いの自宅になる時もあった。

美月の家は、昼間は父がお酒を飲みに行っているからいないので、父が帰ってくる前に公平を途中まで送るようにしていた。

もちろん公平に、父が暴れる事は言っていない。
軽蔑されたくないからだ。

しかし来るべき時は来てしまった。

それも朝から。

10時に公平が来るので、その前に美月が部屋の掃除を終えて階下に降りると、何と父がリビングにいた。

「…………おはよう。」

一応声を掛ける。

まだ酒の甘い臭いがする。

きっと今朝方まで飲んでいたのだろう。

「お前バイトないのか？」

「土曜はないよ。」

「お母さんどこ行った？小遣い貰わないと出掛けられないんだよなあ。」

美月が知らないと答えると、父は少しおぼつかない足で歩み寄ってきた。

「知らねえ？知ってて俺に黙ってろって言われたのかあ！」

いきなり殴りかかってきた。

美月はとりあえず避けた。

美月が避けたので、拍子に父はそのままテーブルに突っ込んでいった。

父はテーブルに突っ伏して止まり、そのままテーブルをドン、と叩くと美月に掴みかかってくる。

公平と会うのに顔はやバイ、と避ける。

足に気を払っていなかった為、足払いをくらって倒れた。

勢いよく倒れたので頭を打った。

少しくラクラしたが、上から降る拳に顔はやられないように、下を向く。

無防備な背中に蹴りをくらい、むせながらリビングから逃げる。

父が追ってきて、玄関で後ろから蹴りが入った。

勢いよく壁に激突した。

美月はキレて、父に掴みかかる。

美月の放った拳が一発、父の顎に入った。

それで父は頭に血が昇ったようで、見境なくなってしまったのだ。

狭い玄関で美月の顔面を掴むと後ろの壁に、美月の後頭部を打ち付け始めた。

「お前なんか死ね！」

「離せ！離せよ！」

美月は父の手に爪を立てる。

何度も続き、美月は意識がぼうつとなるのを感じた。

手に力が入らない。

そこへふいに父の手が離れ、美月は廊下に倒れこんだ。
そのまま意識は無くなった。

目が覚めると美月の部屋のベットにいた。
公平が美月の顔の目の前にいた。

びっくりして起き上がろうとしたが、公平の顔が近過ぎて危ない。
「親父さんすごいね…」

自転車止めてたら、死ねとか離せとか聞こえて、勝手に玄関開けさせてもらったよ。

美月、よくすごい痣あるけど、親父さんが？」

公平が止めてくれたようだ。

「公平はやらなかった？大丈夫？？」
美月は公平が殴られたんじゃないかと気が気ではなかった。

「俺が家人って親父さんの腕押さえたら、ピタッと止めたよ。美月
気失っちゃうし、救急車呼ばうか迷った。」

様子を見てくれていたようだ。
10：30になるところである。
30分近くは横になっていたようだ。

「うちの父酒乱でさ…。今朝まで飲んでたみたいで、たま～にああ

なっちゃうから。」

美月は軽蔑されたくないの、日常茶飯事ではない事を笑顔でアピールした。

まあほぼ毎日なのだが、これほどの喧嘩は稀なので、たまに、と表現した。

起き上がる美月を心配そうに公平は覗きこむ。

「警察…とかは？」

「だいぶ前にもう言った。家族間の事は面倒見てくれないって。公平は黙り込む。」

「大丈夫だよ。これほどのほとんどないし。」

「またあつたらどうすんだよ！殺され兼ねないだろ！」

公平が珍しく声を荒げた。

美月はびっくりして公平を見つめた。

「ごめん…。でも何かあつたらすぐ呼べよ？」

美月の肩を抱き寄せた。

美月は方々が打ち身で痛んだが、公平が心配するといけないので、黙って肩にもたれていた。

公平は軽蔑どころか、美月の身を心から心配してくれていた。

美月は安心して目を閉じた。

うつすら涙が滲みそうになるのを、目を擦る振りをして誤魔化していた。

6 順調な交際

公平は水曜にも美月の家に来るようになった。

母は受験生の公平が遅くまで家にいたら、受験に差し障るのではないかと心配したが、母にとっても有り難い事に変わりはない。

公平の親に電話して挨拶をしておく、電話を持って自室に籠った。

食事を終えた美月と公平、優佳も自室に戻る。

部屋に入り、美月は受験勉強を公平に進めた。

美月は邪魔にならないようにベッドを背もたれにして静かに雑誌を捲る。

机に向かっていた公平が、美月の隣に移動してきた。

美月が顔をあげると、公平はキスしてきた。

雑誌を持っていた手を公平の首に回すと、公平は美月を抱き寄せた。

公平は舌で美月の唇をつつくと美月は口を少し開いた。

公平の舌が美月の歯の裏や上顎をなぞる。

美月はゾクゾクして、公平の首に回す手に力を込めた。

公平の左手は美月の背中の溝をなぞり、右手は胸の膨みを撫で始めた。

美月の服の中に手は侵入してきて、下着の上から胸の頂きを執拗に刺激する。

美月は声が出そうになり、公平を引き剥がした。

引き剥がされた公平は美月の服をバツと捲ると、下着を少しずつそして胸の頂きを口に含んだ。

「公平ってば！」

名残惜しそうに服を元に戻しながら公平は

「土曜の昼間、久々に出掛けない？」

母を一人にしておけないのを解って、昼間、と言ってくれている公平の気持ちに応えたかった。

「うん。じゃあ朝から出掛けよう。」

夏も近づく七月の土曜日、生憎の雨だったが、自転車を駅の駐輪場に止めると、公平は既に待っていた。

手にはコンビニの袋を持ち、美月の手を引き改札を抜ける。

電車に乗り込むと、公平は美月の耳元に口を寄せて囁いた。

「今9時半だから、10時からのフリーの休憩行きたい。」

つまりは、10時からホテルに入ろつと言つ訳だ。

「買い物とか無いの？」と聞いても、首を横に振り、コンビニの袋を見せる。

「昼飯と飲み物買っちゃった。」

かくして二人は駅を降りると真つ直ぐホテルに向かう。

美月はこんな朝からホテルに行く人いるの？と気恥ずかしい思いだったが、公平の握る手の強さから、美月を必要としている公平の気持ちに免じて何も言わない事にした。

パネルで部屋を選ぼうと目をやると、10時を回ったばかりだといふのに空き部屋が4つほどしかない。

美月達と同じくフリーを満喫するべく、10時から来る客は多いようだ。

3階でエレベーターを降り、二つ目の部屋の前を通り過ぎると、カラオケを歌っているようなくぐもった声が聞こえた。

「ねえ公平、カラオケあるんだもんね。歌おうよ。」

美月は公平の腕に絡み付き、公平を見上げた。

公平はニコリと笑顔を向けながら部屋のドアを開けた。部屋に入り、テーブルに荷物を置いていると後ろから抱き締められる。

振り向くと公平は、待っていたように唇を押しつける。

一旦唇を離すと

「美月、猫みたいだね。腕に絡み付いて見上げられたら、廊下で襲いたくなっちゃったよ。」

そう言つて瞼を閉じた公平は、全てを吸い尽くすような熱いキスをしながら、美月の体を纏っている物を徐々に剥いでいく。

下着だけになった上半身を待ち切れないといった具合に撫で回し、美月のウエストを両腕で抱き抱えてベッドに移動する。

始めて見るこんなに強引な公平に、美月はドキドキしていた。

美月をベッドに降ろしたながら公平は、美月の背中に手を滑らせ、胸を纏う布をも取り去った。

美月は明るい部屋で露出した自分の膨みが恥ずかしくて、両手で覆った。

公平はその両手を頭の上で軽く押さえた。

美月の胸の頂きを執拗に舌で刺激して、美月は吐息を漏らす。

公平は美月のスカートも剥ぎ取り、最後に残った下着に手を付ける。公平のシャツにジーンズという服装は全く乱れていないのに、美月ときたら何も纏わず、公平の手に弄ばれているようだ。

公平は変わらず胸を愛撫し続けながら、美月の膝を自らの足で割って入る。

深い口付けで、美月の歯や舌をなぞられると、美月はぼうつとなった。

秘めた部分に指を這わせ、公平は美月の反応を探るように指を動かす。

ポイントを見つけたのか、公平の手が一点を狙って動きが荒くなる。声を出さないように口を結んでいた美月から、堪らず吐息と共に喘ぎが漏れる。

公平は美月の胸を舌で愛撫しながら、自らの服を脱ぎ捨て、枕元の避妊具を探り、自分のそれに装着する。

公平が美月にキスしながら、そつと美月の中に入ってくる。美月の手はシーツをぎゅっと掴んで、打ち寄せる波に身を任せていた。

今日の公平は力強い。

初めてした日から数回、交わったのだが、こんなに激しいのは始めてだ。

二回目、三回目は美月にはまだ痛みが少しあった。

気持ちいいと思える余裕はなく、公平の為にホテルに入るようなものだった。

だが今日の公平は美月の反応を見ているようで、見られている美月は恥ずかしくて熱くなるような不思議な感覚を覚えた。

「気持ちいい？」公平が耳元で囁く。

「…うん…っああ」

口を開くと声が漏れてしまう。

美月はまた口を結んだ。

公平は美月の足を肩に乗せ、自分の上体を起こす。

そして激しく動いたり、ゆっくりになったり…。

美月の足を抱えたまま様子を伺うように。

美月は堪らず喘ぎ声をあげてしまった。

一度激しく出てしまった声は止まらず、公平もそれに応えるように突然激しく動く。

何も考えらなくなった美月の頭は真っ白になった。

そして公平がぐったりと美月の上に覆い被さって、美月は何が起きていたのか思い出した。

息も荒く、公平は

「…美月…トんだ？」

「…多分」

「…良かった…」

痛がる美月の為、公平なりに勉強していたらしい。

そのせいで、美月の家にいる時に耐えるのが大変だったそう。

公平はこの後退室の6時まで、3回も頑張った。

公平は満足気に支度をし、ぐったりしている美月の腰に手を回す。

エレベーター内で公平が声を掛けた。

「疲れた？」

「公平は元気そうだね。公平のが疲れてていいはずなのに。」

「俺、毎週でも嬉しいかも。」

毎週…？と美月が思っていることにも全く気付かず、公平は一人でウキウキしているようだった。

こんな風に公平が感情を出すなんて珍しい。

きつと今日で自信がついたせいもあるのだろう。

美月は公平が可愛く見えて、チュッとキスをした。

7 ヤキモチ

木々が衣替えを済ませ、少し肌寒く感じる道を美月はバイト先へと自転車を走らせる。

いつものように薄いピンクのシャツにスカート、エンジのエプロンをつけ、挨拶を交わしながらケーキの並ぶガラスを磨く。

店長がやってきて、美月に声を掛けた。

「吉川さんは就職だったよね？」

「はい。でもまだ全然活動してなくて」

店長はそれを聞くと狭いバックヤードへ入り、すぐ戻ってきた。

「吉川さんはよく働いてくれるから、卒業後もうちで正社員になって働いてみないかい？」

そう言つてA4サイズの紙を渡した。

従業員規約と書かれた用紙には、給料などの細かい明細が書かれていた。

美月は考えてもいなかったので、黙って受け取った。

「親御さんによく相談してから返事してくれるかな。」

はい、と答えた美月にうんうんと頷くと、店長はバックヤードに戻っていった。

店長が来るのは週三日程度である。

あとはアルバイトと少ない正社員で店は切り盛りされている。

皆美月より年上で、美月は可愛がられている。

働き易い環境である。

この不況であり、やりたい仕事はまだ見付からない美月の中で、答えは決まっていた。

公平は受験が近くなっても変わらず水曜と土曜は美月の自宅に来ている。

しかし公平は前より随分変わった。

美月はやっと最近気付いたが、かなりヤキモチ焼きだったようだ。

美月の携帯が鳴る度に、誰？と必ず聞く。

公平がいる時に入るメールなどは、見せるようにしていた。

要らぬ疑いを掛けられて喧嘩になるのも嫌だったからだ。

前に一度、クラスの男子から、デートに誘われた事があった。

美月はもちろん彼氏がいる事を言って断ったのだが、一度だけでいいからとしつこくされた。

更には美月のバイト先まで顔を出し、バイトが終わるまで待つから送る、と言われて本当に迷惑していた。

公平はヤキモチ焼くのかな？と美月は軽い気持ちで、クラスの男子

の話をしてみた。

本当に迷惑だよー、と溜め息をつきながら公平を見やると、公平は黙ってそつぽを向いていた。

そつぽを向いたまま

「俺、バイト帰り絶対送る。」

「え？いいよ！だってもう何回も断ってるし、もう来ないよ。」

「そつという問題じゃない。」

公平はそつぽを向いたままだ。

「…学校にはそいつがいるでしょ？俺水曜と土曜しか会えないのに…」

つまりはヤキモチだ。美月は嬉しくなつて公平に抱き付いた。

「…公平とずっと一緒に居られたらいいのにな。」

公平もぎゅっと抱き締めてくれた。

それで美月の気持ちは伝わっただろうと思っていたが、実は公平は相当のヤキモチ焼きだったのだ。

高校最後の冬休みを間近に迎え、特に冷え込みの強い今年はみぞれ

や雪がちらつくことがよくある。

紗季と電話しながら、たまには二人で買い物に行かないかと話していた。

もちろん互いの彼の為のプレゼントを買いにいくのだ。

日にちも決まり、じゃあねと電話を切った。
すぐ公平に掛ける。

バイトの無い日に予定が入ったら、美月はすぐ連絡している。

「もしもし、公平あのね、来週なんだけど」紗季と買い物に行く旨を説明し始めると

「俺も行ってもいい？」

と公平は切り出した。美月は驚いた。

そんな事言うとは思ってもみなかった。

それに公平のプレゼントを貰うのに着いて来られてしまったら、元も子もない。

「たまには女の子二人で色んな買い物があるから、ダメ！」

「店の前で待ってるよ。」

「下着屋さんの前でも？」

食い下がない公平にイラストきた美月は、意地悪で言ってみた。
すると公平は

「それはさ、俺が行ったらずいからそう言っ訳？」

美月は驚いて言葉をなくした。

公平は、疑ってるのか？

しかし疑われる事など何もしていない美月は

「たまの紗季との買い物なんだから、行ってこいって言うのが普通じゃない？」

しばらく沈黙が続いて

「解った。」

とだけ響いて、電話は回線が途切れたことを告げていた。

公平の真意が、全く理解出来なかった。

しかし次の土曜日、公平はいつも通り美月の家にやってきた。

あれから意地になり、連絡しなかった。

今週は約束してはいないのに、公平はやってきたのだ。

「明後日紗季と買い物行くから。」

美月は譲るつもりはありません、という口調で、開口一番に言った。

公平は黙って美月の机にテキストを広げ、勉強を始める。

「英語の辞書貸して。」

公平は普通に話し掛けてきたが、目は合わせない。

沈黙が続いた。

しばらくなんてものではない。

初めての気まずい雰囲気に戻る訳でもなく、公平は勉強を続ける。

お昼を知らせる時計の音で、美月は昼食を用意しに黙って部屋を出た。

いつも美月が簡単に用意するのだ。

お盆に昼食を乗せて部屋に入ると、公平は椅子に座ったまま泣いていた。

美月は驚いて盆を落としそうになった。

何とか盆を小さなテーブルに置き、公平に歩み寄る。

「公平…、どうしたの？」

「…俺…すごい美月の事…好きなんだよ。美月が…思ってるよりずつと…」

美月は訳が解らず、座った姿勢で泣く自分より低いその肩を、ただ抱き締めていた。

「押さえ切れなくて…紗季ちゃんにまで…ヤキモチ焼いてんだ…。」

紗季にヤキモチとは！と驚く美月に

「どっか行っちゃったのかと思った…」

と公平は抱き付く。

「やだな、公平の馬鹿！紗季と公平のプレゼント買いに行くんだよ！」

美月より15cm大きい公平が、女の子にまでヤキモチを焼くななんて…と、美月は公平が可愛くなって、ぎゅっーと力を込めて抱き締めた。

「俺、家族とでも、美月と話してみたいには話さない。俺の事全部知ってるのは、美月だけだから。」

やっと泣きやんだ公平は、美月の胸に顔を埋め

「美月が小さくなって、持ち歩けばいいのに。」

「じゃあチュウとか出来ないじゃん。それは私がやだな。」

二人は今日始めて見つめ合い、おでこをくっつけ笑った。

8 長い春…決別

美月は幸せだった。

今という時間が、永遠に続くと思っていた。

今のこの想いが、永遠に続くと思っていた

美月はケーキ屋の正社員を決め、春休みが終わるまではバイト、四月からは正社員…社会人の一員となる。

ほんのり色付く緑達は、春の訪れを知らせ、仄かに膨らむ蕾達が旅立ちの季節を知らせている。

美月の春休みはもう目の前で、制服に守られていた子供の自分とはもうサヨナラだ。

学生の内には貯めたバイト代で免許も取り、12万で買った安い軽を¥100ショップの可愛い玩具で飾る。

そんな事もとても楽しい。

学生の内はこっそり近所を乗り回す程度だ。

公平は無事大学に合格し、春休みから教習所に通い出した。

公平のヤキモチは相変わらずで、美月は女友達と出掛ける機会がかなり減った。

なので春休みがチャンス！とばかりに、公平と予定の合わない三日間を使って、紗季と高校の友人と卒業旅行に行く事になっている。

公平は、わかった…と俯き加減で返事をしただけだったが、美月はこの機会を逃すことは出来ない！と、書類にも全て目を通して、公平が納得したと自分に言い聞かせる。

冬山は天気もよく、ボードをするには最適のコンディションだ。

行きの電車の中、公平からは何度もメールが届いた。

楽しんでますか？

今どこらへん？

旅行中、男と話したりしないでね。

…等々…美月は少しうんざりしてきた。

せっかく女の子同士で楽しくやってるのに、と溜め息を漏らす。

紗季は高校に入ってから、永山とは別れ、別の彼氏と付き合っている。

紗季の彼氏は一度たりともメールはしてきていない。

「また橋本君？」

昼食をとりながら、メールの返信を打っている美月に、紗季が声を掛ける。

紗季だけが高校が別なのだが、美月は紗季と思い出作りがしたかったので、皆に紹介して一緒に行く事にしたのだ。

「いい加減うざくなってきたよ。もう何回メールきたんだか。」

夜はこっそり持ち込んだ缶チューハイで乾杯した。

女5人もいれば、話は自然と恋バナで盛り上がり、耳はダンボになる。

彼のいない由美と棕子は興味津津である。

「美月は何年だっけ？」

「ちょうど3年か。」

「長〜い！」

声を揃えて皆が叫ぶ。

しーっと口々に言ってクスクス笑いあう。

「んで…、初は…？」

意味深な目を向けて由美が問い掛ける。

「えー！じゃあ…、済ませてる人は全員、せーので言おうよ！」

えー？と言いながらも、せーの！の掛け声で、由美以外の4人が口を開く。

高2！

高1！

先月！

中3！

「ちょっと待った！中3で誰？！」

美月が言って、みんなが見回す。

はい…とおずおず手を上げた棕子は、ちょっと顔を赤らめながら話し出す。

「中3の時に付き合ってたの、一コ上の先輩だったから」

女同士の暴露話は続き、学校の違う紗季もすっかり意気投合して盛り上がった。

そんな中、美月の携帯はメールの着信を知らせる小さな灯がずっと点滅していた。

携帯を置きつつ放しで話に夢中な美月は全く気付かない。

深夜3時まで宴は続き、床に入って携帯を開くと、公平から4回ほどのメールが入っていた。

相変わらず今は何してる？、との内容ばかりだ。
最後のメールはAM2:47。

「橋本君ですごいママだったんだね。」

紗季が隣の布団から顔だけ向けて話しかける。

「つーか、しつこくない？朝から何回もでしょ？」

棕子が美月の頭に浮かんでいた言葉を口にする。

美月は溜め息をつきながら答える。

「…ヤキモチらしいよ。女の子でも嫌なんだって。」

「美月が男と話してるとこ見せた〜い！」

可愛い顔して紗季が意地悪な事を言う。

結局また10分ほど話は続いたが、明日滑れなくなるからと無理矢理皆話を止めた。

案の定、翌朝は寝不足ながらも、ボードを満喫して帰路についた。

楽しい卒業旅行を終え、美月は帰った翌日からバイトだ。

相変わらず公平からの連絡は頻繁で、早く顔が見たい、なるメールが来るので、バイト帰りに会う事になっている。

バイトを終えた美月が待ち合わせ場所の駅前のファミレスに急ぐ。

時間に正確な公平は遅刻したことがない。
やはり待っていた。

店に入り、一番安いが美月のお気に入りのメニューを注文する。

公平も同じ物を注文した。

「はい、お土産」

甘い物が好きな公平の為にチョコケーキだ。

「…有難う。楽しかった？」

伺うような目で聞く。

「すっごい楽しかったよー！また絶対行きたい！」

美月は興奮覚め遣らぬ、といった笑顔で答えた。

公平は不機嫌そうな顔になり会話を続ける。

「俺というより楽しそうだね。」

美月は小さく溜め息をついた。

「公平も友達と行けばいいのに。友達と行くのはまた違っって！」

「俺は…いい。」

そっぽを向いた公平の機嫌を取ることにも面倒になり、美月は黙ってスケジュール帳の記入を始めた。

翌月のシフトが出たので、バイトと休みをチェックし、メモして公平に差し出す。

「はい、これシフト。土日のどちらかはなるべく休みにしてもらったから。あとは定休日が休み。」

そこで店員が注文したドリアを持ってきたので、美月は食べる事に集中した。

先に食べ終わった公平が

「あのさ、一緒に住まない？」

突然公平が口を開く。

「え？何言ってるの？公平のバイト日曜だけじゃん。生活できないよ？」

「もっとバイト入れるし…大学の内は半々までは無理だけど、なるべく出すから…」

美月は驚いた。

いつもお互い折半で出掛けている。
学生同士で奢ってもらう、なんて考え方を美月は持ち合わせていない。

それに学生同士でなくても、奢ってもらおうと考える人間は嫌いだ。

「それはさ、私が生活費出すって事？」

美月の怒りは突然沸点に上がった。

「大学出たら、今度は俺が全部出すよ。」

「その前に別れたら？」

「別れる？…別れるかもって思ってるの？」

「結婚してる訳じゃないんだから！先の事は解らないでしょ？公平が心変わりする事もあるかもよ？」

毎月小遣いを貰い、大学にも行かせてもらい、免許代も車だつて親に負担してもらっている公平に、稼ぐ事の大変さの何が解るのか。

それに今の状況で、母を置いて行く事は考えられない。

公平の身勝手さに腹が立った。

「今日は帰る。少し時間おきたい。」

美月はそう言ってレシートを掴んでレジへ向かう。

半々にしよう、というやり取りをするのも嫌だった。

美月は振り返らず自転車に跨がった。

家に着いて携帯を開いた。

いつもの待ち受けのままだ。

着替えを済ませ、しばらくしてから、置いて来た公平がどうしているか、心配になり電話してみる。

「もしもし…」

静かに公平が答える。

「もう帰った？」

「今…歩いてる。」

歩いて…？公平は自転車のはずだ。

「なんで？自転車は？」

「ちょっと歩きたいから。」

「…今、どの辺？」

「学校の先」

今9時だ。

店を出てから40分ほど経っている。

あれから学校まで歩いたのだろう。

ほおっておいてまた歩いて帰るだろうか…。

「今行くから学校で待ってて。」

電話を切りジャケットを羽織る。

公平の気持ちが重たくのし掛かっているように、車は低い唸りをあげて走り出した。

黙って車に乗り込んだ公平をさっきの店まで送る。
二人共無言だ。

自転車の前に車を止めると公平が口を開く。

「別れるなんて、口にしないでくれよ。」

「頼むよ…」

そう言い残して公平は車を降りた。

あれから一か月経ち、公平との仲は元に戻りかけている。

いつも通り休みには会い、美月の家にも来る。

唯一変わったのは美月の気持ちだ。

美月は前ほど公平に会いたいと思わなくなってる自分に気付き始めていた。

むしろ、紗季と会うことさえままならない状況に、ストレスさえ感じていた。

このままでは公平への恋愛感情を抱き続けられるか自信が無かった。

公平の気持ちの重さゆえの悩みを抱えたまま日々過ぎていく。

20歳の成人式の為、着物の展示会を見て来た帰り道、美月は結論を出す事を決めていた。

せめて一か月でも、自分の気持ちを確認する時間をもらわなくては。

このまま付き合っても、互いの時間を無駄にする事になる、そう思ったからだ。

公平が車を発進させると美月は口を開く。

「公平、ごめん。…私一人になりたい。」

公平は前を見据えたまま重たそうに口を開く。

「……別れたいってこと？…嫌だ。」

「私友達とも遊びに行きたい。自分の時間が欲しい。」

「行っていていいよ！いいから…別れないで？」

「いつもその度に嫌な顔されたり、遊んでる最中に何回も電話やメールされるの、キツイ」

「もうしない…だからお願い…」

公平の言葉を遮る。

「ごめん」

公平はハンドルを突然切った。

反対車線へ車は飛び出した。

対向車がクラクションを派手に鳴らした。

「公平！やめて！」

美月が慌ててハンドルを戻すと、縁石に乗り上げながら、運良くコンビニの駐車場に入って車は停まった。

「美月と別れたら、俺の生きてる意味、ない。なら、一緒に…」

なりふり構わず涙を流す公平が、それだけ言って嗚咽を漏らしながら泣き続ける。

美月は別れる事を諦める他なかった。

それから一年余が経ち、美月は21歳になっていた。

公平とはもう6年以上付き合っている。

美月はあれからもう一度、別れ話を切り出した事がある。

しかし公平の対応はほとんど同じだった。

コンクリートの塀を、血が出ても尚殴り続けた上、その血だらけの手で美月の手を引き、道路に飛び出そうとした。

美月はまた折れる以外に道は無かった。

それなら、せめて一か月時間をくれと話した事もあったが、公平の怪我が増えるばかりで、結果は美月が折れる事で毎回終わるのだった。

交際はそのまま正にダラダラと続いた。

もうすぐ22になる。

美月は諦めて、公平が大学を終えたら結婚してしまおうかと思った
りもした。

しかし、やはりこのまま付き合うことは、互いの未来の為になら
ない。

公平との未来に、希望を持ってない美月という公平の時間も無駄にな
る、そう思った。

それを決意させたのは、美月を想うあまりなのか、仕事先の食事会
の日…。

美月はたまたま携帯を忘れた。

メールを返さない美月に、自宅にまで電話がかかってきたそうだ。

携帯を忘れた旨を母が伝えると、公平は車で美月達が居そうなお店
をしらみつぶしに探していた。

二次会と称したカラオケを終え、午前1時を回って美月が自宅に帰
っていると、後ろから車がついてきた。

美月の後ろに続いた車は、自宅の前で停まった。

公平は降りてくると

「なんで携帯忘れるんだよ！ずっと探したよ！」
と抱き締める。

食事会と言ってあったのに、美月を探して5時間も彷徨っていた公
平の気持ちが悪すぎて、美月には重圧にしか感じられなかった。

美月は限界を感じていた。

例えどんなに公平が食い下がってきても、今回は曲げられない。

公平の自宅前で車を止め、外で待っている、と呼び出した。

公平は車に乗り込む。

先に口を開いたのは公平だった。

「…別れたい？」

「…」

「もう…どうやっても…ダメなの？」

「…」

美月の頬を雫が伝う。

止まる事を知らない涙は、ジーンズにポタポタとシミを作っていく。

公平は美月の手を握る。

「…解ってた。美月が離れてく事…前から解ってた…」

公平も涙を流していた。

「でも、俺がただこねれるから…美月は優しいから…いつも別れな
いって、言ってくれて…」

公平は鼻を噉り上げ、一息つくと続ける。

「じゃあ別れてあげる。でも条件出すからね。まずは…」

涙声の公平は、美月に車を出すように言い、行き先を告げた。

「もうこれで最後の我が儘。ホテル行つていい？」

…嫌いな訳ではない。ただ、自分の気持ちと公平の気持ちとの、温
度差を埋める術は多分…見付かる事はないのだ。

「うん…」

美月は流れる雫を拭う事もせず、ハンドルを握ったまま言葉が出な
い。

公平も自分の涙を気にもせず、美月の横顔を見つめていた。

公平は、中学の時の話を始める。

「中学のとき、美月の自転車に鎖巻かれてた時、本当はすぐ鍵の取
り方に気付いてたんだ。」

涙が止まった公平は、大きく深呼吸する。

「でも二人になりたかったから、わざと取れない振りした」

タレ目な目を更に優しく下げながら、笑顔で公平は楽しかった思い出を一つずつ話していた。

「俺、13から美月の事好きなんだなー！9年気持ち変わらない。長いなあ」

公平ごめん、と心の中で何度も唱えた。

心変わりした訳ではない。

まだ恋愛に不器用な公平を、受け止められる器が自分にはないのだ。

好き…。美月のそれは、好き…。

公平のそれは、愛…。それ以上かもしれない。

美月の耳には、最後の夜の

「美月…愛してる」

何度も何度も繰り返す、公平の声が切なく耳に残った。それが、美月に条件を守らせるのには充分な鎖だった。

公平の条件は、半年間は男のいる飲み会に行かない、彼氏を作らな

い事。

友達でいいから、公平と会う事、連絡を無視しない事、だった。

美月は公平と月一回くらい会い、カラオケに行ったりしていた。もちろん友人も一緒である。

公平が自ら友人を連れて来たりもした。

7年も続いた二人が破局した事に、周りの友人や中学の同級生は驚きを隠さなかった。

てつきり結婚するかと、というみんなの意見にも聞き飽きた頃、美月は何度目かの紗季との買い物に来ていた。

「美月さー、何かノビノビ！って感じたよね」

「うん！公平には悪いけど…。でもやっぱり縛られてたんだって、実感しちゃう。」

「橋本君との約束も、あと一か月切ったでしょ？さて！男探しに備えて、たくさん買い物しよー！」

紗季はウインクして美月の腕に、自分の腕を絡ませる。

紗季は専門学校で知り合った彼と付き合っており、来年結婚が決まっている。

紗季の花嫁姿はさぞ可愛いだろう。

今から美月は楽しみだった。

9 強気な恋

桜の花びらが、まるでボタン雪のように空から舞い落ちる。

満開を過ぎたピンクのハートは、惜しげもなくハラハラと風に舞っていく。

見上げた美月の頬にそつと触れてくすぐる。

公平と別れてから1年が経過していた。

公平は彼女を作った。

美月に一通のメールが届いて、それきり連絡は無い。

【半年、経っちゃったね。美月が戻ってくるかもって、ちょっと期待もあった。でも無理なんだね。寂しさに耐えられそうにないから、先日告白してくれたコと付き合ってみます。彼女は理解した上で、いいと言ってくれてるから。】

美月はホッとした。

公平は新しい一步を踏み出した。

それだけで充分美月の心は晴れた。

前より素直に、自分の気持ちを周りに伝える事が出来るようになったと思う。

公平という時には出来なかった事。

呪縛が解かれたように、美月の心が解き放たれていく。

舞う桜の花びらが、まるで美月の心模様を表しているようだった。

美月は変わらずケーキ屋で働き、50代半ばになった父は、だいぶ落ち着き、暴れる事も少なくなった。

ある日、スーツ姿の若い男がケーキ屋を訪れた。

今は交代で昼休憩の時間なので、店番は美月一人だ。

「ホールで一個、ナツコさんおめでとうつて、書いてもらえますか？」
「？」

「ナツコさんの字、書いてもらえますか？」紙を差し出す。

男は美月と目が合うと、動きを止めた。

どこかであったかな？美月は考えたが思い付かない。

「あの…、名前は…」

「ああ、すみません！」

男は慌てて名前を書いている。

「お誕生日でよろしいですか？彼女さん？」

紙を受け取りながら、美月はにっこり営業スマイルを向けた。

「いや、母のです。たまには孝行しないと。」

男はケーキを受け取ると、どうも、と一礼して店を出た。

この出会いが、新たな美月の運命を開くことになると、この時思いもしなかった。

翌週、美月が店内の掃除をしていると、ドアが開く音がした。

「いらつしやいませ」

美月は振り返り、ケースの奥に戻る。

手の洗浄を慌てて済ませ、客の前に立つ。

「あの…モンブラン一つ。」

「有難うございます。」

美月はケーキを一番小さな箱に詰める。

箱をケースの上に置き

「350円になります。」

そう顔を上げると、先日母にとケーキを買い求めた青年だった。

青年は、美月が箱に入れるのを待っている。

美月は声を掛けた。

「お母さん喜んでらっしゃいました？」

「覚えてくれたんですか。美味しいって喜んで食べてましたよ。」

青年はお金を払い、一礼して店を出た。

翌週、また青年はケーキを一つ、買いにきた。

「じゃあこれ。」

青年は新作を指差し、言葉を続ける。

「あ、昨日って休みだったんですか？」

「昨日いらしたんですか？うちシフトなもんで。昨日はお休み戴い

てました。」

「お姉さんいないと買いづらくて帰りました。男がケーキ一個つてのもね。」

ハハと笑って青年はケーキを受け取りながら続ける。

「お姉さんの次の休み、教えてもらえます？それ以外の日に買いに来ます。」

次回、とだけしか聞かない青年の誠実さに、美月は今月の休みと、最後に名字を記したメモを渡した。

どうも、と一礼して青年は店を出る。

それから青年はケーキを買いにちよくちよく店に寄る。

他愛のない会話をし、青年の住まいは五つほど先の駅だと言っただけ美月は知った。

また青年はケーキを買いにやってきた。

「ケーキ全種類食べましたよー。今日は…モンブランで。」

「本当に好きなんですわー！私も負けないくらい大好きですけど」

美月はにっこり笑う。

「あの、名前入れてもらえます?」

「これに?ですか?」

こんな小さいケーキに名前を入れる人に、美月はまだ会った事がない。

自分の誕生日とか?などと予想しながら美月はチョコペンを手で温める。

「あ、お金は払いますから」

「いいですよ。常連さんですから、これくらいサービスしますよ。」

チョコプレートを用意しながら美月は振り向く。

「何てお入れすれば?」

「あの、吉川さんの下の名前、お願いします。」

思わず美月は笑顔のまま、

「え?」と問い返してしまった。

「あ、無理ならいいですから。」

青年は特に緊張した様子もなくそう答える。

彼が緊張していれば、美月ももう少し、何かしら覚悟していられたはずなのだ。

しかしあまりにも自然に自分の名前が出たので、ただ驚いて固まっ
てしまった。

「あ…いえ、あの、私の名前、ですか？」

「はい、よければ。」

あ、はい、とだけ答え、【みづきちゃん】とうっかり自分をちゃん
付けしてプレートをモンブランに乗せる。

「それじゃ、みづきちゃん、また。」

…あの人【みづきちゃん】だなんて、親しげに呼んでいったなあ。

動転していた美月は、自分が【ちゃん】付けさせた事に気付いてい
ない。

数日後 今日のお店番は後輩の子と二人だ。

「山下さん、15分休憩行っておいで。」

「はあい。じゃ、行つてきます。」

美月はこのケーキ屋で6年近く働いている。

もう慣れたものだ。

バイトの時と合わせたら、7年以上にもなる。

ガラスケースを拭こうと前に回ると、カランとドアが開いた。

「こんにちは。」

「あ、いらっしゃいませ」

思わず

「あ」と出てしまった。

お客様なのに、と反省する。

青年がいつものスーツ姿でやってきたのだ。

「実は彼女が休憩行くの待ってたんです。タバコ3本で済みましたけど。」

そんな事を正直に伝えてくる辺り、美月に気があるのは確定だろう。

美月はドキドキしながら、タバコ吸うのか、と新たな情報を一つ記憶していた。

「今日はこれにしよう。」

メロンが乗り、夏季を意識した新作。

6月も終わるので、少し遅いくらいの新作だ。

「はい、有難うございます。」

美月は箱に詰める。

「みづきって、どう書くんですか？あ、ちなみに僕はさくま えいじ、です。」

ペンとメモを用意していたらしく、佐久間 暎司と記入している。

「美化の美に空の月です。」

美月は美しい、と説明するのが嫌いだ。

自分の身の程はわきまえている。

「これ、メールアドレスだけ書きました。よければメル友になりませんか？」

「え！メル友…ですか。」

「また来るんで、考えておいて下さい。」

そう笑顔で手を上げて去って行く。

強引という訳でもないが、押しは強いようだ。

年上かなあ？と美月は考えていた。

興味は沸いてきているが、メルアドを貰って、その日に返すというのも、気があると思われてしまいそうだ。

実際には興味が出てきた程度だ。
期待させるのも悪いし、次回また話してみたら考えようと美月は思っていた。

翌日佐久間はやってきた。

いつもなら数日空けての来店なのだが、連続は珍しい。

しかも私服で7：20に来店。
閉店間際だ。

「あの、タルト二つ下さい。」

美月はレジのシメに取り掛かっている途中だし、他にスタッフもいるので会話は特に無かった。

青年はどうも一礼して店を出る。

微かに香水が香り、なかなか上品そうなシャツにジーンズで、彼の趣味の良さを伺わせていた。

美月が着替えを済ませ、月極めの駐車場に向かう。

店で半分負担してくれるので借りている。

店から少し歩き始めた美月に、声が飛んできた。

「美月ちゃん！」

え？と振り返ると佐久間が走ってきた。

意外と背が高い。

「どこから出てくるのか解らなくて。良かった、こっちにいて。」

「待ってたんですか？」

「あ、大丈夫！ストーカーじゃないよ？」

佐久間はにつこり笑って

「向こうの公園のベンチでこれ食べない？食べたらずぐ帰ってくれていいから」

この人は少し強引だが、いつも美月に負担にならないよう、気遣ってくれている。

信用しても大丈夫だろうと、美月は佐久間に連なって公園へ向かう。

美月は自販機の前で立ち止まり

「私喉乾いてて。佐久間さんは何飲みます？」

「じゃ、コーヒーで」

佐久間はベンチに座ってケーキの箱を開けていた。

コーヒーを渡すと

「俺は美月ちゃんの事、いいなと思ってて。でも店でしか話さないから、店以外で話してみたかったんだ。」

美月にタルトを手渡す。

「あの、いただきます。」

美月はタルトに口を付けた。

何を話したらいいのか解らないので、とりあえず口に物を入れてみた。

佐久間は話しかけてくる。

「俺、重要なこと聞くの忘れてて。美月ちゃん彼氏いる?」

「彼は…いないです。」

モグモグしながら答える。

「じゃあちなみに歳、聞いていい?」

「23です。」

「あ、じゃあ同じ歳?俺5月で23だから。」

佐久間が【俺】と呼んでることに気付いた。
スーツの時は【僕】だったはず。

いや、それより…

「私、再来月24なんで、1コ上ですね。」

「ええ！？上！？有り得ねえ！」

佐久間が大笑いしている。

「美月ちゃんて絶対童顔だよー！俺、絶対下だと思ってた！」

実際美月は先月も補導されかけた事がある。
佐久間の笑いに緊張がほぐれてきた美月は、つい補導されかけた話をしていた。

「もー、失礼なんですよ！免許証見せたら、本当だ、ごめんねとか言ってた。」

「学生にねー！見えるよ、見える！」

佐久間は笑っぱなしだ。

30分ほど会話は続いたが、佐久間は饒舌だったので、会話が尽きる事はなかった。

「【お客さん】から、【知り合い】にはなれたかな？」

「はい。でも今日遅くなるって自宅に言っていないんで、そろそろ失

礼します。ご馳走様でした。」

ペコリとお辞儀した美月の目には、上着とよく合っている靴が目に入った。

本当にセンスいいなあ、などと感心していた。

「じゃあ、またケーキ買いに行くね。」

佐久間は電車で来たそうで、駐車場まで送ってくれた。

美月が先月買い換えた真っ青な車の前に停まる。

「意外だな！美月ちゃんて青好きなの？」

「そうですね？好きって言うより、昔から青い車に乗ってみたかったです。」

じゃ、と手を振り佐久間は帰っていく。

メル友の事には一言も触れていなかった。

美月の気持ちに任せてくれているのだろう。

一つ下だが、恋愛に関してはかなりの先輩のようだ。

翌週、佐久間はまた店を訪れた。

いつも通りケーキを選んでいる。

今は他のスタッフがシメの作業をしているので、会話はない。

ケーキの箱をケースの上に置こうとすると、佐久間が手を伸ばした。紙を握っている。

美月宛てらしく、差し出したままだ。

美月は笑顔で軽く頷いて、紙を受け取る。

佐久間が店を出ると、美月はこっそり紙を開いてみた。

【もうすぐ仕事終わりだね。よければ少し話したい。公園で待ってます。】

話くらいいいか、と美月はシメ作業を急ぐ。

急いでいる自分に気付いて、待たせてるから申し訳ないからだし！
と言いつける。

公園に着くと、佐久間はジュースを二本持ってベンチに座っていた。
一本美月に渡すと、キャップを開けて一口飲む。

「ケーキ屋は長いの？」

佐久間は話しかける。

「バイトも合わせると7年になりますね。」

「長いね！俺は大学出て今年就職。ちなみに○○大学。高校は○○高校。美月ちゃんは？」

美月は住まいも高校も地元な事を告げる。

それからお互いの事を笑いを交えながら話した。

「ちなみに彼女いない歴は3年。」

「私は1年ですね。」

彼女いない歴と言っていたが、きっと特定の彼女を作らず大学時代を過ごしただけのことだろう。

誘い慣れしてるような佐久間にそう感じた。

「またシフト聞いてもいい？」

はい、と頷いて、美月はスケジュール帳を出し、メモを外そうとした。

「いや…、出来たらメールで貰えるかな。」

美月はまだ、佐久間にメールを一度も入れてない。

こちらから入れると、期待させてしまうのでは、と思ったからだ。

「携帯番号は、美月ちゃんが心開いてくれてからでいいから。まずはメル友！」

「はい、じゃあ帰ったらメールしますね」

佐久間はまた車まで送ってくれた。

自宅に帰った美月は、早速休みをメールに打っていた。

ジューズご馳走様でした、と最後に付け加えて、送信する。

もしかしたら相当遊んでる人かもしれない。

余計な事は入れなかった。

すぐ返信が帰ってきた。

【美月ちゃん明後日休みだね？予定ある？】

美月はちょっと考えたが、八時くらいまでなら大丈夫とメールを返した。

【駐車場に車停めて大丈夫だよな？10時に駐車場で待ってます】

美月は返信を返さなかった。

どうしたものか考えていたからだ。

公平と別れてから、2回くらい合コンに行った事がある。

帰りに送るだの、何だかうさん臭い奴ばかりだったので、免疫のない美月は男と二人で会うのは避けていた。

男の友人は何人かいるが、向こうに彼女が出来たら絶対二人では会わない。

友人だと思っていた男友達から、告白された事もあった。

でもあっさり断ってからは、会っていない。

男と意識する人と二人で会うのは、公平以来久々なのだ。

しかし予定がないとメールを入れたのは自分だ。

美月は軽率だったか…と悩んでしまった。

休日、美月は服選びに没頭していた。

どこに行くのか解らないときは、ジーンズがいいのかスカートか、決まらない。

「ねー、優佳姉、電車で出掛けるならどっち？」

短大を出てから介護士をしている優佳は、今日は遅番で出勤だ。

優佳の帰りが10時近くになるので、美月が八時までには帰る。二人は必ずどちらかが夜家にいるようにしている。

「ヤバイ！遅刻しそう！電車？ならスカートでいいんじゃない？」

「サンキュー！」

美月はスカートに決めて車に乗る。

車を止めようと駐車場に入ると、美月のエリアに既に四駆の車が停まっている。

たまに勝手に置いている人がいるのだ。

管理会社にナンバーを連絡しようと車を降りて、少し車に近づく。

すると車から佐久間が降りてきた。

「あれ、佐久間さんの車ですか？」

「そう。ここまでどれくらいで着くかと思って、今日は車で来てみた。」

佐久間は車に乗り込むと、2台先の空いている駐車場に移動させた。

「車入れて。俺出すから。」

車は走りだし、今流行の邦楽のミュージックが流れ出す。

「どこか行きたいところある？」

「思い付かないです。」

美月は緊張していて、つい即答していた。

「じゃあ、映画行かない？俺見たいのあるんだ。」

佐久間オススメの恋愛映画を見て、車に戻る。

未だに緊張の解けない美月に

「好きな食べ物は？」
と佐久間が聞く。

「ケーキです。」

「いやいや！昼飯の時間だから聞いたのに！せめて腹に溜まる物答えようよ！」

大笑いする佐久間に、美月も照れ笑いする。

「あ…嫌いな物は特にないです。こってりでなければ。」

「じゃあファミレスにしよう！何でも選べるし。」

眩しそうにサングラスを掛けた横顔は、年下とは思えない。

車はログハウス風の建物の前に停まる。

《ハンバーグが自慢の店》

と書かれている。

「やっぱりここでいい？前に美味しいって聞いた事ある店だ。ここら辺って聞いてたけど、看板見て思い出した。」

「あ、全然構わないです。」

店に入る。

賑わった店内は、可愛らしいアメリカ物の小物が並ぶ。

注文して店員が去って行くと、少し沈黙が流れた。

美月は何か話さないと、と会話を始めた。

「大学の時って、合コンとかいっぱいありました？」

「え？合コン？合コンって言うのかなあ。まあ飲み会は多かったねー。美月ちゃんはお酒飲める？」

「確実に強くないですね。佐久間さんは？」

「好きだねー。でもお金かかるから、押さえて飲む。」

美月は飲み会となると、いつもビール一杯くらいで酔っ払う。

テンションが高くなるので、その後飲んでなくてもあまり気付かないのだ。

そんな話から会話は進み、美月は想像の中の大学生のイメージをつい口にした。

「合コンで《お持ち帰り》って、本当にあるんですか??？」

佐久間はクツクツと笑いを堪えているようだ。

「すごい直球。結構遊んでるコ多いから、あるある。美月ちゃんの話って、飽きないよ。」

という事は、佐久間もって事だろう、と考えを巡らせていると

「俺も、って思ってる？まあ言いたくないけど…あるねー。」

《無理!!》と心の中で大きくバツを作る美月がいた。

10 大人の恋愛

「ご飯食べ終わったらさ、ちょっと青春しない？」

美月は意味が解らず、首を傾げた。

「八時まではいいんでしょう？美月ちゃんに俺の印象が残ることしよう」

美月はますます解らなかったが、イタズラっ子のような笑顔を見せる佐久間は、それ以上説明するつもりはないようだった。

食事は美味しかった。美月はこの店が気に入った。

「あ、デザートは頼まないで。また次回って事で。」

佐久間は《次回》のところを強調する。

美月の緊張も解け、話は弾んだ。

「そつえば、ケーキに乗せるプレートって、必ず《ちゃん》付けるの？」

佐久間の質問の意図が掴めず、美月は普通に答える。

「いえ、誰に送るかで変えますよ。」

「そうなの？この間美月ちゃんの名前書いてもらった時、《みづきちゃん》ってなってたから。」

「え！？《ちゃん》付けてました！？」

佐久間はかつてないほど爆笑した。

「美月ちゃんて天然？言われた事ない？」

「…鈍感とはよく言われてますけど…」

「はー、飽きないよ。店で仕事してる時のしつかりさとのギャップがすごいね！」

そんな他愛ない会話をしながら車で移動する。

食事は佐久間が奢ってくれた。

美月が出すと言うと、次回奢って、と断られた。

美月も楽しかったので、次回があってもいいかと引き下がった。

美月は公平の事を思い出していた。
大概は半々で払った。

しかし美月が仕事を始めてからは、美月が奢る事のほうが多かった。

こんな事もあった。

出掛けようと美月の車に乗り込んだ公平は、ホテルに行きたい、と言った。

着いてお金を払う時、半分ずつがいつもモットーだ。

しかし公平は今日は2千円しか持ってない、と言う。

更に小遣い日までまだあるから、千円しか出せないと言うのだ。

ホテルに行きたいと言ったのは公平なのに、お金を出すのは自分。
そんな事も美月の心に隙間風を吹かせていたと、今気付いた。

大人な行動の佐久間に、美月は少し好意を持ち始めていた。

今まで好感は持っていたが、男の人、と警戒を崩さない美月だった。

しかし会話や些細なやり取り、佐久間の余裕ぶりに、大人を感じさせるには十分な魅力があった。

車が着いた先は、この間言ってた佐久間の母校である。

〇〇大学専用と書かれた駐車場に、迷うことなく車を停める。

「入っていいんですか？」

「講義はダメだけど、他は全然大丈夫。近くの会社員とか、学食利用しに來たりするんだよ。安いからね。」

美月は始めて入る大学に興味津津だ。

キャンパスなるものを歩き、大学生と擦れ違ふ。

自分は社会人6年生なのに、見た目はさほど差がない。そんな事も不思議だった。

大学内を案内してもらい、佐久間は自販機にカードを入れる。

そしてジュースを二本買ったようだ。

「お金入れないんですか？」

「大学専用のカードが使える自販機があつてさ、残金あつたの、さつき思い出した。」

「今やそんなにハイテクなんだ。」

目を輝かせている美月に、佐久間はニコニコしていた。

ベンチに座ってジュースを飲む。

「あとで学食行ってみようよ。アイスとかあるよ。」

「えー！ご飯だけじゃないんだ！？」

目を丸くする美月を見て、佐久間は嬉しそうに微笑んだ。

「本当いい。美月ちゃんは。俺初めて見た時に、何か、また会いに来ようって思ってたんだよね。」

佐久間は歩き出しながら続ける。

「それで次に行った時、覚えててくれてさ。この子だ！って思ったわけ。でも話す度に更に…何て言うか、元気になれるんだよね！美月ちゃんという。」

につこり微笑んで見下ろす佐久間に、美月は照れて俯いた。
人に褒めてもらえる事は、どんな事でも嬉しい。

ましてや、こんなに真っ直ぐに気持ちを打ち明けてくる佐久間に、傾かないほうがおかしいくらいだろう。

学食で二人はアイスを食べた。

陽は暮れかけている。

「これからどうしようか？」

「あ、じゃあ、ボーリング行きませんか？」

「最近行っていないな！行こうか！」

美月は昨日の夜、テレビでタレントが、ボーリング対決をやっているのを見たのだ。

自分も久々にボーリングやりたいな、と思ったのだった。

佐久間も同じ番組を見ていたそうで、話はそこからまた盛り上がった。

佐久間は考えてから行動するタイプらしい。

じーっと考えてから投げる。

逆に美月は体で覚えるタイプだ。

昨日のプロボウラーの話を思いだし、軽くイメージトレーニングした後投げる。

一本目こそフピン、とうまく投げられなかったが、二本目から美月はいきなりターキーをやらかした。

佐久間はびっくりしていた。

「美月ちゃん何者!？」

「昨日テレビでコツ言ってたから。」

「いや、聞くだけじゃ普通出来ないよ。運動神経いいんだね。」

「体育は5以外取った事ないです。」

とピースして見せた。

佐久間はその腕をぎゅっと握り、美月を自分のほうへ引っ張った勢いで立ち上がった。

「負けられん!」

目の前に佐久間の、甘い香水を漂わせる胸元があり、美月はドキドキした。

美月の前を通り過ぎて、佐久間はレーンへ向かう。

考えて、考え抜いた佐久間の結果は151、美月183だった。

帰りの車の中、話はまだまだ尽きなかった。

「プロボウラーになれるんじゃない？だってテレビ見ただけで183とか、普通出ないよ？」

佐久間は、さも解らない、といった具合に首を降る。

「運が良かったんですよ。いつもは120くらいでしたもん。」

「あ、そうだ。美月ちゃんのが年上だから、敬語やめようよ。次回からはタメ語だね。」

そうだった。

つい忘れてしまいそうになるが、佐久間は一つ年下なのだ。

佐久間は大学時代にしていたバイトで、車の頭金を貯めたそうだ。親名義でローンをして、今払っていると言っていた。でも親に頼らずに車を買ったことを、美月は偉いなあと感心していた。

「俺もシフト制だから、美月ちゃんと休み合うの、月末までないんだ。月末も良かったら、また出掛けない？」

「あ、じゃあ次回は私がお昼奢りますね。」

次回の約束をして、二人は八時前に別れた。

今日は楽しかった。

もつと佐久間と居ても、きつと飽きなかったろう。

美月はメールを打ち始め、今日のお礼と携帯番号を入れた。

それから3カ月ほど二人は、互いの友人を交えて遊んだり、飲みにいたりした。

何度目かの飲み会の時に聞いた、佐久間の暴露話では、やはり佐久間が遊んでいた話を大学の友達から聞いた。

「あんま不利になる事言わないで！」と佐久間は言い、美月に気がある事を隠す素振りもない。

佐久間の親友と会った時に聞いた、佐久間の過去の恋愛の話。

高校で出来た彼女と、佐久間は二年付き合っていたそうだ。

彼女は専門へ進み、そこで好きな人が出来てしまった。

別れを切り出された夜、佐久間は親友の前で泣き崩れたそうだ。

それから3年以上、佐久間は彼女を作らなかった。

美月は佐久間が本当に真面目な人なんだ、と感心した。

「月並みだけど、あいつ、本当にいい奴なんだよ。本気でぶつかってくるから、美月ちゃんも本気で見てやってね。」

親友はそう言っ、美月に微笑んだ。

出会ってから半年が過ぎ、秋の訪れを告げる鈴虫の音色を聴きながら、二人は佐久間の自宅近くを散歩していた。

佐久間の自宅に上がる事も何度目か。

佐久間は《友達》と紹介し、美月は佐久間の親と仲良くなった。

気さくないお母さんである。

佐久間は母と仲がよく、手先の器用な母をよく褒めていた。
母を

「夏子さん」と呼ぶのが面白い。

佐久間の自宅からの帰り、車に乗り込む美月に佐久間は話しかける。

「来月って連休取れる？俺の仕事、来月が一番休み取りやすいんだ」

「取れると思うよ。どこか行きたいところあるの？」

美月は特に何も考えずにドアを締め、窓を開けて答える。

「一泊で、どこか行かない？」

美月は瞬きを忘れて固まった。

《連休と言えば…そりゃ泊まりだよね…。》

見上げたままの美月に、佐久間の顔が近づく。

当たり前のように唇が触れた。

少し長いキスの後、佐久間の顔が離れる。

「じゃ、水曜の定休日絡ませれば、取りやすいよね。俺の連休決まったらすぐ連絡する。」

また軽くチュッとキスすると、佐久間は車から少し離れた。

美月はあたふたとエンジンをかけ、手を振っただけで車を走らせた。

キスしてしまった！！

美月はドキドキしながら車を走らせ、一泊かあ、などと想像を働かせながら帰路に着く。

数日後、佐久間から連休の知らせのメールが入り、2週目の水、木曜に決まった。

美月は自分が佐久間に惹かれている事に、とっくに気付いていた。

思えば最初のデートから、既に好意を持っていたのだ。

先日のキスで、《好き》と認識するのは簡単だった。

11 彼女

車は渋滞を抜けて、10月の少し色褪せ始めた景色を美月は眺めていた。

佐久間はナビも使わず、箱根までの道のりを迷う事なく車を走らせる。

「佐久間さん、箱根行った事あるの？」

流行の邦楽が流れる車内で、佐久間が一曲歌い終えたところで美月が切り出した。

「昔、二回くらい行ったかな？」

きつと元カノと行ったのだろう。
それ以上触れずに美月は窓を見やる。

「あ、ヤキモチ焼いてくれた？」

「今更ヤキモチ焼いても仕方ないでしょ。」

車が料金所の列に並んで停まる。

「美月ちゃん」

呼ばれて運転席に顔を向けると、佐久間は素早くチュッとキスをした。

佐久間にはっこり微笑んだ。

恥ずかしくて、美月が上着の裾を掴んでモジモジしていると、佐久間の手が美月の右手を掴んだ。

箱根に着くまで、二人は手を握ったままだった。

旅館に着いて、佐久間は散歩に行こうと促す。

佐久間とは調べしていて、少し勾配のある散歩コースがすぐ近くにあるそうだ。

二人は緑豊かな小道を歩く。

「マイナスイオンいっぱい有りそうだなあ。」

そう言いながら、佐久間は美月の手を握る。

美月は佐久間の歩幅に合わせて、少し早足で歩く。

見晴らしの良い場所に、赴きのあるベンチがあり、二人はそこに座った。

「今日から、俺の彼女でいいのかな？」

佐久間は美月の顔を見つめながら問い掛ける。

「…私、佐久間さんの事好きです。多分、佐久間さんの予想よりもずっと」

佐久間は重ねたままの美月の手を、自らの胸に置く。

「誓うよ。俺は美月ちゃんを悲しませる事はしない。」

真っ直ぐに美月を見つめ、美月の手を強く握る。

《この人とずっと一緒にいたい》

美月は心の底からそう思った。

旅館に戻り、温泉に入った。

混浴が無くて残念！と冗談を言いながら、佐久間は男湯に入っていく。

美月はゆったり温泉を満喫し、部屋へ戻った。

部屋には食事が用意されており、佐久間はビールを用意していた。

「美月ちゃんも少し付き合つてよ。」

小鉢をつつきながら、二人の会話も弾む。

雰囲気も手伝い、小さいグラスに3杯のビールを飲んだ美月は、ほろ酔いを通り越しそうだ。

食事が片付けられ、旅館の人が引いた布団に美月は俯せに寝そべる。

「いつでも寝れそう。」

目を閉じた美月の横に、佐久間が座った。

「まだ寝かせないよ。」

そう言って、ぐっと美月の手を引き、起き上がらせる。

抱き寄せられて、熱いキスを受ける。

熱い唇が一瞬離れ、佐久間と向き合う。

「いいんだよね？」

鼻と鼻が触れる距離で、佐久間は問い掛ける。

「うん…」

答える美月の唇を、佐久間の熱い唇が塞ぐ。

優しく唇を撫でる舌が、徐々に口内に入り、舌を絡ませてくる。

シュツと音がして、美月の浴衣の紐が解かれた事に気付く。

美月の胸を、大きな手が包む。

頂きを撫でたり、摘んだりしながら、唇は首筋を這ってゆく。

ゆっくり布団に倒れこむと、佐久間は

「好きだよ。」

と熱っぽく美月を見つめた。

いつの間にか下着のホックは外され、下着が取り外される。

佐久間の手際の良さに美月は驚いた。

そんな美月を余所に、佐久間の手は至るところに回される。

胸元に滑っていった唇は、頂きを口に含み、甘く嚙んだり、舌で撫で回したりしている。

空いた手はもう片方の乳首をいじくり回し、美月は吐息と共に「ん…」と声を漏らす。

「美月の喘ぎ声、燃える。」

佐久間はそう言うと、太股に手を這わせていく。

舌で胸を執拗にいらすらしながら、手は秘部を攻める。

膝が割って入り、美月の足は広く開脚させられた。

恥ずかしくて足を閉じようと試みる美月の足を、佐久間の足が邪魔をする。

今まで感じたことのない刺激を与えながら、佐久間の指は忙しく、確実に美月の一番敏感な部分を捕らえる。

「あ…ん…ん…」

美月は堪らず声を漏らし、枕を顔に押し当てる。

「指だけで、イカせてあげようか？」

そう言った佐久間の指は、美月の中にぐいっとう入ってきた。

美月の片足の膝を持ち上げ、佐久間は自分の肩に掛ける。

指は勢いよくピストン運動を繰り返し、押し広げるかのように動く。

片方の手は胸の頂きを刺激し、美月は枕に顔を埋めて、声を殺す。

そうしないと旅館中に響き渡ってしまいそうだからだ。

美月は何も考えられず、襲い来る快感の波に溺さえ浮かぶ。

「やっぱりダメ。」

佐久間はそう言うと、指を抜いた。

布団の横に、いつの間に用意したのか、ゴムの袋を破き、自分のそれに被せる。

美月の膝をまた肩に乗せると、佐久間の指は美月の中で暴れ出す。

美月の限界が近いことを見抜いた佐久間は、指の変わりに自らのそれを押し込んだ。

「うっ！」

ぐっと腰を押しつけた佐久間は、声を漏らした。

「美月の中、狭い。ヤバイくらいに気持ちいいよ。」

美月の片足は肩に乗せたまま、佐久間はゆっくり腰を動かす。

枕をどけ、美月に口づける。

徐々に激しい律動になったり、またゆっくりに。

美月の頭は既に真っ白だった。

「暎司って、呼んで？」

潤んだ瞳で美月は佐久間を見つめる。

「暎司…、好き」

「俺も、大好き」

体を密着させて、佐久間は美月の唇を、自らの唇で塞ぐ。

その瞬間、佐久間は激しく腰を動かし、声の出そうな美月の顔を、自分の肩に押しつけた。

佐久間は最後に大きく腰を打ち付けた後、美月の体にぐったりと倒れこんだ。

美月の体は、しばらく力が入らない状態に陥った。

12 彼女2（前書き）

佐久間の呼び方が、暎司に変わります。

12 彼女2

窓際でタバコを吸っていた暎司は、タバコを消して荷物を置いた場所に向かう。

暎司の黒いバックの中から、長細いリボンの付いた箱を取り出し、布団に横たわったままの美月の脇に胡座をかいて座る。

「これ、暎司の彼女になった記念。」

暎司はそう言っ、箱を美月に差し出す。

美月は浴衣を着直し、受け取った箱をゆっくり開ける。

中には小さなピンクの石が付いた、ネックレスが入っていた。

「ピンクゴールド。美月に似合いそうだったから」

美月と呼ぶのが、まだくすぐったい気がする。

美月がネックレスを眺めていると、暎司は手を伸ばし、箱からネックレスを取り出した。

美月の髪を片方にまとめ、首に掛ける。

「やっぱり似合うね。美月は色が白いから、ピンクが映えると思う。」

「有難う。ずっと付けたままにするね。」

美月は微笑んだ。

暎司の肩に頭をもたせ掛けて、目を閉じる。

二人は抱き合って眠った。

二人は周りの友人から、うらやましがられるほど仲が良かった。

仲が良い、とは、付き合い始めてからも、友人と遊ぶ事のほうが多いせいだ。

いつも周りを巻き込んで行動する。

お互いの友人を呼んで旅行に行ったり、カラオケに行ったり。二人で出掛ける事のほうが少ない。

二人の休みが重なる時は、美月は朝早くから暎司の家に行く。

家に入り込み、朝寝坊な暎司を叩き起こす。

叩き起こす、なら可愛いものかもしれない。

美月は寝ている暎司にダイブするのだ。

前に黙ってダイブしたら、さすがに怒られたので、

「暎司、おはよう！」と声を掛けてからダイブする。

暎司は寝癖の付いた頭で、視点を定めようと顔を擡げる。

「…おはよう。今何時？」

休みの日は美月が目覚まし代わりの暎司は、携帯もテーブルに置き
っ放しだ。

「今9時過ぎ。」

「あ、そう」

眠そうな目をしばたかせながら、暎司は支度を始める。

暎司の支度と朝食が終わると、10時近くになっていた。

「今日何曜日だっけ？」

「水曜。圭太君が休みだよ。」

圭太とは、暎司の親友である。

「圭太か。よし、拉致りに行くぞ。」

車に乗り、10分で着く圭太の自宅に向かう。

「あ、もしもし、圭太君おはよう。何してるの？」

彼女がいない圭太は、休みの日は大概一人で適当に出歩いたりする。

「今日予定ある？…CD借りに行くだけ？解った。今圭太君着いたから、着替えたら降りてきて。」

《えーマジ!?》と圭太がカーテンを開けて、窓からパジャマ姿で車を見下ろしている。

二人はこんな調子で、よく互いの友人を拉致していた。

更には姉の優佳までも拉致の被害者だったりする。

遊ぶお金がない、という友人には、バトミントンを持って公園に行ったり、とにかく二人は楽しく過ごした。

付き合っているも、チーム分けして対決する時など、二人は必ず敵同士になる。

恋人であり、よきライバルなのだ。

ちなみに暎司は、よくボーリングに行こうと誘う。
今日も違わずのようだ。

「CD借りたらボーリングだ！今日こそは、美月を負かす！」

「え！私バトミントンがいい！圭太君に前回惨敗なんだもん。」

結局多数決でボーリングに行き、暎司144、圭太150、美月171で美月の圧勝だ。

負けた二人がファミレスで奢る。

美月は当たり前のように、圭太の隣に座る。

「本当お前ら面白いよ。」

圭太は大口を開けてご飯を押し込んだ。
モグモグしながら続ける。

「これ、ハタから見たら、俺と美月ちゃんがカップルだぜ？お前らが隣同士で座るの見た事ねえよ。」

と笑っている。

「いや、奴は敵ですからね。」

美月はそう言って、暎司に向けて指鉄砲を作って、打つフリをする。

圭太は突然真剣な目をして、美月の肩にポンと手を置く。

「つーか美月ちゃん、プロボウラー目指せば？毎回１８０近く行くでしょ？」

「真っ直ぐしか投げられないプロは微妙でしょー！それより圭太君、バトミントンのプロ目指せば？」

圭太と美月の会話は弾む。

圭太と美月が肩を組んで、じゃあプロ目指すか！とやっているところに、暎司は

「プロね。君達、吉本のプロに向いてると思うよ？」

と二人のやり取りを聞いて苦笑している。

楽しいだけであつという間に一年が経った。

冬は雪山、春は公園、夏は海…。

どれだけ暎司と一緒にいたんだろうか？

しかし、全く飽きる事がない。

次の約束をして別れ、車に乗り込む美月に、人の目も気にせず必ずキスをする。

友人の前では恋人を意識させる行動は全くないのだが、二人になると、すっかり恋人を感じさせてくれる。

眠りにつこうと目を閉じると、さっき別れたばかりなのにもう既に暎司に会いたい、と思っている自分がいる。

この一年で、美月は一つ、絶対の自信を持てるものを得た。

暎司が好き。

…この気持ちは、絶対誰にも負けない。

はたから見ても、二人はラブラブには見えない。

仲が良い、と表現されるのだ。

でも美月には、想いが重なるように、互いを必要とし合っているのを感じていた。

おじいさん、おばあさんと呼び合うようになって、きっとこの人と一緒にいる。

そんな事が当たり前に思える。

窓の外には、陽の光をキラキラ反射させながら、遠い地平線が見渡せる海が広がる。

まだ紅葉には早いが、いつか見たような、少し色褪せた緑が、美月の心に小さなぬくもりを宿す。

ちょうど一年前に、箱根に行った事を思い出していたのだ。

今は京都に向かう新幹線の中、二人は手を握り合って景色を眺めている。

この先も続くだろう幸せを噛み締めながら。

幸せに満ち溢れている美月に、大きな黒い闇が忍び寄る事を、誰も止める事は出来なかった。

13 野獣

この日が来てはいけなかった。

美月にとって、悪夢のような、この日が…。

訪れた春を歓迎するかのように、爽やかに晴れた3月の終わり。

美月はケーキ屋でいつものように働いていた。

「美月姉、今夜飲み行きましょーよ!」

「今日? まあ予定は無いけどさ、誰と行くの?」

店で一番若い23歳の山下さんは、今時の女の子だ。

エクステを付けた髪は、腰まで届きそうに長く、濃く引いたアイラインはつけ睫毛を一層際立たせている。

「エリが、美月姉と飲みたいって。超いい人〜! っていつも言うてるんですよ!」

暎司と休みが合うのは1週間先だ。

遊びにも行ってないし、たまにはいいかと美月は軽い気持ちで決め

た。

「男の人いない？」

「え！呼べるよ！呼ぶ？」

「いやいや、逆。男の人いたらパス。」

「今日はエリと二人！じゃあ決定だ！」

山下さんは仕事中にも関わらず、飾り付けた携帯を取り出し、メールを打ち始めた。

仕事が終わり、駅前の居酒屋に入る。

「姉さんー！私姉さんのファン1号ですから！」

エリが美月に抱き付いてくる。

実はエリは、美月の中学の後輩である。

山下さんを訪れて、ケーキ屋に顔を出した時、エリは驚いて美月に駆け寄り、美月に貰った中学のブレザーを未だに持っている、と興

奮気味に話した。

当時3年だった美月は、バレー部の1年のコが、いつも練習相手がいない事にふと気付いた。

雨で陸上部が体育館で部活をする時、何度か目にしたのだ。彼女に声を掛けてみた。

「相手いないの？私今順番待ちだから、相手やるよ。」

体育で囓った程度だが、運動しか能の無い自分の事だ。何とかなるだろうとボールをトスした。

彼女ははっきり言って、運動が出来ないようだ。囓った程度の美月のほうが上手い。

しかし一生懸命ボールを返そうとする彼女に、美月は何故か指導者になり始めていた。

「手が伸びてるからトスが上がらないんだよ。膝曲げて、腕曲げてボール待っててごらん？」

するとなかなか良くなった。

「何だ、出来るんじゃない！続けて20回目標ねー！」

美月は自分のバーベルの順番が、とつくに終わっているのにも気付かない程マジだった。

「有難うございました。」

目標の20回はラクに超えられるようになり、後輩は笑顔で駆け寄る。

「バレー面白いなあ！何か飛び込みで相手してもらってごめんね」
自分が楽しんでしまったので、美月はそう答えた。

「いえ、おかげでトス上手くなりました！」

「上手くなれました、だって！いくらやっても上手くななんないっつの！」

4人で固まっていた女の子が、次のレシーブの練習の為に移動しながら呟いた。

「本当ー！鈍臭いのは直らないよねー！」

ねー！などと他の3人が輪唱する。

「今トス上手くなってたの、見えなかった？」

美月はニコニコしながら4人に近付く。

「人には向き不向きがありますから。陸上部なのに先輩のほうがり手いし！」

キャハハハ、と4人は笑う。

美月はイライラしてきて、3年のバレー部の友達に小声で声を掛けた。

「あの子達、いつもああなの？」

「何かねー。彼女達がやるから、他の子も、みたいな感じでさ。」

うーむ、と美月は一旦考え、トスを一緒にやっていた彼女に話しかける。

「陸上は興味ない？」

「え？陸上…ですか？」

「よければうち来れば？こいつらと部活やるより楽しいと思うよ？」

と4人を指す。

「…はい、行きます！」

「じゃ決定！副部長の吉川です。一番、可愛がってあげよう！」

「陸上だって！100m20秒くらいかかるんじゃない？」

キャハハハとまた笑っている。

美月はうっかりキレてしまった。
父親に言う口調で一喝したのだ。

「一生懸命やってるのに…馬鹿にすんじゃねえ！てめえらすげえ格好わりいぞ？そんな事も気付かない？」

4人はシーンと押し黙った。

それを見ていたのがバレー部にいたエリだったようだ。

美月はバレー部から引き抜いたあかりちゃんを可愛がった。

それが余計にエリを感動させたようだ。

そんな美月の武勇伝もつまみになり、3人は出来上がりかけていた。
酒の飲めない美月はのんびり飲んでいたのだが、時間も手伝い、チユーハイを4杯近く空けてしまっている。

時間は11時。

3時間も飲み続けているのだ。

そこへ隣の席にいた男が話しかけてきた。

「女の子3人だけ？こっちも3人だし、一緒に飲もうよ」

「ごめん、パス。彼氏に怒られるから」

と美月は断った。

しかし彼らは図々しかった。

「いやいや、冷たくしないでよー！」

ビール片手に、3人の脇に勝手に座る。

既に誰狙いか決まっていたらしい。

しかし結構酔っているエリは

「ナンパされてナンボ、ですよ！姉さん」

既にあまり呂律の回らない口調で答える。

エリと山下さんは、隣の男と話し始め、美月は仕方なく、いくつ？
仕事何してんの？と隣で質問してくる男を見た。

細長い顔にサングラスを掛け、どこを見ているのか解らない。

「30歳。仕事は婦人警官。」

ぶつきらぼくに答えると、え？マジ！？とサングラスはちょっとひいた。

「姉さん笑える〜！」

とエリが言ったので、サングラスも嘘と解り

「いーねー！その冷たさ！俺さつきから、姉さんにラブ光線出して
んのに、全然こっち見てくれないんだもん。」

「丁重にお断りさせていただきます。山下さん、エリ、今日は帰ろう。」

えー！と言う二人に、気に入ったならメルアドでも教えとけ、と言
い支度が整うのを待つ。

突然サングラスが席を立つ。

「せっかく隣に座ったのも縁なんだし、ここは俺らが！」

と勝手にレシートを持って行ってしまう。

美月は慌てて後を追うが、酔ってブーツを履くのは時間がかかる。

支払いが済んでしまった。

美月が札を出し、追うが男は店を出てしまう。

二人も心配だし、仕方がない、と店に戻ると二人は男と腕を組んでいく。

「姉さん、エリ、彼氏候補出来ました。」

私も！と山下さんまでも腕を絡めている。

早っっ！！と美月が呆気に取られていると、2組は店を出た。

さっきのサングラスが車を回していた。

「車まで送るよ！俺の8人乗れますから！」

2組は乗り込む。

美月も仕方なく後に続く。

「姉さん、車どこですか？」

「…あつち。」

美月は必要最低限しか会話をしない。

後ろの2組は、イチャイチャしているようだ。

会って30分も経ってないのに、遊んでる子はそんなモンなのか？と美月は考えてしまった。

「じゃあカラオケ1時間！これで行きましょう！」

美月の渡した札を持ってサングラスが言っている。

イエーイ！と後ろは盛り上がっている。

そんなノリに付いていけない美月は、どうあの二人を連れて帰ろうかと考えていた。

キーレスでドアを開けると、サングラスは自分の車を降り、美月の車に乗り込んだ。

「ちょっと。そこは彼氏の指定席ですから。」

美月は冷たく言う。

何にしてもしつこい。

美月はうんざりしていた。

サングラスは気にした様子もなく、後部座席に移動している。

「勝手に乗らないでよ。」

若干キレそうな美月は、低い声で呟くように言った。

「俺マジで姉さんに惚れそう!」

意味が解らない。

サングラスの車は先に発進してしまった。

「ちよつ!ちよつと!行っちゃったんだけど!どこのカラオケよ!」

「姉さんも早く!」

とサングラスは促す。

美月は後部座席にサングラスを乗せて、会話もしたくありません、と言った具合にルームミラーを自分に向ける。

「俺シンゴです!27歳!」

美月より上だったらしい。

サングラスで年齢もよく解らなかったのだ。

色々聞いてくるが、美月は山下さんの電話を鳴らしているので無視

だ。

電話は繋がりに、美月の心配を余所に、二人は早くおいで、と言ってるくらいだった。

そこへシンゴの携帯が鳴る。

何やら話しながら、道順は指で差し示す。

着いた先は家だった。

「はい着いたー！シンゴとタカシの家ー！」

「はあ！？聞いてないけど！？」

美月は既に沸点だった。

車を降りると、シンゴの座っている後部座席のドアを開け、胸倉を掴んで外に引っ張り出した。

「二人はどこ！！」

シンゴは家を指差し、

「ここ。一応アパートで一階が俺、二階はタカシ。あ、タカシはさっきの黒のジャケットのね！」

見ればシンゴの車らしき物が停まっていた。

ドアを開けると、二人の楽しげな声が聞こえ、美月は胸を撫で下ろす。声のするほうに行くと、2組は相変わらずくっついていてる。

「子供じゃないんだから、よく考えてからにきなさいよ。」

それだけ言うと、二人は

「はあい」と言って、ゲームに興じている。

二人に帰りはどうするのか、と聞くと、俺が送る、近くに駅もある、とサングラスが割って入る。

と言っても、もうサングラスは掛けていなかった。

二人も同意し、帰る気は全く無い。

美月が促しても、美月を付き合わせたら悪いし、帰っても大丈夫だと言う。

野獣の中に置いていける訳がない。

仕方なく、美月は玄関で座って待つ。

シンゴが小さい瓶ビールを持ってきた。

「美月ちゃん！どーぞ！」

何で名前を！？と睨んでいると、エリから聞いたのだと言う。

ケーキ屋で働いている事もバレていた。

ビールは苦手だが、こんな時は飲むほうがラクだ。

レモンの味がして、意外に飲みやすかった。

「レモン果汁入れて、ジュースで割ったから、飲みやすいっしょ？」
とシンゴは笑顔だ。

美月は無視してビールを飲む。

喉が乾いていたので、飲み易さも手伝い、一気に半分くらい飲んでしまった。

シンゴは美月が気に入ったようで、彼氏のことやら聞いてくる。

心持ち酔ったのか、美月は聞かれた事にたいして、必要最低限で答えていた。

ビールはほとんど無くなった。

「美月ちゃん、俺マジで惚れそうかも。」

いつの間にか、シンゴは美月の隣に座っていた。

美月は自分がフワフワと浮かぶような気がして、とりあえず立って

みた。

しかし立てない。

「美月ちゃんて酒弱い？スピリタスも少し入れちゃったんだよね。」

そりゃなんじゃ？と思いながら、美月は立ち上がろうとする。

しかし立てない美月を、佐久間は立たせる。

水飲もう、と台所に連れられて、コップを渡される。

コップを持つ手が二重に見える。

口元まで行かないコップに、シンゴが手を伸ばした。

「飲ませてあげるよ」

シンゴはコップの水を口に含むと、美月に口移ししてきた。

反応の遅い美月は、逃げるのも遅く、口の脇から流れる水でキスされてるのに気付く。

顔を背けてシンゴの胸を押すが、酔った体は言う事を利かない。

「マジで、俺の女になってよ」

シンゴは美月を押し倒し、唇を塞ぐ。

美月の抵抗は抵抗と呼ぶほどにはならず、徐々に酒で自由が利かなくなる腕で、虚しく押すだけだった。

少し眠ってしまったのか、意識のはっきりしない美月は、気持ちが悪くなってきた。

しかし目の前の裸の男は美月の上にのし掛かり、ごく様子もない。

《もうダメ、気持ち悪い。》

美月はトイレを求めて男から離れようとした。しかし男は美月のウエストを掴んで逃がさない。

美月の意識がまた遠のく瞬間、激しく腰を動かし続けたシンゴは、テッペンまで達していた…。

美月の意識の無い内に、一体何度犯されたのだろうか。

明け方目を開けると、ティッシュがあちこちに散乱していた。

裸の自分とシンゴ、そしてたくさんの丸めたティッシュ。

美月はガンガン割れるように痛む頭で理解して、放心していた。

美月はシンゴとベットに寝ていたが、美月の衣服は台所に落ちていた。

何でこうなってしまったのか、全く解らない。

美月は自分が軽率だった事を悔いた。

衣服を身に着け、確たる証拠のティッシュを全てゴミ箱に捨てた。

玄関の違う二階にそつと上がると、衣服をちゃんと着ている2組は、それぞれ仲睦まじく寄り添って寝ている。

やられてないか。
良かった。

美月は自宅に向かった。

吹き出すような後悔の雫を拭く余裕もない。

《死んでしまいたい…。》

美月は車を寄せ、

「あー！」と大声で叫ぶと泣きじゃくった…。

14 亀裂

外はどんより重たい雲が広がり、今日は夕方から雨が降るらしい。春の暖かい陽気は去ってしまったかのように、少し肌寒い。

美月は店内の床に、ワックスを掛けている。

客が来るので、1m四方くらいを拭き、塗る、を繰り返す。

埃を立てないように雑巾で行う。

美月は一心不乱で床を磨いていた。

今朝、暎司からメールが来た。

昨日後輩と飲みに行く事をメールしてあったので、楽しかった？と書かれたメールが入って来た。

美月は、次の休みは予定が入ってしまったと、嘘のメールを返した。

暎司の顔を見る。

それは別れを切り出すことに他ならない。

許してもらおうとも、もらえとも思っていない。

しかしまだ、美月は別れを切り出す、その理由を言う勇気がなかった。

た。

仕事が終わって、美月は着替えを済ませて車に向かう。

車の横に、男が立っていた。

「あ、美月ちゃん」

男は美月に話し掛け、駆け寄る。

この声は覚えがある。

昨晚聞いた声だからだ。

美月は無視して車に乗ろうとした。

「ちょっと待って。」

美月の腕を掴む。

「話くらい聞いてよ。」

昨日から冷たくされ続けているのに、懲りない男だ。

「
…」

美月は無言でコウジを見据えた。

「彼氏、本当にいるの？」

彼氏、と言われて、美月は目を伏せた。
が、すぐにコウジを見据える。

「彼氏に言うの？ 言うてどうするの？ 別れるの？」

コウジは質問責めだ。

「別れようが別れまいが、貴方には関係ない。」

美月は手を振り払い、車に向かう。
駐車場なんか教えなきゃ良かった、と後悔した。

「別れたら、俺の女になれよ。」

また美月の腕を掴み、足を止めさせる。

「悪かったと思ってる。酒飲めないとは思ってなかったし。でもあんたとこれで終わりたくないんだ。」

「……私は二度と会いたくないわよ！二度と……」
と、振り向きざまにコウジをひっぱたいた美月の言葉は途切れ、目を見開く。

そこにはスーツ姿の暎司が立っていた。

コウジは察したようで、暎司に向かい合う。
「彼氏さん？だよね。すいません。昨日酒飲ませてうちに泊めました。」

すみません、とコウジは頭を下げる。

「でも、俺、マジになっちゃったから」

と顔をあげたコウジに、険しい顔を向ける。
言葉は無い。

「騙して強い酒飲ませて、グタグタの彼女抱きました。殴って下さい。」

暎司は、コウジの胸倉を掴んだ。

少しそのまま睨み付けていたが、暎司は憎らしい男の胸倉を掴んでいた手を、乱暴に離れた。

殴っても仕方ない、そんな表情だ。

コウジは美月に振り返る。

「明日また来る。俺の女になるまで、諦めないから。」

コウジはそう言うのと去っていった。

美月は零れそうになる涙を堪えた。

泣く訳にはいかない。泣きたいのは暎司のほうだろう。

「暎司……」

美月は抱き付いた。

抱き締め返してはもらえない。

それでもこのぬくもりを、少しでも記憶に残しておきたかった。

「暎司……ごめんなさい。言い訳のしようもない。」

暎司は黙ったままだった。

「言い訳したくても、記憶もない。こんな形になってしまっごめんなさい。」

美月は暎司から名残惜しそうに離れ、車に乗り込んだ。
車を発進させる前に、一言呟いた。

「……サヨナラ」

あれからウザイ男コウジは、しょっちゅう美月の車の脇で待っていた。

「彼氏と別れたんなら、俺の女になれよ。」

いつでも上から目線だ。

もう7回ほど言われたろうか。

美月は来られるのも迷惑なので、今日は無視せず、しっかり断る事にした。

「本当、何回言われても無理です。女の子酔わせて襲っちゃう人と

は、絶対、付き合えません。」

「いや、マジだから抱いたんだよ。責任取るつもりだからに決まってるじゃん」

「取らなくていいです。しばらく顔出さないでもらえませんか？」
すみません、と美月は頭を下げる。

コウジはムツとしていたが、何も言わず帰っていった。

暎司からはもう二週間以上連絡がない。

美月からもしていない。

来月は暎司の誕生日があるのに、彼女ではない美月は、何も出来ない。
い。

こんなに愛してるのに、もう何も出来ない。

気付けば、美月は愛していた。

ただ一緒の時を過ごせるだけで、幸せだった。

そんな些細な思い出に、自然と涙が零れる。

「暎司…」

名前を呼ぶだけで、更に涙は止めど泣く流れる。

何も知らない山下さんは、また飲みに行きましょー！と誘ってくる。

何でもないフリをするのが、こんなにキツイことだとは思ひもしなかった。

暎司とダメになった事は、まだ誰にも言えてない。

言ったら、自分も認めてしまうから…。

こんなに好きなのに、別れたのだと…。

カラン、と開くドアに、暎司の姿を求めてしまう。

あれから一月以上が経つ。

しかし未だに暎司が店を訪れてくれるんじゃないか、と期待を捨て切れない自分がいる。

《あいつの策略にはまった自分が悪い。》

そう思っても、被害者意識が抜けないのだ。

あの時コウジは、ジュースで割った、と言って強い酒を入れていた。ならば、最初から言うてくれれば、美月は絶対に飲まなかった自信がある。

暎司がそれを汲んでくれて、美月は被害者だと言ってくれるんじゃないか、そんな期待が拭いきれず、美月は待ってしまうのだ。

そんな期待も虚しく、閉店作業を終え、店を出る。

明日は暎司の誕生日だ。

美月は意味もなく、休みを取っていた。

いつも通り、母と二人で夕飯を食べ、テレビを見ていた。

最近真っ直ぐ帰る美月に頼り、優佳はよく出掛けている。お互い様なので、美月も気にしていない。

もう、一月以上使っていないメールアドレスを出し、メールを作る。

12時になったら、せめて一番のりで、おめでとう、と伝えたい。

それもダメだろうか…、と悩みながら、メールを作成している。

その矢先、メールの着信が来た事を告げるメロディが流れる。

この着メロは、暎司からだ。

慌ててメールをチェックする。

【話がある。誕生日前に話終わらせたいから、これから行く。】

絵文字も無く、必要な文字だけを連ねた文面。

10：30だ。

父は既に寝ている。

酒が入っているので、起きることはない。

美月は解った、とだけ返信を入れ、直ぐさま支度に取り掛かる。

母に暎司君とド〇キに行ってくる、と言い、家の外で待つ。

今から何を言われるのか。

罵られても、このままでいるよりいい。暎司の顔が見れる。

暎司の気持ちに聞ける。

今はそれだけでいい。

15 暎司の決意

時間は一月前に戻る。

暎司は美月の車のある駐車場に向かっていた。

今朝のメールで来週の休みは会えない、と連絡がきた。

暎司は美月にピアスを渡すつもりだった。

先日珍しく二人で出掛けた際、美月が気に入ってずっと見ていた。しかし美月は買わなかった。

¥1,480という値段が問題な訳ではない。

自分には可愛い過ぎて似合わない、と言う。

美月に

「車に忘れ物をした」と告げ、ピアスを買いに戻る。

次回会った時に渡して、驚かせようと思っていた。

しかし休みに会えなくなったので、今朝持って出たのだ。

自分がプレゼントしたなら、喜んで美月は着けるはず。

今日は残業もない。

美月の仕事は7：45には終わるので、駐車場で美月とかち合うはずだ。

急ぎ足で駐車場へと向かう。

駐車場の見える辺りまで来ると、美月が男と話しているのが見えた。

その険悪そうなムードに、思わず暎司は足音を殺して近付く。

「別れたら、俺の女になれよ」

《こいつ誰だ？》

車へ向かう美月を呼び止め、奴の続ける言葉は、一つの真実を物語っているように聞こえる。

早鐘のように鳴る心臓を押さえきれず、早足で駐車場に入る。

美月が振り向きながらビンタをくらわして、自分に気付く。

目は見開いて、今にも涙が零れそうな美月を見つめる。

何があったかは、その行動と表情を見れば、想像がつく。

男は言葉も選ばず、ブスブスと暎司の心にナイフを突き刺して行く。

暎司はショックで何も言えなかった。

そして何も出来なかった。

「サヨナラ」と告げた美月の車が動く前に、駅へ向かって歩き出した。

あれから何度も美月に連絡をしようと思った。
だが、きつと責めてしまう。

美月を知る者ならば、美月が自分から酒を煽るはずがない事は、誰でも解る。

自分は飲まず、送迎まで買って出るくらいだ。

更に、自分と付き合っているのに、男の家に泊まる…。

有り得るはずがない。

美月は本当に騙されたのだろう。

奴はわざと二人が破局するように、淡々と言葉を告げた。

今美月と連絡を取っても、《別れ》が目に見えていたので、暎司は時間を置くことにしていた。

久しぶりの一人で過ごす休み。

美月のいない休日は、空っぽと呼ぶのが相応しい、とさえ思った。

そんな休日を何度か過ごし、母がふと暎司に声を掛けた。

「美月さん最近来ないのね。」

今喧嘩中だから、と最もな回答をした。

「嫁に来てもらうなら、あんな子がいいのに。早く仲直りしなさいよ?」

暎司は結婚というものを意識した事がなかった。

しかし、突然閃いたように、母の言葉に動かされた。

ちょっと出掛けてくる、と暎司はショッピングモールへ車を向かわせる。

二つで4万の、シンプルなペアリングを買った。

暎司の誕生日はもうすぐだ。

きっと美月は自分からの連絡を、絶るように待っているはず。

暎司に迷いはなかった。

美月は黙って暎司の車に乗り込む。

会話が切り出せない。

どこに向かうつもりなのか、暎司は車を進めていく。

もう20分程走っている。

「俺の誕生日、あと1時間なんだけど。」

「…うん。」

「プレゼントは？」

携帯と財布しか入らなそうな、小さなバックに目をやりながら、暎司は言葉を続ける。

「まさか忘れてた？」

「…覚えてたよ。」

俯いて答えていた美月は、思い切ったように口を開いた。

「暎司、ごめん。」

美月は頭を下げる。

「友達では…いてくれる？」

暎司はそれには答えず、美月に恐ろしい質問をぶつけた。

「妊娠…とか、大丈夫？」

美月は心臓がギュツと縮んだ気がした。

考えた事がない。

顔が引きつる。

美月は記憶がないので、避妊したかどうかも解らない。

「たぶん…大丈夫。」

そういえばまだ生理が来ていない。

美月は生理の予定日を計算していた。

二週間近く遅れている。

「たぶん、て？はつきりわかんないの？」

「…」

美月は不安に苛まれ、今すぐ帰りたくなってきた。

ソワソワしだした美月に、暎司も焦った。

一度決めた覚悟が揺らぎ出した。

《そんなはずない。きっと。そんなはず》

暎司は進行方向を変え、24時間やっているドラッグストアに向かう。

美月を促し、店内に入る。

二人が向かった先は、もちろん検査薬のところだった。

「どれがいいの？」

暎司に聞かれるが、使ったことない美月に解る訳がない。

美月の態度で悟った暎司は、じゃ、これとこれ、と適当に二つ買った。

そのまま近くのホテルに入る。

美月は直ぐさまトイレに駆け込んで、検査薬を開けて説明書に目を通す。

結果は1分後、美月は祈るように検査薬を見る。

陰性

どう見ても妊娠反応ナシ。

美月がトイレから出ると、暎司はトイレの前にいた。

「どう？」

「大丈夫だった。」

それでも暎司は水を差し出し、違う検査薬を差し出す。

二本入りを二個買ってきたのだ。

美月は水分ばかりを口に続け、三時間が経過して、検査薬四本が陰性と出た。

「良かった。」

ホッとソファに座り、携帯を見ると、既に時刻は3時を回っていた。

「あ…、暎司、誕生日おめでとう。」

「おう！もう3時過ぎてるじゃん。ありがと。そういえば美月、明日仕事は？」

久々に美月と呼ばれた。嬉しかった。

「明日は休み。」

「そっか。俺も。」

そのまま沈黙が流れる中、ベットに座り、暎司は美月を見ている。

「美月、ちょっと痩せた？」

「どうだろ？ちょっと痩せたかもしれない。スカート緩いかも」

美月はこの一月、食欲があまり出なかった。大好きなケーキも食べる気が起きなかった。

そのせいで生理が遅れているのかもしれない。

そう思ったら急に安心した。

「俺と会えないのが堪えた？」

何かが詰まっているように苦しかった胸が、暎司のその一言で溢れた。

問い掛ける暎司の和らいだ表情に、一月以上堪えていた涙が、ポロポロと勝手に流れていく。

「本当に…ごめんなさい…」

顔を伏せて涙を流し続ける美月の横に、暎司が座る。

「言いたい事、言ってくれていいよ。」

美月はそう言って、暎司を見る。

「プレゼント…とかも…考えてなかった。もう…彼女じゃないし…」

「そうだね。もう彼女じゃない。」

美月の一旦止まりかけた涙が、更に量を増して溢れ出した。

「暎司、ごめんね…。」

16 穏やかな愛情

暎司は立ち上がると、紙袋を持ってきた。

焦っていた美月は、暎司が紙袋をホテルに持ってきていたことに、全く気付いていなかった。

「開けてみて」

涙の止まらない美月は、息も整わず、震えてしまう手で紙袋を開く。

小さな紙袋と、10センチ程の箱が入っている。

紙袋を開けると、美月が前に可愛い、と言ったピアスが入っている。

「これ…」

「それ渡そうと思って駐車場行ったら、揉めてたから。渡しそびれた。ネックレスと合うと思うよ。」

もう一つの箱を開ける。

銀色のリングが二つ、輝いていた。

「もう彼女じゃない。婚約者だから。」

「何で？何でそんな事言えるの？責められるほうが…ラクだよ…」

美月は嗚咽を漏らしながら、予想もしなかった展開に戸惑い、更に激しく泣いた。

リングケースを膝に置いたまま、美月は嗚咽を漏らしながら泣き続けた。

「もう泣くな。お前、俺の事好きなんだろ？解ってる。」

ポンポン、と頭に手を乗せ、そのまま美月の頭を自分の肩にもたせ掛ける。

指輪を取り出し、美月の左手の薬指に着けた。

「石付ければ良かったな。結婚指輪みたいだ。」

まだ泣いてる美月の顔を、両手で挟んで口づける。

暎司の唇が離れると、美月はティッシュで顔を拭き、息の整わない状態で、左手を眺めている。

暎司は指輪を確認するように触り、その手を引き寄せ抱き締める。

「もう忘れる。…つつても、覚えてないのか。」

暎司がもう一度美月の顔を両手で挟み、ゆっくりと伝える。

「美月、愛してるよ。結婚しよう。」

暎司の口からはつきり愛の言葉が出るのは珍しい。

まるで心に染み入るような暎司の言葉に、美月はゆっくり頷く。

二人はしばらく見つめあったままだった。

暎司は優しくキスをする。

右手はそのまま首筋を通り、脇腹に移動した。

優しく撫でる手が心地良くて、美月の涙もやっと止まる。

服の中に入ってきた手が、美月の胸を優しく撫でた。

頂きを擦り、美月が高揚感に浸っていた時だった。

「あ、」

美月は突然暎司を押し戻し、下から這い出して、トイレに消えた。

暎司は何事かと、しばし呆然と消えた美月を待つ。

トイレから出て来た美月は

「生理… 今来た。」

そう言っただけでモジモジしている。

「… お前のタイミング、最高だな！」

暎司は大笑いしている。

暎司は美月を抱き締め、

「良かった。」と呟いた。

あれから二人は貯金を始めた。
結婚費用のためだ。

コウジは美月に会いに来たが、美月はネックレスに通した指輪を見せ、結婚する事を告げた。

「お前なあ、俺ん家改装の準備してんだぞ？ 無駄にする気か？」

コウジは美月を嫁にするつもりだったらしく、実家の二階を改装する計画を立てていたらしい。

「一回もまともに話した事ないのに、何で改装とかしてんの？彼女出来たら無駄にならないし、頑張って下さい。」

「惚れたもんはしょうがねえだろ！…別れたら、絶対連絡しろよな。」

コウジは

「紙とペン」と言い、美月はバックから手帳を出した。

美月の手帳の一番前の部分に、大きく数字を書きなぐっている。

「これ俺の携帯。お前教えそうにねえもんな。俺はバツ1くらい気にしないから、絶対連絡しろよ！」

そう言っただけの台風は、去って行った。

翌月、美月の26歳の誕生日、二人は出掛けていた。

アパートを探しに歩いていたのだ。

暎司の誕生日は、暎司が自分でエンゲージリングを買ってきてくれた。

美月の誕生日には、アパートを決めようと話していたのだ。

互いの実家の中間を選び、まだ建築中の新しいアパートには、10月から引越すことにした。

姉の優佳が遅い日は、美月が実家に寄らなくてはいけないことを暎司に告げてある。

暎司は快諾してくれた。

二人は、梅雨時期の湿ったアスファルトを歩いていく。
握り合う手は、最愛であり、最高の人生の伴侶を得て、幸せが溢れ出しているように暖かい。

美月は思い描いていた。
これから訪れる、暑い夏を。

その夏を終えたら、この人と、暖かく愛情の籠った家庭を築いていく。

《結婚》が嬉しいのではない。

遥かなる幸せが、自分を待っている事が、嬉しかった。

暎司となら、幸せな家庭を築いていける…、それが嬉しかった。

17 理想の幸せ

今年の夏は暑い。

暑いなら海だろ！という、訳の解らない暎司の理屈で、皆は海に来ていた。

海岸には家族連れやカップル、中学生くらいの団体が、思い思いにカラフルなレジャーシートの花を咲かせている。

隣県に嫁に行った紗季も、今日は子連れで参加だ。

美月が海の計画をメールで皆に知らせた直後、久々に実家に帰る、と言う紗季からのメールが届いたのだ。

皆と海にも行きたいが、紗季とはもう一年近く会えてない。

そちらを優先したいが、企画はいつも美月なので、それを放り出す訳にはいかない。

そこへ暎司が

「子供と海に行く練習になるじゃん！呼んであげたら？」と言ってくれたのだ。

美月は甘えさせてもらっ事にした。

砂浜は裸足で歩くには熱過ぎて、紗季の二人の子供の足では歩けない。

暎司と圭太は、まだ打ち解けない3歳の恵理花ちゃんと、1歳半の岳斗君を抱き上げる。

固まる二人に

「ロケット〜！ビューン！」とやりながら、少し早足で紗季の脇を玩具のように蛇行させる。

暎司と圭太の遠慮のない気遣いが、美月は嬉しかった。

「いい人達だねー。」

紗季はそう言って、弁当を広げる美月の手伝いをする。

すっかり打ち解けた子供達は、暎司と美月の友人4人に遊んでもらい、キャツキャツとはしゃいでいる。

圭太が気を遣い、美月と喋ってきなよ、と言ってくれたそうだ。

圭太も先月彼女が出来、今日は彼女連れだ。

彼女は子供が大好きだそうで、とにかくチビ達の周りから離れない。

はつきり言って、圭太さえそっちのけだ。

久々の再会に、互いの近況を話し、二人は学生時代に戻ったように話は尽きない。

弁当を並び終えても、まだ喋っていた。

「うん飯食べるー！」

恵理花の声に、紗季が母の顔に戻る。

ごめんごめん、と紗季は皿に取り分け、恵理花に渡す。

まだ自分で食べるのが下手な岳斗は、紗季が食べさせていた。

「この卵焼き、誰作ったのー？」

「はい！美月お姉ちゃんが作ったの！美味しい？」

美月の卵焼きがヒットしたのか、恵理花は両手に持っている。

「うん！ママのご飯は、いつもお肉なんだもん。」

みんなが笑う。

「はいはい。ママの作ったお肉もあるけど？」

そう言っただけでも、いつもと違う味が気に入ったらしく、恵理花は美月の野菜ばかりのお弁当のほうに手を出す。

「失礼しちゃうー！」と頬を膨らませた紗季に、一同大笑いする。

紗季は結婚式の時には既に妊娠していた。

毎年くれる年賀状には、仲睦まじい家族写真が必ず載っている。

そんな事も美月の憧れである。

美月は家族写真などというものは、ほとんどない。

まず父と一緒に出掛けた記憶がない。

最近は何のせいか、全く暴れなくなっただが、汚い言葉を吐き捨て、母娘に不快な思いをさせないと、寝る事ができないかのようにだった。

《娘は父親に似た人を選ぶ》

よくそう聞くが、こうやって子供達と戯れ、いかにも子供好きな暎司に、自分の父親の影は全く重ならない。

早く暎司との子供、欲しいなあ、なんて考えながら、想像は膨らむ。

いつか、暎司と新しい家族を連れて、海に来る日が来るだろう。

美月は海ではしゃぐみんなの姿に、つい微笑んでいた。

「美月さん、今日はお邪魔してすみません。」

圭太の彼女の久美子だ。
ジュースを飲みに行っていたらしい。

「毎回参加して下さいね！圭太君すごい嬉しそうだし！」

圭太は久美子に手を振っている。
久美子も振り返す。

「私達、すごいいい彼持ちましたよね。友達なんか、遊ばれたり、騙されたりする子いるのに。」

付き合い始めてまだ日が浅いのに、圭太と暎司の事をよく知っているようだ。

「あれ？暎司の事知ってたっけ？」

頭に？が並んでいます、と言う顔の美月に、久美子が答える。

「私、圭ちゃんと暎司君の幼馴染みなんですよ。小学校から知ってます。」

そーなんだー！と驚いていると、久美子は話を続ける。

「二人ともよく学級委員とかやらされてましたよ！何か目立つから。」

ふーん、と頷く美月に、久美子は

「絶対私達、当たりクジですよ！」と言いニコニコしていた。

美月は嬉しくなった。

「行こうか？」

と海を指差し、久美子と走っていく。

行き先はお互いの当たりクジの元だ。

走っていった美月は暎司に海水を掬ってかけた。

久美子は、圭太に向かって両腕を大きく広げて駆け寄る。

抱き付く…かと思ったら、圭太の胸にラリアートをくらわせて、海に倒していた。

粗末に扱われた当たりクジに、美月は大笑いした。

楽しかった夏はあっという間に過ぎ、風に土の臭いを感じる。

夕暮れには鈴虫の声が聞こえ、秋の訪れを感じさせる。

暎司と美月は、買い物に来ていた。
家具の下見の為だ。

二人分の夏のボーナスで、家具を買うつもりである。

「すごい！この洗濯機！アイロン要らずだって」

家具に拘りのない美月は、専ら面白い物ばかりに目がいく。

一方暎司は、店員に機能の違いを聞いたり、この色は…と拘りを見せている。

美月の使い易い物で、暎司の気に入った色。

そんな調子で決めて、一応予約をしてもらい、家具屋に向かう。

家具屋でも同じだ。
決めるのは暎司。

美月は本当は可愛い家具にしたかったが、暎司が安らげないと意味がない。

トイレマットなどの小物は、自分の趣味にしよう！と家具も暎司に任せる。

手配も済み、あとは引越を待つのみだ。

引越はいつも集まるメンバーが、買って出てくれた。

中でも圭太は、

「飲み会の場所、10月から考えなくて良くなるな！泊まりもOK！」

圭太が一番引越を楽しみにしているみたいだ。

でも美月は嬉しかった。

自宅では、父の飲み仲間以外はほとんど見た事がない。

自分の友人は、父に会わせたくないのも、事情を知る紗季以外は、ほとんど呼んだ事がない。

唯一ちよくちよく来たのは、公平くらいのものだ。

これからは、暎司と二人の家に、友人が集まる。

美月の思い描いていた理想が、現実になるうとしている。

神様はちゃんと見ててくれるんだな

信仰心のあまりない美月でも、神様に感謝したくなるくらいだった。

台所にいるはずの美月に、暎司は声を掛けた。

二人は5日前に引越を終えて、今日は一緒に住んでから、初めての一緒の休みだ。

「ねえ美月、結婚式いつにしようか？この日がいいっての、ある？」

「…」

美月から返事がない。

聞こえてないのかと思って台所を覗く。

2DKの間取りなので、扉を開けたらすぐ台所だ。

扉を開けた暎司の目に映ったのは、うずくまる美月の姿だった。

「美月！大丈夫か？」

「…さつきより良くなってきたから大丈夫。貧血かも。胸焼けもするから、ちよつと横になる」

ヨロヨロと起き上がった美月を、暎司が支えてソファに横にする。暎司の趣味で選んだ、アイボリーのシンプルなソファだ。

「何か飲む？」

家事をやった事のない暎司には、紅茶の葉さえどこに入っているのかわからないはずだ。家事は美月任せなのだから。

「水でいいよ。」

それを察して、美月は水を要求する。
暎司は水を汲みに台所に姿を消す。

美月はこの貧血の理由に、思い当たる節があった。

18 新しい命（前書き）

執筆を始めて一か月が過ぎました。話も後半に入り、30話くらいでまとめられると思います。段々アクセス数が増えているのを見ると嬉しく思います。御覧頂いて、本当に有難うございます。

18 新しい命

8月最後の月曜日、二人はホテルにいた。

月末に引越の為の連休を合わせて取ったので、それまで休みが合わない。

「一緒に住んだら、ホテルにはもう来る事ないから」との暎司の希望で、今日はお泊まりなのだ。

「今日はいっぱい声出していいよ。アパートじゃ、声出せないから」
ベットで待っていた暎司は、そう言ってシャワーを浴びて出てきた美月を抱き寄せた。

美月を横たえて、暎司は上に跨ぎ、着ていたガウンを脱いだ。
美月のガウンの紐をゆっくり解き、前を開ける。

唇を重ねると、美月の裸の胸に手をやる。

その柔らかさを楽しんでから、唇はゆっくり耳、そして首筋に移動する。

胸まで降りると、頂きを口に含んで転がすように舌で遊ぶ。

いつまで胸をイタズラする気なのか、長い時間掛けて唇と手は脇腹から腰、胸への移動を繰り返す。

するつと降りてきた手は太股へ伸びる。

組み敷いて足は開かれ、暎司の手は一点を刺激する。

「あ…」

美月の声が漏れると、更に激しく手は下腹部を徘徊する。

指は美月の声が漏れる度に刺激を増し、溢れる蜜を掬って中へと入ってくる。

「あ、ああ…ダメ…」

美月があまりの刺激に耐えられず、暎司の手を押さえようとするが、暎司はお構いなしに二本目の指を押し込んだ。

激しく動き始める指に、美月は体を捻る。

堪らなく

「んん」と美月が声を出すと、

「もつと聞かせて。」と暎司は囁き、指は奥深くまで入ってくる。

美月の声がセーブしきれない程に漏れ始めると、暎司のそれは勢いよく美月の中に入ってきた。

「今日はゴム無しでしたい。美月の中、熱いよ。」

美月の思考は考えをまとめることが出来ない。

暎司も限界に近いようだ。

動きは早く、息も荒い。

動きの止まない暎司の腕には、美月の指が食い込む。

「美月、愛してる。」

そう言うつと、更に激しく腰を打ち付け、美月は叫び声に近い声を上げた。

もうダメ！

美月の頭にそれだけが浮かぶと、暎司がぐったりと果てた。

中には出していないと暎司は言ったが、あれからもう一度して、ゴムは使わなかった。

美月の予想は当たっていた。

次の休み、暎司を見送ってから検査薬でチェックすると陽性と出た。

胸焼けのような症状が続いていたので、やっぱり、と言う感想だった。

暎司の帰宅後、食事しながら美月は切り出す。

「赤ちゃん…出来たみたい。」

暎司は目を見開き、固まった。

しばらくして暎司はやつと言葉を発する。

「…マジで？」

「検査薬やったら、陽性だったから…」

「籍入れよう！」

暎司は美月を抱き締める。

美月も暎司の首に手を回して、まるで一つにでもなれそうくらいに抱き締めあった。

翌週二人は互いの親に挨拶をし、籍を入れた。

暎司は美月の妊娠を殊更喜び、体調を気遣ってくれる。

家事を手伝うことがないのが、美月の不満だったが、男だから仕方ない、と美月はつわりの酷い中でも手抜きはしない。

美月のつわりは酷く、式は出来そうになかったので、落ち着くまでは考えないことに決めた。

仕事先にも妊娠を告げ、アルバイトにしてもらった。

美月の代わりが入るまでは、仕事はやめられない。

美月はケーキの臭いに、トイレに駆け込むばかりの一日を送りながら、家事と仕事をやっとの思いでこなしていた。

それでも妊娠6カ月に近付くと、つわりは嘘のように突然治まった。

それまで、美味しいと感じられなかった食事も、何を食べようかと迷えるほどになった。

4キロほど落ちてしまった体重も、やっと回復の兆しを見せていた。

しかしその中で、二人の意見の食い違いは増えていった。

美月も仕事をしているのに、暎司は全く家事を手伝うことが無かったからだ。

その事でいつも揉めるが、暎司は家事をやるから、といつも言い、やるのは翌日だけ。

何度か繰り返して、美月が諦める事でいざごさは無くなった。

美月は妊娠7カ月に入って仕事を辞めた。
やっと人手が足りるようになったのだ。

お腹が少し目立ってきたので、不思議な感じた。

「れいちゃん」

呼び掛ける。

少しお腹の中で、グルグルと動く。

多分女の子だろうと先月の検診で言われている。

美月は妊娠が発覚してすぐ検診に行った。

最近では、産むギリギリまで受診に訪れない妊婦が多いらしい。

しかし、自分では気付かない内に、高血圧になっていたり、妊娠中毒症になっている妊婦もいると言っている。

自分ももちろん死にたくはないが、何より産まれてくる赤ちゃんが、無事に出てきてくれることが一番だ。

それを考えたら、出し惜しみは出来ない。

今回の検診でも、やはり女の子の可能性が高いと言われた。

専業主婦になった美月は、今の内にと紗季と会ったり、友人を招いて食事をしたり、マタニティライフを楽しんでいた。

美月の健康管理が良かったのか、無事臨月を迎えた。

暎司はお腹を擦り、毎日呼び掛ける。

「れいちゃん、パパに早くお顔見せてね」

まだ産まれてもない内からメロメロだ。

名前はもう決めていた。

早くから名前に反応して欲しいからだ。

《鈴華》れいか

鈴の音のように皆の心に響く、華のある子になって欲しい、と言う願いを込めて二人で決めた。

男の子だったらどうしようかね、などと過ごす毎日が楽しかった。

暎司と喧嘩もたくさんしたが、お互いが納得するまで話し合い、必ずじゃあこうしよう、と決まるまで話し合いをする。

家庭は他人との、共同生活なのだ。

譲り合い、理解しあわないと、簡単に崩壊する。

美月が専業主婦になったことで、家事でのいざこざは無い。話し合いもすぐ済むようになっていた。

予定日を二日過ぎ、美月は今日も検診に行く。

予定日からは毎日、子宮の状態を調べる為に病院通いだ。

「今日もまだ子宮口は開いてないです。」

検査の結果は、未だに出産の傾向は見られないと言った。1週間以上遅れたら、帝王切開での出産になる。

暎司にその事を告げる。

自力での出産を望む美月は、お腹を擦って話しかける。

「れいちゃん、早く出ておいで?。」

ポコポコと聞こえているような動きを見せる。

美月はクスツと笑い、

「返事してくれたよ。」

と暎司に顔を向ける。

「れいちゃん、パパ明日休みだから、明日出てきてくれると嬉しい

なあ」

暎司もお腹を擦りながら話しかける。

それが伝わったのか、昼間の点滴のせいなのか、夜中に突然の陣痛で目覚めた。

7時になると15分間隔になり、病院に行く。
それからは嵐のような時間が過ぎた。

激しい痛みと闘い、暎司に見守られながら、新しい命　鈴華が誕生した。

涙を流して喜ぶ暎司と、手を握りあう。
美月の横に置かれた、小さなベットの中央の可愛い我が子は、二人の幸せの象徴だった。

晴れ渡る青空に、我が子の産声を聞き、美月は疲れていつしか眠りについていた。

親子三人で手を繋ぎ、緑の中を歩く夢を見ながら。

それは現実にならない事を知っていたのは、神様だけだったのだからか。

それとも、神の意地悪なのか…。

19 異動辞令

瑞々しい緑の葉に初夏を感じる7月始め。

暎司の迎えで、家族で初めてアパートに帰った。

今日から一月は実家に戻る美月と鈴華の荷物を取りに寄ったのだ。
暎司は寂しそうである。

「パパはここで一人かあ」

鈴華ちゃん、と呼び掛け、まだ視点の定まらない我が子に頬擦りしている。

「時間が大丈夫なら、毎日でも実家に来てくれたら嬉しいよね？ 鈴華。」

美月も鈴華に擦り寄る。

鈴華はうざりたい、とでも言いたげに手を振り回している。

美月のお腹は未だに膨らんだままだ。

赤ちゃんを産んだら、すぐ萎むものだと思っていたので、膨らんだままのお腹に疑問を抱いた美月は看護婦に聞いてみた。

実際には子宮が膨らんだままなので、子宮が元の大きさになるまでには二週間以上を費やすらしい。

それまでは、まだ7カ月くらいの膨らみのままのお腹でいなくてはならない。
自分の体を見て、早く元の体型に戻りたいなあ、と美月は溜め息をつく。

体重はつわりでマイナスになっていたので、元より2キロ増えた程度で済んだ。

妊娠線はほとんどなく、5カ月からクリームを擦り込んでいたのが幸いしたようだ。

美月は暎司を心配していた。

26歳の若い暎司としては、禁欲に耐えるのも大変だったろう。

しかし、お腹に悪影響を及ぼしたら、と我慢してくれていたのだ。

そんな心配も、鈴華の世話に追われ、頭の片隅に追いやられてしまっていた。

美月は母乳がほとんど出なかったので、3カ月目からは完全にミルクに切り換えた。

きっかり3時間おきに泣く。

お腹いっぱいのはずで、おむつも替えたのに泣く我が子。

育児の大変さが身に沁みて解った。

母への感謝を今更だが、深く感じていた。

暎司は休みの日は朝から二人の元を訪れ、我が子の顔を見て顔を綻ばせる。

世話こそ出来ないものの、愛する我が子を見る暎司の幸せそうな微笑みに美月は癒されていた。

《やっぱりこの人で良かった》

美月はそう思わざるを得ない。

暎司は仕事の愚痴も、美月に早くアパートに帰れとも、何も言わないでいてくれる。

鈴華の世話頑張って、ただそれだけしか言わないでいてくれるのだ。それだけでも救われる。

一月してアパートに戻る。

鈴華はすすくと成長した。

4ヵ月にもなると、すすくを通り越してブクブクになっていた。

暎司は丸々太った我が子を愛しそうに抱き、家に帰るのが楽しみだ

と言っ。

たまには今だ慣れない手つきで、ミルクを与えたりもする。

「可愛いなあ」

暎司の口から出るのはそればかりだ。

美月は順調に幸せを手に入れていた。

それは実家の父の事も含めてである。

鈴華を連れて実家に帰った時、美月は父がどういう態度で出るか心配していた。

可愛くない娘の子供だ。

酒で狂った思考には、鈴華の泣き声がうるさく聞こえるのではないかと気が気ではなかった。

しかしその心配は無用だったのだ。
孫は別格だったようである。

リビングの扉を開け、酒の入った赤い顔で不快な表情を浮かべて入ってくる。

リビングの扉が開く音に鈴華が
「あーうー」と声を出した。

声の元に目をやった父の目元は：下がりにつながってしまったのだ。

家族は驚いて目を丸くした。

母はしばらく口をあんぐり開けたままで、固まっていた。

父の普段の姿を知らない暎司だけが、そつと鈴華を抱き、父に歩み寄る。

「一月お世話になります。宜しくお願いします。」

そつ頭を下げた暎司に父は

「美月に似ないで良かったな、暎司君似じゃないか。男か？」
ピンクの産着を着てるのに《男か》も無いものである。

しかし母娘は、暎司に抱かれた鈴華にちよつかいを出す、父の姿が俄かには信じられず、誰も動けなかった。

更には父は、酒を飲まずに真つ直ぐ帰ってくる日まで出来てしまった。

孫とはそんなに可愛いものか、と美月と優佳は父の変化に戸惑いを

隠せなかった。

映司の仕事の遅い日は、美月は実家によく行っていた。

鈴華が来ると伝えると、だいたいは父が酒を飲まずに帰ってくるのだ。

鈴華のおかげで父の暴言もかなりの割合で減っていた。

そして父は暴言を吐く日のほうが珍しい、と言っくらいにまでなっていた。

吉川家の長年の悩みは、鈴華の誕生によって落ち着きをみせる事となる。

休日には鈴華をあやす母の声、そして育児に参加した事のない父の、余計なアドバイスをする声が響く。

こんなに順調で、美月は怖いくらいだった。

そんな心配は当たってしまった。

鈴華が6ヵ月になり、鈴華の昼寝の間に夕食の支度をしている美月の携帯に、メールが届いた。

暎司からだ。

【今夜ちゃんと話すけど、異動の辞令が出た】

美月はメールを見て動きが止まってしまった。

《異動だなんて、どこに？》

暎司は営業の仕事をしている。

全国に営業所を持つ、なかなか大きな企業だ。

家族で引越になるとすると、友人もない土地で美月はやっていくだろうか。

やっと慣れてきた育児だが、話し相手もない土地に行ってしまったら、どうなるんだろう？

暎司の帰宅まで、美月は落ち着かなかった。

食事を並べながら、美月は切り出す。

「異動って、どこに？」

ネクタイを外しながら、暎司は答える。

「それがさ、〇〇県の市なんだけど、期間が決まってるんだ。」

〇〇県 市は隣の県の一番端のほうだ。

「新しい営業所のオープンで、8カ月間手伝いに行かなくちゃならないんだ。期間が決まってるから、寮に単身で来て欲しいって。」

暎司の言葉にショックを隠しきれない。

8カ月の間、家族は別々に暮らさなくてはならないのだ。

暎司は寝ている鈴華にただいまのキスをしている。

「…いつから？」

「年明けの出勤から。もう店舗は出来てて、向こうのスタッフが準備してるから、営業所が機能する年明け5日から指導係で行くことになる。」

今日は12/3。

暎司と一緒に過ごせるのは、あと一か月しかないのだ。

俯く美月に、暎司は食事を始めながら話しを続ける。

「下を付けて任せてもらえるんだから、一応栄転だよ。帰ってきたら、少し役職も上がると思うしね。」

「…暎司は寂しくないの？」

「そりゃ毎日鈴華の顔見れないのは寂しいけど、8カ月だし、二時間あれば帰ってこれるから大丈夫だよ。」

暎司は美月を座らせると

「家族の為に8カ月くらい、我慢できるよ。」と肩を抱く。

美月は何とも言えない喪失感に打ちのめされていた。

しかし暎司の言っている事は最もなのだ。

暎司に仕事を辞めてもらう訳にはいかない。

ここはみんなで頑張らなくてはならない時なのだ、と覚悟を決める。

「解った…。暎司寂しいだろうから、鈴華と会いに行くね。」

「冬のうちは俺が来るよ。布団二組持っていけないし。暖かくなったら来てよ。」

その夜は久々に暎司と一緒に眠った。

美月はいつも夜泣きする鈴華と一緒に寝ていたのだ。

二人の行為の邪魔をしないように気を使ってくれたのか、初めて鈴華が夜泣きしない夜だった。

映司は年末に荷物を引越業者に頼み、年明け4日に隣県に発った。

20 不信任感

三人で初めて写った年賀状を、写真立てに飾る。

幸せそうな家族写真に、美月は大満足である。

しかし部屋を見渡せば、暎司の私物は減り、畳まれた布団も一組しかない。

「鈴華、暖かくなったら、パパのそこ行ってあげようね。」

答えはないと解っていても、鈴華に幾度となく同じ台詞を繰り返す。

1月、暎司は休みの度に帰ってきていた。
仕事がハードで、少し痩せたようだ。

「メタボ解消だな！」けして太っていない体なのに、そう言って笑わせようとする。

美月行って家事をしてあげたかった。

しかし鈴華は初めての冬で、風邪をひかせるようなものと皆に反対され、暖かくなるのを願う美月だった。

2月も終わりに近付き、3月半ば並みの気温が続く、といった天気予報に、美月は支度を始めた。

外はまだ枯れ木ばかりで色は無い。

空は薄い水色にグレーがかった雲がたなびき、まだ春を感じることはいできない。

梅の花だけが可愛らしい花を付け、暖かくなった唯一の証しのようにだ。

暎司は今月も3回ほど帰ってきていた。

しかし会えないと想いは募るばかりで、美月が暎司欠乏症に陥りそうだったのだ。

《これから出ます》

と暎司にメールをして、預かっていた合鍵を手取る。

鈴華を乗せて、車は走り出した。

美月と鈴華は狭い部屋に5日程泊まり、暎司が仕事に集中出来なくなっではいけないのでアパートに戻った。

数日だが一緒に過ごせたので、美月は幸せだった。

しかし、この時美月は気付いていなかった。

滞在中、暎司が一度も自分に触れていないことに。

翌週、暎司は水曜が休みのはずだ。

それに合わせて、10日くらい泊まりに行くとメールを入れた。

その夜返ってきた返信は、何気無いものだった。

【仕事が毎日遅くて、帰って寝るだけだからいいよ。せつかく来てもらってもつまらない思いさせちゃうから。来週俺が戻ります。】

美月からはしょっちゅう写メ付きメールを送っていたが、暎司からのメールは久々だった事に気付いた。

休みの日、暎司は昼過ぎにやってきた。

「起きたの遅かったの？」

「昨日も仕事が遅かったからさ。」

そう、とだけ答え、美月は暎司の朝食兼昼食の用意をする。

暎司はつかまり立ちをする鈴華と戯れ、楽しそうだ。

食事を済ませると、暎司は寝ている鈴華の隣に横になる。

「ホッペがプニプニ」

ツンツンと鈴華の頬をつついている。

美月が洗い物を済ませて戻ると、暎司は寝息を立てていた。

疲れているだろうと思い、そのまま寝かせておいた。

2時間ほどして鈴華が目を覚まし、暎司も起きた。

「あれ？もう4時？」

暎司は目を擦って時計を見やる。

「何時までいられるの？」

8時に出る、と言いながら、鈴華と遊んでいる。

5時になると少し早いお風呂に二人は入り、美月は夕飯の支度をしていた。

テーブルにサラダを置きに行くと、置きっ放しの暎司の携帯に、メールが来たことを知らせるメロディが流れた。

目をやると、携帯の表面の小さい液晶に《かよ Eメール受信》と

出ている。

《かよ》なんて知り合いいたっけ？と美月は台所に戻る。

しかし、仕事先等で急ぎだったら、と思い直した。

風呂の扉を開き

「メール来てたよ。《かよ》って書いてあったけど、急ぎじゃない？」

暎司が一瞬だが、ギョツとしたような表情を見せた。
しかしすぐ

「ああ、別に大丈夫」
と鈴華と遊び出す。

ならいいか、と美月は夕飯の支度を続けに台所に戻る。

何だか引つ掛かる気がするが、揚げ物が焦げてしまっほうが先だったのだ。

暎司は休みの二回に一回は戻ってきていた。

しかし毎回昼過ぎに来て、鈴華と昼寝をし、風呂に入り帰っていく。
美月にとっては楽しみな休日なのに、味気無い。

暎司の様子は、何だか前と違う感じがする。
何故だろう、と美月は不安に駆られていた。

暎司に泊まりに行くともメールをすると、いつもやんわり断られる。暎司がアパートを出てから、抱き合う事もしない美月は、暎司に触れたかった。

今日行ってしまうおう！と支度をする。仕事中の暎司にメールをする。

《これから行きます！》

4月の爽やかな風を窓から入れ、後ろのチャイルドシートの鈴華に声を掛ける。

「風が気持ちいいね。」

お気に入りのネコの玩具をいじりながら、鈴華は《マ・マ》と喋る。

10カ月になった鈴華は、既にヨチヨチ歩きが出来るようになった。今はまだ数歩だが、一歳までには上手に歩けるようになるだろう。

《あ、鍵忘れた》

合鍵を忘れたのだ。

暎司の携帯に電話する。

二回ほど掛けたが出ない。仕方なく、暎司の仕事先へ電話する。

「いつもお世話になっていきます、佐久間の妻ですが、佐久間は只今手が空いておりますでしょうか？」

美月の耳に信じ堅い言葉が流れてくる。

…今日、暎司は休みだと言う。

何と答えたのか記憶はないが、電話を切り、車を発進させる。

美月はUターンしていた。

暎司からの連絡を待った。

しかしその日は連絡はなく、翌日の昼間メールがきた。

【昨日来るってメール来たけどどうしたの？】

会社に連絡した事は知らないようだ。

美月は返信を入れなかった。

美月は昨日暎司が休みな事を聞いていない。
黙っていたのだ。

そして更にそのままで済ませようとしている。

私服で出掛けていたなら、美月が寮に着いていたなら何と言いつけるつもりだったのだろうか。

夕方になり、

【鈴華が風邪気味かもしれないからやめた】
とメールを打つ。

すぐ返信は入り

【昨日も仕事が遅かったから、来てもあまり会える時間が無かったよ。来週帰るね】
といったメールがきた。

昨日が休みなら、次の休みという事だろう。
暎司の行動に、美月は不信感を抱き始めた。

21 壊れそうな心1

暎司は相変わらず月の休み、6回の内の半分を帰ってきていた。

美月はあれから泊まりにいくとは言えないまま、一月が経った。

暎司からは、泊まりにおいでとも言われない。

悩んでいた美月は思い切って聞いてみた。

「何か…、変わった事とか、隠してる事…ない？」

「え？何で？」

暎司は思いのほか普通の返事をする。

「何か最近、暎司冷たいよ。」

「そんな事ないよ。疲れてるからかな。洗濯とかやっとやってるし。」

「だから、泊まりに行くって言ってるじゃない！何か都合悪い事あるんじゃないの？」

暎司は頭をポリポリ掻いた。

「何か誤解してるみたいだけど…。俺は二人を裏切るような事は絶対にしてない。」

美月の目を真っ直ぐ見つめ、暎司は言葉を続ける。

「俺はお前達のために仕事頑張ってるんだよ。鈴華を誰より愛してるのは俺らだろ？」

暎司はそう言っ、美月の手を握った。

しかし、美月は暎司の会社に確認していた。

転勤して二月は、暎司の休みは確かに6回だった。

しかし、3月から8回休みが取れているのだ。

既に6月に入ろうとしている。

未だに美月はそれを聞いていない。暎司も、休みの半分は帰ってくるよ、と言っているのだ。

暎司が帰ってきてても、虚しさだけが美月の心に居座る。

暎司は嘘をついている。

何の為に、そして誰の為に…。

何も知らない幼い我が子の寝顔を眺めていた。

暎司は仕事が残っているからと7時に帰り、台所には、暎司の使った食器が残っている。

いつも通り振る舞うのに疲れていた。

洗う気にもなれない。

美月は一人で抱え込んでいた。

暎司の態度はいつもと変わらない。

しかし、引越す前と比べたら、一目瞭然だった。

美月に触れないのだ。

美月が食事をテーブルに置くその時、鈴華を抱き上げるその時、暎司の忘れ物を渡すその時。

前だったら、美月の肩に、腰に当てられたその手は、今は触れるのを避けているように思う。

何も気付かなかった時には感じなかった違和感が、気付いてしまった今、はっきりと色を付けていた…。

来月で暎司の出向は終わる。

暗闇の中、しばらく美月は考えていた。

暎司は帰ってくるのか？

それよりも、自分がこの不信感を抱いたまま、暎司と顔を合わせて生活できるのか。

自信が無かった。

胸は既に何か月も前から、重苦しい不安に苛まれ、眠れぬ夜もある。

鈴華の健やかな寝息を聞きながら、伸び始めてやっと耳にかかる、柔らかな髪に手をやる。

ポタポタとおでこに落ちる雫に、鈴華は一瞬顔をしかめたが、そのまま眠ったままだ。

美月は溢れる涙と不安に押し潰されそうになりながら、今夜も明け方まで考えていた。

暎を迎えた空は、薄いオレンジ色と、淡い水色を交えた、ぼんやりした幻想的な風景を醸し出している。

美月は狭いベランダに出て、タバコをふかしていた。

昔遊び心で吸った事がある。

あの時はむせもしなかったが、美味しいとも思わないので、喫煙しようと思わなかった。明け方まで何か気分を変える術はないか考えていたら、ベランダからコンビニの看板だけが明るく見えたのである。

ぐっすり寝ている鈴華を置いてきてしまった。

歩いて1分もかからない距離を車で10秒に短縮する。

2分ほどで戻ったろう。

鈴華はまだぐっすりだった。

かくして美月はベランダで3本目のタバコに火を付けていた。

タバコはその日のうちに2箱が無くなった。

夜は鈴華の食事を作る気になれず、買い置きした外出用のレトルトをあげてしまった。

美月の頭の中は、もういっぱいだった。

これ以上、耐えきれそうになかった。

寝ている鈴華をそっと抱き、鈴華の荷物を持って車へ乗り込んだ。

車を運転していると、少し冷静になれる。

今までの暎司の行動を振り返ってみた。

しかし、どんなに考えても以前の暎司とは違う。

ふと美月と目を合わせていない事に気付く。

考えれば考える程、暎司の心が離れている事を認めざるを得ない気がする。

しかし、美月と暎司には鈴華がいるのだ。

…簡単に他に女を作ることは考えられない。

考えたくない。

心臓が握られているかのように苦しい。

まるで上から何かを押しつけられているようだ。

苦し過ぎて、美月は車を寄せた。

運転してられない。

呼吸が苦しくて、息がうまくできない。

美月は既に追い詰められていた。

しかし、これ以上悩む事のほうが、鈴華のためにならない。

育児に支障をきたすからだ。

美月は意を決して車を走らせる。

《思い過ごしであって欲しい…。》

心からそう願いながら…。

22 壊れそうな心2

AM7:30。

暎司の寮に着いてしまった。

車はまだある。

暎司はまだ寝ているだろう。

勢いで出てきてしまったが、仕事前の暎司を問い詰めるのはどうかと思った。

美月にはまだそのくらいの思考は残されていた。

悩んでいると、鈴華が起きだした。

美月は鈴華のご飯を用意するのも忘れていた。
もう1歳を超えているので、だいぶ普通の食事が食べられる。

美月は慌ててコンビニへ向かった。

コンビニの駐車場で鈴華に朝ご飯を食べさせてやりながら、美月は反省していた。

自分勝手な行動に、鈴華を巻き込んでしまった。
この子は何も解らないのに、真っ直ぐこの子を見てあげられない。
その余裕が自分に無い。

やはり早く暎司と話し合いをして、解決するべきなのだ、と強く感じた。

車を寮に戻すと、暎司は既に仕事に出た後のようだ。
車がない。

時間的にも、今日は本当に仕事なのだろう。

鈴華を散歩に連れ出す。

何も知らない鈴華は、おいで、と手を広げる美月に、楽しそうにキヤツキヤツと笑いながら歩み寄る。

だいぶ転ばずに歩けるようになった。

暎司は散歩に行く機会がないので、こんなに上手に歩けるようになった事を知らない。

裏を返せば、鈴華の散歩などどうでもいいのかもしれない。

それでなければ、あれだけ可愛がっていた鈴華と、月3回しか会えなくて、納得する訳がない。

美月は夕飯の買い物を済ませ、鈴華とパパの部屋に入る。

久しぶりの寮だ。

夜まで外で時間を潰す訳にもいかないので、家事と夕飯の準備をして待とうと思ったのだ。

部屋は整然と片付けられている。

布団は起きたままの形を保っていたが、それだけが滑稽なように形を変えている。

他が片付きすぎている。

部屋を一周してみる。

アイロンが当てられたシャツ。

並べられた食器。

並べられた歯ブラシ。

…歯ブラシ？

美月の物はいつも携帯歯ブラシを持ってきている。

他の物を見回す。

歯ブラシは簡素な物で、使い捨てを置いてあるようだが、見た事の無い物がある。

ピンクのブラジャーが、カーテンに隠れるように干してあるのだ。

もちろん、美月の物ではない。

鈴華は部屋を徘徊して玩具になる物を探していたようだ。

落ちていたらしい、¥1000ショップで見掛けたような、髪止めで遊んでいる。

美月は鈴華の昼ご飯を作っていた。
部屋を見渡すだけで、その痕跡がある。

これ以上、何かを探す事もない。

鈴華に食事を与えると、鈴華は寝てしまった。
今朝車で寝かせてしまったので、きっと3時間くらい寝てしまうかもしれない。

美月は洗濯をしに行った。

2、3日分であろう洗濯物が溜まっていた。

その間は彼女は来ていない訳だ。

彼女。

ふいに認めてしまったら、涙が勝手に出ていた。

鈴華を起こさないよう、トイレに籠って声を殺して泣いた。

これ以上涙が出たら、脱水症状でも起こすんじゃないかと言っくらの長い時間、美月は泣いていた。

《4時か。》

まだ間に合う。

起きて美月に纏わりついて遊んでいる鈴華を抱き抱え、車に乗った。

用事を済ませて部屋に戻った美月の手には、水色の大きめな封筒が握られている。

中から、使うことは一生ないだろうと思っていた紙を取り出す。

【離婚届】

《暎司が来たら、書いてもらおう。

それが暎司の責任というものだ。》

窓辺のハンガーから、ブラジャーを取り込み、暎司の衣装ケースにしまう。

気付いていない振りをしてまず食事をさせてやろう、と美月は思っていた。

仕事をしてきた人に、突然離婚届を突き付けるのも可哀相かもしれない。

泊まる準備もしていないのだ。
離婚届を書いてもらったら帰ろうと決めた。

鈴華をお風呂に入れてやり、鈴華の肩を愛しそうに撫でる。

一旦離れてしまった心は、きっともう帰ってはこない。
帰りたいと言われても、美月は受け入れる気はなかった。

水の中でタオルの風船を作り潰す。
それだけで鈴華は大喜びだ。

ガチャリと鍵の開く音がする。
美月は固まった。
心臓が縮み上がる。

暎司の顔がお風呂に現れた。

「来てたんだ」

暎司はそう言っつて、少し引きつった笑顔を見せた。

「うん。ご飯あるからよそつて食べて。おかずはテーブルにあるから」

美月は努めて明るく振る舞った。

暎司は風呂の扉を開くと、どこかに小声で電話をしていた。

きっと彼女だろう。

まだ6時半頃だ。

仕事が遅いと言っつてたのも、嘘だったようだ。

暎司が茶碗を取り出す音がする。

食事が済むまでは、ゆっくり支度でもしよう。

支度をして出ると、暎司はご飯を半分ほど食べ終わつていた。

鈴華は暎司に抱き付いていく。

…この光景をみるのも、もうないかもしれない。

黙って食事をし、食べ終えた暎司が食器を片付ける。

「来る時、連絡してよ。」

暎司は笑顔で振り返った。

「ごめんね。何か急に顔が見たくなっちゃって。」

暎司は鈴華と遊び始めた。

美月はそんな鈴華にお菓子を預けた。

暎司に書いてもらわなければならない。

バックから封筒を取り出した。

23 壊れそうな心3

差し出された紙に、暎司が目を丸くする。

「何だよ、これ…」

「離婚しよう」

「何でだよ！何か…あつた？」

何か、とはここに何かを見付けた事を指すのだろうか。でも美月は説明する気にもなれない。

暎司に放った一言で、脱力感に覆われてしまっていた。

「書いて。」

ペンを差し出す。

暎司はその手を握り

「俺があまり帰らなかったから？それなら毎回休みに帰るよ。」
美月の手を強く握る。

あまり【帰らなかった】事は自分でも解っていたようだ。

美月はその手を振り払い、首を横に振った。

「まだ出さないから。書いて。」

暎司を無理矢理テーブルに座らせて、ペンを握らせる。

美月は暎司から目を離さない。

暎司は仕方ない、といった具合にペンを走らせる。

「話し合おう。」

暎司は言葉を掛ける。

しかし書き終えた用紙を元通り封筒に入れ、美月は帰り支度をする手を休めることはない。

「考えがまとまったら、また連絡する。うちには来ないで。」

敢えて【うち】と言ってみた。

暎司の家ではない、ということを示す言葉を使う。

「うちの鍵、返して」

美月は手を差し出す。

暎司は震える拳をテーブルにドン、と打ち付けた。

「話もしないつもりか？」

暎司が顔を強張らせて美月を見る。

険悪な雰囲気気付いたのか、食べ終えたお菓子の袋を床に置いたまま、鈴華が美月の腿に抱き付く。

美月は鈴華を抱き上げ、黙って寮を出た。

一度も振り向かなかった。

車中、美月の携帯は着信音がなり続ける。
美月は話す気になれず、電源を切った。

アパートに着いてから電源を入れてみる。

暎司からのメールと着信がたくさん入っていた。

留守電には【話したい】と暎司からの短い言葉が入っている。

【しばらく考えたいから、連絡はしません。そのつもりで】
とだけメールを打ち、着信拒否設定をした。

暎司からメールが届く。

しかし美月がメールを見る事はなかった。

漠然と過ごして2日が経った。

夜8時を回って、鈴華を寝かしつけていたら、アパートの鍵が開く音がした。

暎司が部屋に入ってきていた。

美月の聞いていない休日が、明日だったようだ。

「明日休み取れたから。話、聞いてくれないか？」

寢息をたて始めた鈴華の布団を掛け直し、そつと扉を締める。

美月は黙って座った。

「理由：聞いてもいい？」

暎司に思い当たる節があるからだろう。

しかし自分からは切り出さないつもりのようなうだ。

「…休み、月8日あるはずだね。」

美月の言葉に暎司はピクツと動いた。

「それから…ブラジャー干してあったよ。しまっておいたけど。他に聞きたいことある？」

二人はしばらく無言だった。

暎司が少し後ろに下がり、突然土下座した。

「すみませんでした」

《土下座が何だっていうわけ？》

美月は冷たい目で暎司を見る。

この数日で、思い出したこともある。
それを突き付けた。

「【かよ】って…、元カノの名前じゃなかった？」

昔暎司の家で見た、古いプリクラに書かれていた名前だったのだ。
あの時何故思い出さなかったのか。

そう思ったが…思い出したところで、状況は変わらない。

「これからの事考えたいから、決めたら連絡する。今日は帰って。」

そう言つて土下座する暎司の前に、泊まるつもりだったろう、少し
重たいカバンを差し出した。

暎司はカバンを持つ美月の左手から、指輪が無くなったのに気付いた。
た。

美月の首もとに目をやると、プレゼントしてから外した事のない、
あのネックレスが消えていた。

暎司が泣いた。

声を出して泣いていた。美月にすがりつく。

「いめん…」

美月は暎司から離れ目を背け、ただ座っていた。

暎司は認めたのだ。

美月の言った事が正しいという事を。

解つてはいた。

ただ、暎司がそれを認めた…そのショックが波紋のように心に広がっていく。

どのくらい時間が経ったのか。

暎司の涙が止まりかけていたので、美月は切り出した。

「いつから？向こうに行つてすぐだよね？」

「…転勤して少し経ってから元カノが…彼氏と別れたつて、泣いて連絡してきた。」

「それで？家事もやってくれて泊まるようになって、それで？好きなの？」

「でも、本当に大事なのはお前達だから…」

「大事だったら浮気しないんじゃない？鈴華の事もそっちのけになるくらいだったんでしょ？」

俯いたままだった暎司が、美月を抱き寄せる。

「お前達がいたから仕事も頑張れた！だから捨てないでくれよ」

「捨てたのはそっちじゃない！裏切ったのは…暎司だよ」

美月は暎司の手から逃れようと暴れる。

暎司は更にきつく美月を抱き締める。

「愛してるのは美月だけだから」

暎司は美月を押し倒し、組み敷こうとした。

「いてっ！」

美月は暎司の腕に噛み付いた。

暎司の腕に、歯形がくつきりと残っている。

「触らないで！」

美月は暎司の裏切り、そして勝手さに腹が立ってきた。

バレて離婚届を突き付けられたら、泣いてすがり、更には抱いてこまかそうとしている。

汚い。

美月にはもう暎司の良い所など思い出せなくなっていた。騙されていた悔しさが、憎しみとなって心を支配する。

鈴華を産んだことさえ後悔し始めていた。
憎しみは言葉に変わる。

「返してよ…」

俯いていた暎司が顔をあげる。

「私の人生返してよ！」

涙が頬を伝う。

拭う余裕もない美月の頬を、次々と溢れる憎しみの雫が流れていく。

座ったまま、二人は目を逸らす事も出来ない。

苦しいまでの静寂が襲ってきて、美月は息をつくのもやっとだ。

先に沈黙を破ったのは暎司だった。

「ごめん…」

美月に手を伸ばす。

《まだこんなにも愛してるのに…。》

俯き涙を流す美月を、暎司が抱き締めた。

焦がれ続けたこの腕は、もう美月だけのものでは無いのだ。

切なくて切なくて、美月はただ泣いていた。

力強い腕の中に居ながらも、孤独感を拭い去ることは出来なかった。

23 壊れそうな心3（後書き）

年内完結に向け、頑張って執筆しようと思っています。読んでくださっている方、本当に有難うございます。

24 壊れそうな心4

あれから暎司は美月を抱いた。

美月は抵抗する気が無くなっていただけだった。

流れに身を任しただけで、早く終わればいいとさえ思っていた。

缶ビールを2本空けていた美月は、抵抗するのも面倒になっていたのだ。

体は酔えても、頭は冴え渡る。

《酔えない。

酔って何も考えられなくなってしまいたかったのに。》

激しく腰を動かす暎司の歪む顔が、愛しいと感じられない。

感情が死んでしまったかのようなのだ。

暎司は美月をきつく抱き締め、愛してる、と囁く。

偽りの愛なのか、本気で言ってるのか。

それを考えたくない美月は服を身に着け、また缶ビールを開ける。

「もうやめとけよ。」

ズボンだけ履いた暎司は、台所でビールを煽る美月に声を掛ける。
無視して美月は換気扇を回し、タバコに火をつける。

「…お前、タバコ吸えるの？」

美月はまたも無視する。

暎司が隣でタバコに火をつけた。

美月は何故か、勝手に言葉が突いて出た。

「携帯、見せて。」

暎司は驚いた表情で固まる。

見せて、ともう一度言い、暎司がいつもテーブルに携帯を置くので探しに行く。

既に真っ直ぐには歩けてない。

ヨロけて壁に手をつきながら、美月は暎司の携帯を開く。

何故携帯を見ようなんて思ったのか。

美月もよく解らなかった。

《女の勘、てやつか。》

暎司の受信メールをチェックしていた美月は、自嘲するようにクク

ツと笑った。

【私達の事奥さんにバレてたら、しばらく会わないようにしよう。1ヵ月くらい真面目にしてれば、大丈夫でしょ。暎司、好きだよ。】

ハートの絵文字がたくさん使われ、好きなどと書かれたそのメールに対してだろう返信を、暎司はしていた。

【今日行って話してくる。こっちは気にしなくていいから。明日の夜には帰るから寮おいで。】

美月は大声で笑った。何故携帯を見るのを暎司は止めないのか。理由はすぐ解った。

彼女からのメールは他にはない。消去しているのだろう。

つまりこの2件は消し忘れなのだ。

暎司が慌てて美月の元に来る。

携帯を奪い、画面に目をやると固まっている。

アハハとおかしそうに笑っていた美月は突然真顔になり、「出てって。」と暎司を睨む。

美月は暎司のカバンとＴシャツを差し出す。
もうこれ以上話すことはない。
この男を許す事は出来ない。

死んでしまえばいいのに、とさえ思った。

美月は壊れ始めていた。

踏み躪られた心は、愛する者の裏切りと嘘で、憎しみが溢れだしてしまっていた。

「出てけよ！」

美月は定まらない拳で暎司を殴りにかかる。暎司は避けた。

学生の時に父と喧嘩していた美月だ。

当たれば普通の女の子のパンチよりは余程痛いだろう。

美月は酔いを覚ますべく、自分の顔を両手で叩いた。勘を取り戻すべく、頭を働かせる。

美月の左腕は暎司の胸倉目掛けて伸びた。
右手はそのまま暎司の頬に当たる。

暎司は殴られて尻餅をついていた。

尻餅をついた暎司に、美月の蹴りが入る。

上がった右足にバランスを失い、美月も尻餅をついてしまった。

酔った体は息が上がるのも早い。

座ったまま暎司を睨む。

「どの面下げて鈴華に会えるの？さつさと出てけ。」

暎司はそろそろと起き上がると、Ｔシャツを着ていた。

美月は吐き気を催してトイレに駆け込む。

飲んで暴れたから、アルコールが回ったのだろう。

「大丈夫か？」

暎司がトイレのドアの前で声を掛ける。

吐くとすっきりした。

美月は今日まともに食事をしていない。

空きっ腹にビール３本。

酒の飲めない美月には考えられない量なのだ。

美月はケースでビールを買っていた。

飲みたくなるだろうと、一昨日買ってきておいた。

トイレからヨロヨロと出て口を濯ぐと、まだ冷蔵庫に入れてもいない４本目のビールを箱から取り出した。

立っていられず体育座りになり、開けて飲み始めた。

暎司は黙ってビールを取り上げる。

美月は勢いを付けて立ち上がると、暎司の手からビールを奪う。

壁に寄り掛かりながらタバコに火を付け、更にビールを煽る。

暎司は後ろで泣いていた。

「ごめん…。もう飲まないでくれよ…。頼む…」

傷ついて壊れて行く美月を見るのが辛かったのだろう。

「俺がいるから飲むの？それなら帰るよ…」

と言い、靴を履いていた。

美月は振り向きもせず

「かよさんに宜しくね」。

と後ろ手を振っていた。

ドアの開く音が聞こえて、暎司の足音が段々小さくなっていった。

暎司は行ってしまった。

浮気、嘘、裏切り。

人間として最低なものを置いて、行ってしまった。

その夜は美月は一睡も出来なかった。
気持ちが悪いので、眠ってしまおうと鈴華の横に横たわるが、睡魔が訪れることはなかった。

酒臭い美月の隣で、鈴華が伸びをした。
手がピクピク動いて可愛い。

しかし、暎司の子なのだ。

美月は鈴華を見るのも辛くなっていた。
もう自分では育てられないかもしれない、とまで思っていた。

義務感のみで、美月は鈴華に食事を与える。
買い置きのレストランをご飯に掛けて、食べさせてやる。

テレビで歌が流れ、鈴華は覚えたてのキラキラ星の振付をしている。

につこり笑う鈴華に、美月は愛想笑いを返した。

昼も夜も鈴華にレストランを与えてしまった。
何もする気が起きない。

その夜から、美月は全くと言っていいほど眠れなくなった。

床につけば、3分あれば眠りにつけるはずの美月が、眠れない。
毎晩美月はビールを煽る。

そうしないと考えてしまうからだ。

酔って眠ってしまいたい。

酔って何も考えられなくなってしまいたい。

美月は酒に助けを求めるしか出来なかった。

食事はほとんど摂らなかった。

鈴華が残した物を口にする程度。

久々に乗った体重計を見ると、たったの5日で3キロ体重が落ちていた。

クマのすごい顔。

これでは外に出られない。

米も鈴華のレトルトもビールも、残り僅かなのだ。

《酒が無くなったらどうしよう?》

アルコール無しで夜を越せる自信がない。

買いに行かなくてはならない。

美月はあれから全く外出していなかった。

鈴華の散歩さえ出ていない。

鈴華を餓死させる訳にも行かず、買い物に出るよう支度する。

しかし、ドアを開けるのが怖い。

何故か怖くて仕方ないのだ。

何が怖いのか自分でも解らない。

しかし握ったドアノブを回す勇気が出なかった。

夕方になり、美月はネットを思い出す。

宅配で何とかならないだろうか。

携帯のサイトをチェックする。

しかしビールに米に幼児用レトルト。

そんな都合のいいサイトなどない。

仕方なく、出掛ける支度のままだった美月はもう一度玄関に立つ。

抱き上げた鈴華が

「きーあ、きーあ、かるー」と歌いだす。

キラキラ星を歌っているつもりなのだ。

美月は立ちどまったままだった。

結局この日、美月は外に出ることは出来なかった。

翌朝、二時間ほど眠った美月だったが、体は限界を感じていた。ろくに眠ることも出来ず、食事はほとんど摂っていない。

鈴華を抱くのもやっとだった。

そこに母からの着信が来た。

美月は電話を取る。

「最近全然来ないじゃない。鈴華は？声聞かせてよ。」

うん、とだけ答え、美月は鈴華の口元に携帯を当てる。

バアバだよ、と言うと鈴華はアアアと言っている。

本人はバアバ、のつもりのようなのだ。

美月が携帯を持つと、母は美月に話しかける。

「ねえ、今日来れないの？鈴華に洋服買っただけから。ピンクの上着とね、スカッツも買った。スカッツってね、スカートにスカッツがくっついててね……」

そんな母のウキウキした声に、美月は突然涙が止まらなくなった。

「ううう」と嗚咽を漏らす美月に、母はびっくりしていたようだが、話にならない美月の様子に電話は切れていた。

美月はそのまましばらく泣いていた。

鈴華は頭を撫でてくれる。

鈴華が泣くと、美月がいつもしてやることだ。

泣き疲れてボーッとしていたら、ふいにチャイムが鳴った。

「美月、開けて」

母の声だった。

母は仕事を抜け出して来てくれたらしい。

部屋に入ってきた母は、ほんの10日ほど顔を合わせていないだけなのに、美月のやつれよう、そして部屋の荒れように、驚いていた。

これじゃ鈴華が歩けないから、とまず母は片付け始める。

美月も一緒に片付ける。

しかし美月は限界に達していて、もうフラフラだった。

母の顔を見て安堵した美月は、片付けを始めたそのままの体勢で眠りについてしまった。

起きると母の姿は無く、隣には鈴華が寝ていた。

2時間近く寝てしまったらしい。

母は置き手紙をし、夜また来る、とあった。

部屋は片付けられ、美月と鈴華用にうどんが茹でられていた。

この部屋の最後の食料だ。

美月は鈴華に食事を与え、キャラクターのビデオを点けてやる。

鈴華が起きている間は酒は飲まない。

ベランダで美月は、近くて限り無く遠い、コンビニの看板を眺めていた。

25 腕の傷1

美月は母にメールしていた。

美月はまだ外に出る気が起きない。

夜また来ると書き置きを残した母に、申し訳ないとは思ったが買い物頼むつもりだ。

きっと母は何があつたか聞くだろう。

全て話すしかないのだ。

美月にとっては、それを口にするのも重荷だった。

夕方母は買い物を終えてやってきた。

荷物が多いので、美月も運びに出る。

久しぶりに部屋から出た。

7月の明るい陽射しはまだ熱気を運び、毎日クーラーをかけ部屋から出ていない美月には、耐え難い暑さだった。

何だか、自分の居場所ではないような気がした。

今の美月は、ケースのビールを持ち上げる体力もない。

母と二人でやっと荷物を運び、部屋に戻る。

【ビールとレトルトと米】とメールしたのだが、母はたくさん食

料を買ってきてくれていた。

美月がお金を払おうとしたが、結局母は受け取らなかった。

鈴華が10日ぶりに会ったバアバに纏わりつく。

母の目元は下がりっ放しだ。

鈴華をあやししながら、母は美月に問い掛ける。

「何があつたの？あんたが急にこんなに痩せるなんてオカシイですよ。暎司君と何かあつたの？」

当たり前前の質問を母はしている。

美月はビールのケースから一本取り出す。

飲まないと話せそうにない。

「ご飯は？お酒飲めないのにビールなんて、何があつたのよ？」

美月は台所に行ってタバコを吸おうとした、がやめた。

タバコまで吸い出した事は、黙っておこうと思った。

ビールを一気に半分くらい飲んで、酔いが回るのを待つ。

胃がカアツと熱くなる感じがする。

行きたくもないのにトイレに行ってみたり、鈴華の夕飯に母の買ってきた野菜を刻み、うどんを煮直したりした。

母は鈴華と遊びながら、辛抱強く待っていてくれた。

美月はやっと口を開く。

「暎司ね、彼女出来た。バレてもまだ付き合うつもりみたい。だから別れる。」

一気に捲し立てた。

母が驚愕の表情のまま、固まっていた。

「……だって、鈴華もまだこんなに小さいのに！転勤だって1月くらいでしょ？そんなすぐに彼女出来ちゃったの？」

美月もそう思っている。

そんなにすぐに美月と鈴華は、小さな存在になってしまつものだったのか。

昼間あんなに泣いたのに、母に話したらまた涙が出て来る。

またビールの缶を傾ける美月に、母はおにぎりを差し出す。

「何も食べてないでしょ。うどん残ってるじゃない。」

美月は首を横に振った。

「あとで食べるよ。」

母は溜め息をつき、うどんを温め直して鈴華と二人で食べ始めた。

「あんたが体壊したら、誰が鈴華の世話するの？入院でもしたらどうするの？辛いだろうけど、もう母親なんだからね。」

母の言葉に頷く。

解っている。

だが体が欲しないのだ。一体何日物を嚙んでいないのだろう。

人間は何日か物を食べなくても大丈夫なんだな、などと考えていた。ビールを飲んでいるから大丈夫なのかもしれない。

「大丈夫だよ。あとでちゃんと食べるよ。」

美月はやっと作った笑顔で母を見る。

「寝てないんじゃない？顔が怖いよ。病人みたい。」

せっかく頑張って笑顔を作ったのに、怖いと言われてしまった。美月は久々に顔の筋肉を動かした事に気付いた。

自分に言い聞かせるようにはっきりと、ゆっくりと母に話す。

「今は仕方ないよ。時間が解決してくれるから、大丈夫。その内何

ともなくなるよ。」

そう。そう思うしかない。

けれど心は何かのし掛かったように重たく、苦しい。

発狂しそうな気持ちをずっと押さえていた。

美月の精神をまだ正常に止どめているのは、鈴華の存在があるからだ。

鈴華がいなかったら、美月はもう病院にいたかもしれない。

「離婚：してもいい？」

美月は母に問い掛けた。

籍を入れてから、まだ2年にもならない。

たった一回の浮気くらい、と諭されるだろうと思っていた。

「もう少しあんたが落ち着いてから、あんたが決めなさい。今の状態で決めたら後悔するよ。」

母は鈴華の面倒を見て、寝かしつけてから帰っていった。

ちゃんと食べなさいよ、とだけ言い残し、何も言わないでいてくれた。

母は長居せずに帰った。

その優しさが沁みた。

美月は誰かの相手をしている精神的余裕がないのだ。

幸い鈴華は色々な物に興味を示し、一人遊びに熱中してくれる年頃なので、ビデオを見せたり積み木を出したりするだけで済んでいる。

《この子は母親の変化に気付いているのだろうか？》

黙って美月の隣にちょこんと座り込み、積み木を重ねる。

お世辞にも器用とは言えない娘の手元に目が行く。

その小さな手を見つめていたら、美月は涙が溢れてきた。

「鈴華！鈴華はママと、ずっと一緒ね！」

美月は心から悔いた。

たったの一瞬でも、育てられないと思ってしまった事を。

暎司の子である以前に、自分の子なのだ。

遊んでもやれない、歌ってもやれない泣いてばかりの母の頭を、この子は撫でてやれる優しさを持っている。

自分の娘なのだ。

《ごめんなさい》

何度も心の中で謝った。

鈴華はその小さな手で、美月の頭を撫でてくれるのであった。

《この子が幸せと思える状況で育ててあげよう》

美月はそう心に決め、顔を上げた。

打ちひしがれてから、美月が初めて少し前向きになれた瞬間だった。

暎司からメールがきていた。

美月は暎司のメールをしばらく見ていなかったのだが、今まで入っていたのを見てみようと思った。

暎司が帰った翌日、メールは8:20に入っていた。

【彼女とは別れた。彼女はもう関係ないから。】

彼女を庇うようなメール。

暎司の心はそっちにあるのだろう。

それを認めるのは辛い事だが、受け止めるしかない。

ここまで墜ちたのなら、これ以上墜ちる事のほうが難しいだろう。

美月は新たなメールを開いた。

いくつかは同じ内容ばかりだった。

ごめんなさい、もう別れた、二度としない。

そんな言葉が何だと言うのか。

暎司は平気な顔でかよと言う女の為に嘘をつくのだ。
信用出来ない。

昨日付けで入っていたメールに、美月は動きを止めていた。

【8月11日に帰れる事になった。…アパートに帰ってもいい？話したい。】

【明日仕事が終わったらそっちに行きます。】

8月11日…。

あと一月しかない。

そして、暎司が本当は残業が無いのなら、仕事が終わるのは6:30頃だったような気がする。

今9時になる。

もしかしたら、暎司がそろそろ来てしまうかもしれない。

美月はメールを見ていなかった事を後悔した。

どうしよう？とウロウロしてしまった。

暎司の顔を見たくない。

話などしたくない。

話すことなど今は無い。

新しいビールを開ける。

半分くらい一気に飲む。

母が帰ってから4本目だ。

今日は早くから飲み始めてしまったから、もう横になろうと思っていたのだ。

《暎司に来られるのは嫌だ。》

美月はそう思っ慌ててメールを返信する。

震えてしまう手は、得意なメールなのに、ボタンを的確に押させてはくれない。

やっと【今日は来ないで】とだけ作ったメールを送信し、チェーンを締めようと立ち上がった。

母が帰る時に見送り、その時鈴華を抱いていたのでチェーンは締めていないはずだ。

無情にも、美月の伸ばした手の目の前で、ガチャリとドアが開いた。

落ち着きかけていた美月の心が、壊れようとしていた。

25 腕の傷1（後書き）

初めて評価戴いちゃいました 待っててくれてる方がいてくださるのに、ちよつと感動しました

読んでくださっている方、本当に有難うございます。

次回25日辺りには更新しようと思っています。

26 腕の傷2（前書き）

執筆が進んだので、短くなっしまいました但更新します。

26 腕の傷2

ドアを開けた暎司は、目の前にいた美月に驚いて立ち止まった。

美月も伸ばした腕をそのままに、固まっていた。

暎司のジーンズのポケットから、ぐぐもったメールの着信音が聞こえる。

きっと美月が入れたものだろう。

二人はそれを合図のように動き出した。

美月は諦めて部屋に入る。

暎司は携帯を取り出した。

美月のメールを見て、言葉を掛ける。

「都合…悪かった？」

「来て欲しいと思う訳ないでしょ。」

美月は冷たく言い放つ。

しばらく沈黙が流れる。

暎司が沈黙を破った。

「許してもらおうとは思ってない。でも、償いをさせてもらえないか？」

「…どんな？」

この先の事を何も考えたくない美月は、暎司にしてもらう事など思いついていなかった。

「8月からここに帰って、一生懸命仕事する。一生お前達に苦労させない。俺に一生面倒みさせて欲しい。」
美月が声を荒げる。

「やっていける訳ないでしょ！ たったの数カ月離れただけで女作って。その女が好きならそっち行きなさいよ！」

「…好きじゃない。お前達と天秤に掛けられるモノなんか無い。」

勝手過ぎる。

魔が差したとでも言う気なのか。

自分のせいで家庭が壊れそうだから、何とか保たなくてはという男の見栄なのか。

「ちょっと揺れてただけなんだ。ちゃんと考えたら、好きななんてモンじゃなかった。魔が差した。ごめん。」

《そら来た。案の定だ。》

美月は鼻で笑った。

それで浮気が片付く家庭があるのか？

一体どうしたら、答えが出るのか。

何が答えなのか。

今は全くわからない。

鈴華の為に仮面夫婦を演じていくのが鈴華の幸せなのか、それとも母娘二人でいるほうが幸せなのか。

何が正しい道なんだろう。

突然の暎司の来訪のショックが抜けきれず、更に来月からここに戻りたいと希望する暎司に、美月はやり切れない思いでタバコに火を付け、ビールを傾ける。

「ここに帰らせて下さい。」

部屋にいた暎司は、換気扇の下でタバコを吸う美月を追いかけてきて、頭を下げる。

愛した男のこんな姿を、見たくはなかった。
情けない。

何故自分は幸せになれないのか。

付き合っている時、束の間だがここで二人で暮らした時、鈴華が産まれた時、確かに幸せを感じていた。

何故幸せは長続きしないのか。
小さな幸せで良かったのだ。

それなのに…。

そんな普通の幸せさえ掴めない自分が情けなく思えた。

「朝晩、貴方の顔を見て正気でいられる自信が無い。鈴華の世話が出来なくなる。鈴華の事思うなら、とりあえず実家に帰って。」

酔うはずの量のビールを飲んでいるにも関わらず、頭は冴え渡る。

美月は嘘も裏切りも許せない自分を感じていた。

この人を許せる時は来ないかもしれない。

やはり今ここに帰って来させることは出来ないのだ。

「愛してるから。もう絶対裏切らないから。」

暎司が食い下がる。

しかし美月は答えない。
答えないのが答えなのだ。

タバコを丁寧にして、美月はビールの缶を捨てた。
4本目も空けてしまっていた。

新しいビールを冷蔵庫から出し、タバコをポケットに入れる。

携帯と部屋の鍵を持つと、美月は玄関に向かう。

「あと20分したら帰って。21分経ったら帰ってくる。」

美月は鍵を掛け、家を離れる。

ビール片手に夜道を散歩していた。

暎司と同じ空間にいる事が耐え切れなくなっていたのだ。

責めてもなじっても、裏切りは消えない。

ならば時間を置くしかない。

美月と鈴華が後悔しない為の、答えを出すまでの時間が必要なのだ。
それは暎司と話合って出るものではなく、美月が下す裁決のよう

なものだ。

母の言う通り、正常な判断を下す事の出来ない今、決める事ではない。

じっくり考えなくてはならない。

今の暎司の存在は、美月を追いつめただけ、苦しませるだけだった。早く帰って欲しい。

《愛って何なんだろう？》

美月はここ最近暎司の口から出る、愛してるの言葉の意味を考えていた。

暎司は滅多に愛してると言ったことがない。

…それが今になって連呼するように口にする。

薄っぺらな偽者の愛で繋ぐつもりなのか。

本当に美月を愛してるなら、バレた時、かよに【今夜寮に来い】などメール出来ないだろう。

まず彼女と真つ先に別れているはず。

暎司の愛は偽者だ。

彼女と別れず、美月を宥めるつもりだったのだから。

歩いていると、ジーンズがずり落ちてきた。

何キ口瘦せたのか。

前は欠かさず毎朝乗っていた体重計にも、最近ほとんど乗ってない。

「ズボン買わなきゃダメか。」

ベルト穴を一つ小さい所に通したのに、緩い。

独り言を言いながら、ビールを飲む。

コンビニの駐車場でタバコを吸おうと、ポケットを探る。

ポケットには財布が入っていた。

母にお金を払おうとして、そのまましまっているのだ。
美月は久々にコンビニに入った。

タバコをカートンで買った。

「有難うございました。」

そんな言葉を聞くのも随分久しぶりな気がする。

コンビニの外でタバコに火を付ける。

思えばアパートからこれだけ出たのは久々だった。

「あと2分か。」

携帯を見て美月はアパートに向けてゆつくり歩き始めた。

一方的な約束の20分になろうとしている。
鈴華を一人寝かせる訳にはいけないので、入れ替わりに部屋に帰るつもりなのだ。

Tシャツを少し捲ってみた。
肋骨が浮き出ている。

決して痩せていた訳ではない美月だったのに、ウエストは自分で持ってもびっくりするくらいに薄かった。

《何にも入っていないから当然か。》

美月は暗い外を歩いて、自分が少し落ち着いてきたことを感じていた。

明日はもっと立ち直れるかもしれない。

心持ち顔を上げて歩き出した。

暎司と顔を合わさないほうがまとまていられるだろう。
天性の明るさを持つ自分のことだ。
きつと時間が解決するはず。

そんな美月の思いは打ち砕かれた。
暎司の車は変わらずアパートの前に置いてあったのだ。

美月はコンビニで飲み終えたビールを捨てたので、計5本のビールを空けていた。

歩いたせいで酔いも回り、だるくて早く部屋に帰りたいかった。

《追い返そう。》

美月はそう決めて部屋に戻った。

《血、拭かなきゃ。》

美月は酔いの回った頭を巡らせた。

美月の右腕からは、血が滴り落ちている。

左腕は真っ青に腫れ上がった5cmほどの痣が、二つ出来ている。

酒のおかげで痛みはほとんど感じない。

腫れ上がった左腕は、感覚がなかった。

暎司は台所で座り込んで泣いていた。

27 腕の傷3

傷なんてどうでも良かった。

体の傷は、いずれ治る時が来る。

しかし心に追った傷は、いつまでも心に凍み付いて取れる目処さえも立たない。

カーテン越しに白んで明けようとしている今日を感じる。
外の薄明るい景色は幻のようで、まるで異次元にいるような気さえ起きる。

暎司は美月が仕方なく用意した布団で鼾をかいている。
泣きながら台所で体を丸め、眠り始めてしまっていたのだ。

暎司は一度声を掛けただけで目を開け、布団に移動した。

きつと美月の声に敏感になっているのかもしれない。

今日も美月は眠れぬ夜を終えようとしていた。

コンビニから部屋に帰ると、暎司はビールを飲んでいた。

暎司も飲まねばやっていられない、といった様子だったのだろう。

飲酒運転になってしまったので、帰らせるのもためらわれた。

暎司は逆ギレしてきた。

「一体どうしろって言うんだよ！俺はどうしたらいい？」

挑むような目で美月を見る。

「後悔したくないから、時間を置いて考えたいの。決めたら連絡するから、明日の朝寮に戻ってくれる？」

「どうせ離婚する気なんだろ？どうしたらやり直してもらえるのかを俺は聞いているんだよ！」

暎司は台所に座り込んだまま、顔だけを美月に向ける。

イライラしてきた美月はそのせいか酔いが回り、気持ち悪くなってきた。

トイレに閉じ籠る。

やっと出て来た美月に、暎司は会話を続ける。

「何て言えばいい？俺は何をしたらいい？苦しむお前を見ていたく

ないんだよ」

今度は縫るような目をしている。

誰のせいでこうなったのか、と美月は言っ^てやり^たくな^った。

ラクになれる道があるなら、美月だ^ってと^っく^に選^んで^いる。

今は自分でも道が見えないから苦しんでいる。

暎司のせいで、苦しんでいるのだ。。

暎司は残りのビールを流し込んで、缶を台所に置き^つ放^しに^して美月の所に歩いてくる。

美月はそれに腹が立^った。

「貴方は知らないかもしれないけどね！」

美月が声を荒^げた。

「鈴華が缶で遊んだらどうすんのよ！あの子、もう台所まで手が届くの！片付けてよ！」

美月はヨロける足で台所まで行き、缶をゴミ箱に捨^てて蓋^をき^っち^りし^める。

暎司が後ろから抱き締^めて^きた。

「ごめん…。俺これからはちゃんと真^っ直^ぐ見^るから。お前達の事、

守らせて。」

触れられなくなかった。

美月は抵抗する。

「離してよ！」

後ろからキツく絡む腕は、更に力を増す。

ごめん、と耳元で繰り返す暎司の吐息が髪にかかり、美月はそれも齒痒かった。

「離して！」

美月はポケットに入っていた鍵で暎司の腕を刺した。

「っ！」

暎司は一瞬怯んだが、腕は外れなかった。

腕はまた力強く絡む。

美月は暎司の腕に噛み付いた。

歯形の付いた暎司の腕は、それでも解けない。

……この時の美月は、酒が狂気で狂ってしまっていたのかもしれない。

後ろから抱き締めていた暎司が異変に気付いた。
美月の体が強張り、力が入っているのだ。

「美月…？」

美月は左手に持っていた鍵を、自分の右腕に刺していた。

鍵は腕を10cm程裂いていた。

鍵を刺す左手も、それを受け止めている右腕も、力が込められてプルプルと震えている。

赤黒い血がダラダラと流れ出す。

「おい美月！やめろ！」

暎司が鍵を奪った。

「離して！離してよ！」

美月がもがいても、暎司の腕は解けない。

躍起になった美月は、自分の左腕を噛んだ。

暎司が頭を引っ張るが、美月の歯はなかなか取れない。
腕からうっすら血が滲み出している。

《噛み契っちゃう！》

ヤバいと思った暎司は美月の頭を逆に押した。
美月はふいをつかれて少し力が緩んだ。

暎司が隙をついて美月の頭を腕で固定したが、美月は自分の腕をまた噛んでいた。

「…俺が離せばやめるの？」

暎司の声は震えていた。

美月は何も言わず、腕を噛み続けていた。

ふいに暎司が美月を開放すると、美月は腕を噛むのをやめた。

暎司は床に丸くなって泣いていた。

《酒って怖いなあ》

美月はベランダでタバコをふかしながら、右腕のタオルを取った。

やっと血が止まった。

酒の抜けてきた頭で腕を見ると、自分でやったとは思えない、無惨な跡が付いている。

裂けた傷などは、病院に行かないとくつつかないかも、とさえ思える。

鋭利な物で切った訳ではないので、えぐられているのだ。

病院に行く気の無い美月は、消毒液をかけてガーゼを乗せた。テープがないので、絆創膏で端と端を止めてた。

この暑さだ。

包帯など巻いたら膿んでしまうだろう。

左腕はまだ少し痺れているような感覚があり、かなり派手に腫れている。

ビールのせいで痛みをほとんど感じなかったので、容赦なく噛んでしまった。

この傷を自分で刺して、噛んだと言ったら、頭がオカシイと思われるだろう。

美月が見てもそう思うのだ。

それが出来てしまった自分が怖かった。

しかし、美月は他人：暎司を傷付けなくて良かった、と思っていた。他人に怪我を負わせるくらいなら、自分が痛いほうがいい。

この刺し傷はきつと跡が残ってしまうだろう。
でもそれもいいかもしれない。
男のずるさを忘れない為にも。

裏切った代償は、美月の傷を見て暎司が苦しめばいい。
美月はそう思っていた。

台所には、赤黒い血の跡が残っている。

《血、拭かなくちゃ》

このままでは固まって落ちなくなってしまうかもしれない。
暎司はまるで何事も無かったかのように黙をかいていた。

隣の布団で寝ていた天使は、何も知らずに幸せそうにノビをしてい

た。

こんな気持ちじゃなければ、美月にとってこの光景は幸せを感じさせる物だったはず。

《幸せになりたいよ。》

美月は心からそう思っていた。

27 腕の傷3（後書き）

更新遅れました。

待ってくださっている方、本当にすみません。

早ければ26日中、もしくは27日辺りまでには更新するつもりです。

28 腕の傷4

美月は朝食を用意していた。

両腕の傷は痛むが、何かやらなければもっと痛みに気がいつてしま
う。

それに暎司がそこに寝ている。

それも美月の落ち着かない大きな原因である。

痛む腕で食事の用意を終え、暎司のいる間に鈴華を連れ買い物に出
た。

する事が無くなると、ビールに手を出してしまいそうだからだ。
鈴華が起きている間に酔う事は出来ない。

傷が痛み、鈴華を抱き上げられなかったので、靴を履かせヨチヨチ
歩きの鈴華を連れて車に乗り込む。
車内に流れる童謡に、鈴華は手を叩いてリズムを取っている。

可愛い自分の娘。

久しぶりに二人で買い物に出掛けた。

一番近いスーパーで買い物をしていると、携帯に暎司から着信があ

った。

まだ着信拒否をしたままなのだ。

美月は買い物に出ているとメールを入れた。食事の用意はしてある。

《食べたならそのまま帰ればいいのに。

》

まだ愛している。

しかし、暎司と一緒にいたら、またおかしくなってしまうそうだ。

暎司の事を考えるだけで、見ているだけで、胸が苦しくなる。

今はただ日々を過ごすだけでいいだった美月には、暎司との将来を考える余裕はない。

やり直すのが正解なのか、離婚するのが正解なのか…。

全ては鈴華の幸せと思える環境で決めたい。

やり直したとしても、暎司がいる為に、美月がイライラしていたら…。

また、離婚したとしても、パパのいない生活で、美月は苦勞しないだろうか…。

どちらにしても、今選んだら後悔してしまうに違いない。

やはり時間をおくべきなのだ。

一時の心の歪みで決められる問題ではない。美月は少し落ち着いた頭で考えた。

暎司の転勤は終わり、暎司には実家に帰ってもらっている。しばらくは別居という形を取る事になっていた。

この一か月で美月は7kg痩せていた。今までここまで痩せたことはないので、服が全部ブカブカになってしまった。

母は優佳にも話していたので、優佳はよく美月のアパートに遊びに来ていた。

今日は着る服の無くなった美月の買い物に出掛けていた。

あれから少しずつ外出も出来るようになり、だいぶ元の生活に戻ってきていた。

相変わらず毎日ビールを3本くらいは空けていたが、食事も少しずつ摂れるようになってきている。

「また昨日も飲んだの？ 痩せたけどさあ、ビールは下っ腹に肉付くから、ワインにしといたら？」

優佳とはいつも新しいダイエットの話ばかりしている。

「ワインだとどれだけ飲むかわかんないからさ。1本空けちゃったら怖くない？」

あんまり飲み過ぎないでよ、と優佳は言い、薄くなった美月のウエストをうらやましがっている。

「いやいや、理由が理由ですから」

美月が苦笑する。

鈴華は遊んでくれる優佳が大好きで、ママが手を伸ばしても全く寄ってこない。

「失礼な娘だなあ〜！」

「鈴華は優佳姉ちゃん大好きだもんね〜」

優佳は御機嫌である。絶対におばさんとは呼ばせないと、【姉ちゃん】のところを強調する。

ふいに優佳は突然真髓を切り出した。

「でもさ、佐久間さんどうするの？あんな事する人とは思わなかったよ。許せるの？」

美月は一瞬心臓が縮む思いがした。

「…無理かもしれない。お酒飲まずにいられるようにならないと、決断はしないけど。何か他人に思えてきてる。」

そうなのだ。

あれから暎司は会いに来ていない。

美月の狂いようを見て、自分が行ったらまた美月が壊れてしまうかもしれないと遠慮していた。

本当は鈴華の顔を見たいのかもしれない。

美月と話を詰めたいのかもしれない。

しかし美月はまだ連絡するつもりはなかった。

代わりに美月の母が連絡していた。

暎司は最初に連絡した際、電話の向こうで泣いて謝っただけ。

母はお互い不幸になるのだから、浮気するならバレないようにやれと説教したらしい。

母らしい説教に、美月は久々に笑顔が出たものだ。

それに離れて暮らしているからか、今は苦しみが和らいできているのを感じていた。

暎司が帰ってきていたら、きっと、もっと辛かったかもしれない。

《美月が荒れてるから、しばらく顔を出さないように》

そんな母からの通達を守り、暎司はメールだけ毎日よこしていた。

今日の鈴華は？

美月の体調は？

まだ飲んでるの？

同じ内容がまるで順番のように巡って入ってくる。

暎司が明日やつてくる。

7月から会っていないので、3カ月ぶりだ。

2週間ほど前に、美月はビールを1本だけにして床に入ってみた。

昼間鈴華とたくさん公園で遊んだので、疲れていたせいもあり、意外にすんなり眠れた。

それでも毎日5時間眠ればいいくらいの睡眠しか取れなかったが、始めの一月を思えばよっぽど体がラクだ。

体の事を考え、最近はワインも飲んでいた。最初の内こそうつかり1本飲んで、トイレに駆け込んでいたが、最近では2杯くらいで眠れる日が多い。

《そろそろお酒やめようかな》

タバコは相変わらず部屋にストックを置いてある。

考え過ぎてしまう時は吸っていた。

立ち上がるタバコの煙を見ているだけでも落ち着くのだ。

暎司と話をしなければならない。

しかし美月はまだ決め兼ねていた。

どうしたら三人に取って一番良策なのか。

暎司の顔を見れば答えが出るかもしれない、と思い、暎司からのメールに、来ていいと返信をした。

左腕の噛み跡は、一月近くその跡を残していたが、今はもうない。右腕の傷は、7cmほどの跡を残したままだった。

美月は傷跡を見て思っていた。

《きつと消えないだろうね。心の傷みたいに。》

28 腕の傷4（後書き）

更新遅くなりました。次回の更新は明後日辺りまでには済ませるつもりです。

執筆が進めば、明日の昼間に更新します。
読んで頂いて、本当に有難うございます

思ったより長くなってしまいそうで、年内完結が難しいかもしれません。

執筆のほうは急ぎで頑張りますので、続けてお読みくださると嬉しく思います。

29 夢い夢1(前書き)

短いです、更新します。次回の更新は29日辺りになると思います。

暎司は明日やって来る。

この数日の間に、美月の気持ちは決まっていた。

決断させたのは、暎司の母、夏子からの連絡だった。

一昨日夏子から美月の携帯に連絡がきた。

「美月さん…、暎司が…ごめんなさいね。謝ったところで取返しがつかないけど…」

決して夏子が悪いわけではない。

しかし、美月は話をするのがためらわれた。

話の内容は検討がつく。

「出来れば、美月さんが許せるようになればいいの。暎司とやり直してもらえない？ パパがいないんじゃ、鈴ちゃんが可哀相だし。」

やはりそう来たか、と美月は思っていた。

どうするのかは、まだ決めてないのだ。

決まらないから暎司と会ってみようと思っているのだ。

「まだ何も考えたくなくて…」

美月の言葉を夏子は遮る。

「暎司も反省してるのよ。相手の人も、美月さんに謝りたいって、昨日も来て相談してたのよ?」

《昨日も…?》

も、と言う事は、一度や二度ではないのだ。

二人は未だに会っている。

美月が苦しんでいる間、二人は会って苦しみを分かち合っていたのだ。

美月はカアツと全身に血が巡るのを感じた。

「美月さん、どうかしら?二人に謝ってもらえれば、少し気持ちが変わるんじゃない?」

「いえ、変わらないと思います。謝る気があるなら、もうとっくに来てますよ。」

「でもね、別れるって言ってるから、ね?私の前で約束させたから、何とか考え直してちょうだい?」

もう暎司の肩を持つ義理は無くなった。
美月ははつきり伝えた。

「暎司さんは、7月に、彼女とは別れた、と私に連絡してきましたよ。」

「えっ？じゃあ別れてるんじゃないかしら？ごめんなさい、私詳しく聞いてないから」

しかしそれだけでもう充分だ。

暎司の心は美月と鈴華には完全に無い。それが解っただけで、充分だった。

美月の心配をしている振りをして、鈴華の心配をしている振りをして、彼女と会っていたのだ。

前よりはショックが小さかった。

美月はそれに安心していた。

もう自分を見失う事はないだろう。
きつとやっていける。

「明後日暎司さんが来るんで、よく話聞いてから考えてみます。」

そう言って、まだ何か言いたそうな夏子の電話を切った。

隣の鈴華が、美月と目が合うと、にっこり微笑んだ。

そろそろイヤイヤ期に入るはずの娘は、母の様子に気を使っているのかもしれない。

どーぞ、と積み木を美月に渡してきた。

《この子が居れば、大丈夫。》

今美月は、鈴華を産ませてくれた暎司に感謝さえしていた。

発狂しないで済んだのは、この子がいてくれたおかげだ。

この子に頭を撫でられて、何度癒されたかしれない。

暎司には解らない、美月の小さな幸せだった。

母に電話を掛ける。

今日は母は休みのはずだ。

何コールか鳴らすと、やっと母が電話に出る。

「お母さん？ごめんね。やっぱり離婚する。鈴華と頑張っていけるから。」

母はうん、解ったとだけ返事をして、しっかり話し合いはしなさいよと付け加えて電話は切れた。

翌日。

暎司は俯いて聞いていた。
離婚届を明日提出しに行く事
これからの金銭の事
月一回は鈴華と会う事。

二人の短い結婚生活は、明日終止符を打つ事になる。

美月が告げている間、暎司は一言も口を開かなかった。

「鈴華は私が育てます。この子は私の命だから。」

暎司は泣き始めた。

久々に会った父に人見知りして、隣の部屋から覗くだけだった鈴華

は、暎司が嗚咽を漏らして泣き始めると、そつと部屋から出てきた。モジモジしながら暎司に近付き、頭をそつと撫でている。

暎司は顔をあげて鈴華に気付くと、強張っている鈴華のもう一方の手を握り締めた。

鈴華はうろたえていたが、泣き続ける暎司の頭を撫でる手は、下げられる事は無かった。

《貴方の娘はこんなに優しい子に育っている。そんな事も知らなかったでしょうね。》

美月は泣かなかった。

この決断が正しいのか正しくないのかは、今は解らない。

しかし、暎司の心は帰ってきてはくれないだろう。

心の繋がっていない人と一緒にいても、寂しいだけなのだ。義理や情けで世話をしてもらうことは、夫婦とは言えない。

守りたいから、一緒にいたい。

鈴華を守りたい。

暎司を守りたい。

守る事は、危険からだけではなく、病気や悩み…そんな色々なモノから守りたかった。

そして、互いに愛情を与えあい、小さな幸せでいい。それを分かち合いたかった。

しかし、暎司と居る事は、互いにとって苦しみを生む。

美月は、裏切られた苦しみを。

暎司は、かよと引き裂かれる苦しみを…。

それならば、互いに自由になったほうがいいのだ。

今は辛くとも、新しい道は必ず開ける。

きつとそれぞれに新しい道が待っているはずなのだ。

それを信じるしか今はできない

31 儚い夢2

離婚届は翌日美月の手によって出された。

紙切れ一枚を差し出す。

何の事はなかった。

市役所の職員は書類に目を通し、2、3質問をして、

「確かに受理しました。」

それだけを言い、二人を繋いでいた絆はあっさり受けとられた。

暎司は知らないかもしれない。

その日は4年前、二人が付き合い出した日だった…。

三年後

暎司は約束を守り、鈴華と月一回は必ず会っている。休みが会えば、三回くらい会いに来る時もある。

美月は離婚後すぐ、前に働いていたケーキ屋の誘いを受け、またケーキ屋で働いていた。

保育園に入った鈴華のお迎えの時間には帰らせてもらっている。

4歳になった鈴華はパパはたまに来る人、と思っているらしい。

口ばかり達者になり、

「パパが来るんだから、ママ可愛い格好しなきゃダメだよ！」などと言ってくる。

「はいはい。」と言いながら、家事をしている美月に、二人お揃いで買ったチュニツクを持ってやってくる。

「今日はこれ着よう。パパまだ見てないから。鈴華これ可愛いから好きだもん！」

生意気になったものだ。

最近では美月の髪型にもケチを付けてくる。

くりんくりんのほうがママは可愛いよ！などと言われると、子供の言葉ながら、ついパーマを掛けに行ってしまったりする。

美月の毎日は、鈴華という生き甲斐のおかげで輝き出していた。

暎司はかよと、半年ほど前に別れたらしい。

本人が言っていたのだ。

美月は離婚届を出してすぐ、一度かよに電話をしていた。暎司にコールしてもらったのだ。

「暎司とは離婚します。貴方がたが本当に好き合っているなら、無理に夫婦をしてもいつかは崩壊します。そんなところを子供に見せたくないですから。」

黙って聞いていたかよは、すみませんだけを繰り返す。

「私は騙されていたことが許せないんです。でも貴方が奪いたいくらいの覚悟なら、暎司を譲ります。暎司の心は貴方にいつてますから。」

美月のかよの言葉を少し待った。
しかしかよはすみませんでした、と呟くだけで、それ以上は話しそうもなかった。

「騙した貴方達の事、きつと恨むと思います。」

それだけ言つと電話を切った。すみません、しか言わないかよに、恨み言の一つも言つてやりたくなつたのだ。

ごめんなさい、でも好きなんです、くらいの言葉が聞きたかった。それさえも叶わなかったのだ。

美月と鈴華の幸せを壊して、一時の気の迷いだとても片付けられる

ほうが嫌だった。

それなりの覚悟だった答えが欲しかった。

電話したのは失敗だった。余計に虚しくなった。

そんな一時の浮ついたモノで、美月の幸せは壊されたのだ。恨んでも恨みきれない。

忘れる時がいつか来てくれる事を願うしかなかった。

そんな美月の苦しみも、一年も経つと、暎司と昔のように話せるようになってきたことで自然と薄れていった。

暎司は約束の時間ピッタリにいつもやってくる。必ず鈴華に玩具を用意してくる。

最初は高い玩具ばかり買ってきたので、その分これからかかる鈴華のランドセルや、保育園の制服代にしてくれとやめさせた。

暎司は美月に怒られない程度の金額の物にし、その分養育費に少し上乗せしてくれていた。

母子家庭手当てと養育費があるが、美月のパート代ではいつもギリだ。

しかし鈴華に貧しい思いはさせられない。

みんなが持っている玩具を暎司に頼んだりして、何とか体裁は保っていた。

そのおかげで暎司の株は上場しそうなくらいに上がっている。

暎司が来た日は美月などそっちのけだ。

毎日鈴華の世話をして、仕事も家事もこなしている美月はもちろん面白くない。

暎司のくる時は鈴華を預け、美容室に行ったり歯医者に通ったりしている。

そうでないと本当に美月は腹が立ってしまうからだ。

「パパが毎日いればいいのに」

「パパ帰らないで？」

拳句、

「ママお買い物行ってきていいよ。」とまで言われてしまう。

暎司はいつも苦笑していた。

そんな暎司が、

「たまには3人で食事いかないか？」

鈴華行くー！とピョンピョン飛び上がっている。

美月は暎司と外に出るのを意図的に避けていた。

幸せそうな家族と思われるのが嫌だったからだ。

しかし暎司の言葉に鈴華は行く気満々で、既に靴まで履いている。

仕方なく、美月も玄関に向かった。

レストランで食事中、突然ケーキを持った三人の店員が現れた。

「お誕生日、おめでとうございます！」

と言い、ハッピーバースデーと歌い出す。

それで美月は気付いた。

美月の誕生日だったのである。

自分の誕生日さえ忘れるほど、美月は毎日を必死に過ごしていたのだ。

鈴華に淋しい思いをさせてはいけないと、美月なりに頑張っていた。

自分の誕生日などどうでも良くなっていたのだ。

一時の幸せな家族を演じ、暎司は帰っていった。

それからも暎司は変わらず一月に何度か、鈴華に会いにきていた。

鈴華は小学生になり、段々事情も飲み込める年頃になっている。

何でパパと離婚したの？と聞かれたのが一番辛かった。

浮気などと説明したくない。

しかし嘘をつきたくない美月は

「パパがママの事、好きじゃなくなっちゃったから」と答えた。

鈴華はふうん、とだけ答え、それ以上は聞かないでいてくれた。

暎司が鈴華に会いに来ると、いつも鈴華は勝手に盛り上がる。

「こんなに仲がいいんだから、もう一回結婚しちゃえば？」

ははは、と渴いた笑いで美月は受け流していた。

「でもパパには彼女出来ちゃうかもしれないよ？ねえ、パパ。」

「彼女ならいるよ。鈴華が。」

そう言つて暎司は鈴華を抱きあげる。

スラリと細長い印象の鈴華は、1年生の中でも飛び抜けて大きい。

顔は暎司によく似ているが、運動は美月のモノを受け継いだようで、体育は得意だ。

暎司は最近月4回くらい会いにきていた。

これだけ来るのだから、今は彼女がいないのだろう。

もう32歳になった暎司だ。

再婚するならそろそろ考えなよと、美月も勧めていた。

「今はいい。」と暎司はぶっきらぼうに答え、鈴華と過ごす休日を楽しんでいた。

暎司はかよと別れてから、何人か付き合つた人がいたようだ。

敢えて美月は聞かないが、暎司の来る回数とよそよそしさで何となく解る。

美月には彼を作る余裕もない。

それに鈴華と一緒に過ごす休日が、何より楽しいから、必要無かつ

た。

生意気な事を言う鈴華と話していると飽きない。

人を楽しませるのが得意なところは、パパに似たのかなあ？なんて思う時もある。

やはり、鈴華という時間は幸せだった。

二人でオムライスに名前を書く時、服を選ぶ時、美月は幸せを感じていた。

今美月は、自分の選んだ道は、間違いではないと自信を持って言う。

鈴華がそれを教えてくれたのだ。

小さな幸せを、美月はとくに手に入れていた事に、ふと気付いていた。

31 儚い夢2（後書き）

更新遅れてすみませんでした。

次回は年越前には更新するつもりです。

そろそろ完結の予定です。

文章力、話の内容、etc、評価戴けると幸いです。

31 歩み出した道

圭太が昨年結婚した。

ずっと付き合っていた久美子と念願のゴールインだ。

何度がプロポーズしたが、仕事で資格を取るまでは仕事に専念したい、となかなかOKを貰えなかった。

29歳で資格を得た久美子に何度目かのプロポーズで、やっとOKを貰ったのだ。

美月は暎司と別れてから、しばらく立ち直るのに時間を要した。

しかし立ち直ってからは暎司や圭太らとアパートで集まったりしていた。

事情を知る皆は、敢えて聞き出したりはしないでいてくれたので、楽しく過ごせた。

ある日、4カ月になる息子を連れて遊びに来ていた久美子は、思い切って切り出してきた。

「暎司君とやり直せないの？ごめんね、差し出がましい事言って。」

「ううん、本音で聞いてくれるの嬉しいよ。私も本音で話させてもらうね。」

二人はフフ、と笑いあい、話を続ける。
鈴華は小学校からまだ帰っていない。
今なら色々話す時間がある。

「まだ好きなのは確かにあるかもしれない。でも許すのは、また別。」

「そっか。もう少し時間が必要なのかな。」

久美子は寝ている我が子の服を脱がす。
陽射しがあるので、少し汗をかいているようだ。

「でも時間が経てば、暎司も新しい彼女できるだろうしね。今はいないみたいだけど。でも私には鈴華がいるから。暎司も早く相手見付けて幸せになればいいなって、今は思えるよ。」

「偉いねー。私だったら、海に沈めるかも！」

二人はケラケラ笑った。
美月は久々に本心で話せた。

久美子は幸せそうである。
一年の育児休暇を終えたら、前の職場に復帰するそうだ。

信念を持ち、決してそれを譲らずにきた久美子に、美月は尊敬の念さえ持っていた。

「でも美月さん幸せそう。それ見てると、シングルマザーも悪くないかもって思っちゃう！」

「いーよー！旦那の食事気になくていいし、友達のとこに泊まりにも行ける！久美子さんも泊まっていつちゃえば？」

そんなやり取りをして、久美子と楽しい時間を過ごした。久美子とは何でも話せそうである。

幼馴染みの紗季のところにも、美月はたまに泊まりに行っていた。

紗季の旦那は消防士なので、泊まりで仕事が多いのだ。

紗季はよく美月を誘ってくれ、話を聞いてくれた。

美月が立ち直れたのは、そんな皆との時間があつた事が大きいだろう。

7kg痩せた美月に、紗季は随分と心配してくれた。

傷ついて無茶な生活をしたせいで、離婚した翌年、美月は体を壊した。

小さい頃に持っていた喘息がぶり返し、発作を起こすようになってしまったのだ。

母は心配して体にいい物をしょっちゅう届けてくれた。

半年ほどで体重が3kgほど戻ると、美月の体調も良くなり始めた。

その頃からパートを始め、紗季の家にも泊まりに行くようになった。今の美月は、この生活がとても充実している。

裕福ではないが、二人なら何とかやっていける。それに何より、気をおける仲間がいてくれる。

何でも話せる友人がいてくれるのは、何よりの宝物なのだ。

鈴華がいてくれる。

確かな幸せがここにある。

辛かった日々も思い出になろうとしている。今なら、暎司にちゃんと向き合えるだろう…。

美月は未だに暎司と会話らしい会話をしていない。

彼女出来た？そんな友達のような会話は出来ない。それは暎司も解っているのだろう。

暎司のほうから近況をたまに報告してくるからだ。

かよと暎司の付き合いは、3年近くにも及んだろうか。

「かよさん元気？」

前に少し皮肉を込めた言葉を掛けてみた。

「半年くらい前に別れたよ。」と暎司は答えた。

美月はそれから、そういった類いの話を暎司にしなくなった。
新しい彼女が出来たと言われたら、少なからずショックを受けそうだからである。

軽く、再婚したら？と冗談めかして言うのも、かなりの勇気が必要なのだ。

今なら、まともに向き合える気がした。

暎司は鈴華と外で縄跳びをしている。
美月は出掛ける支度をして外に出た。

「何時頃歯医者終わる？」

暎司が声を掛ける。

「予約だから。帰りに夕飯の買い物してくるよ。鈴華、今日何がいい？」

「ハンバーグ！ねえパパ！ウサギさんにしようよ！」

二人に見送られ、美月は歯医者に出掛けた。

待ち時間もほとんどなく歯医者を終え、買い物に出掛けた。

スーパーに車を停めた

はずだった。

そこから記憶は途切れている。

美月は明らかに病院のベッドらしきところに今寝ている。

《何？》

細く開けていた目を大きく開くと、暎司と鈴華が心配そうに見つめていた。

「ママ！」

「美月！大丈夫か？」

美月には状況が飲み込めない。
体のあちこちにジリジリとした傷みを感じる。

「何で？私どうしてここにいるの？」

「覚えてないの？バイクに跳ねられたんだよ。怪我は軽いけど、頭打ってるから検査結果出るまで寝てな。」

暎司に書類から何から、全てを任せてしまった。
心配された検査結果は何ともなく、打ち身だけだった。

既に8時を回り、アパートに向かった。
美月は病院を出てからずっと考えていた。
今日は暎司がいたから何とかなったのだ。

独り身には、こんな事も沁みてしまう。
これ以上居てもらったら、甘えてしまいそうな自分がいる。

スーパーに車を取りに行き、アパートに車を停めた。

「暎司、今日はもう大丈夫だから、有難う。」

「えー！パパまだ帰らないでよー？」

「鈴華、ママ疲れちゃったの。また来週パパ来れるから、ね？」

暎司は少し考えていたが、次に発せられた言葉は意外だった。

「今夜泊まらせてもらえない？明日は仕事遅く行けるから。鈴華の支度とかもあるでしょ？」

まだ体も頭も痛む美月には、有り難い申し出だった。
しかし、そこまで甘える訳にはいかない。

「大丈夫だから。きにしないで。」

美月は言ったが、鈴華と暎司は手を繋ぎ、アパートに入っていく。

大きな後ろ姿と、細く小さい後ろ姿を繋ぐその手を、美月は見つめていた。

3 1 歩み出した道（後書き）

年越しまでに、もう一度更新出来ればと思います。

32 17年間

暎司は鈴華を風呂に入れたり、翌日の教科書の準備をしたりと、か
いがいしく働いた。

今日はご飯の支度も出来なかったので、皆でカップラーメンを食べ
た。

9時を回って、鈴華はもう寝る時間だ。

暎司が鈴華の隣に横になった。

美月がお風呂に入っている間に、鈴華は寝ていた。

「暎司、ワイン飲む？ワインしかないけど。」

「じゃあ少し飲もうかな。」

二人は何年かぶりに二人きりの時間を過ごしていた。

「…暎司。再婚するなら、私達の事は気にしないでしていいからね。」

「え？ああ…。結婚したい人がいたなら、そうするよ。」

美月の胸は、チクン、と痛んだ気がする。
暎司は美月の肩を抱き寄せた。

「俺、こんな事言えた義理じゃないけど…もう一度、やり直せないか？」

美月は床がグラツと揺れた気がした。
何故かシヨックだった。

暎司は放心している美月に、顔を近付けてきた。

そつと唇が触れる。

「やめて。」

美月は暎司から離れて立ち上がった。

再婚したらと言って、自分がシヨックだったのは事実である。
しかし、暎司とやり直す事など、考えた事がない。

しばらく彼女がいない事が、暎司にその言葉を言わせているのだろ
う。

きっと人恋しくなっただけなのだ。
ここで甘い言葉を言われて、グラついてはいけない。

きつと二の舞になるに違いない。

「ごめん。そういう事考えたくない。」

「…そうだよな。悪かったよ。」

暎司はワインを一気に飲み干した。

もう寝るわ、と言って布団に入った。

布団に入った暎司が話しかけてくる。

「美月がもし、許してくれるなら、俺戻りたい。いつまでも…待つから。おやすみ。」

暎司はそれだけ言った。

いつか許せる日がくるのだろうか。
美月には解らなかった。

「みづ！行ってくるね！」

「いつも寝坊するんだから。たまには余裕もって学校行ってみたら？」

「だって面白いテレビが深夜なんだもん！」

「じゃね！と言って鈴華は小走りに部屋を出て行く。」

小さいが二人なら充分な中古の家を購入し、二人は母子家庭ながら、幸せに過ごした。

鈴華は美月の事を【みづ】と呼ぶ。

二人で買い物に出ると、よく姉妹に間違われる事がある。

元々童顔な美月は、44歳には見えない。

2万、とちよつと高いが奮発して購入している、エステのしわ取りクリームが功を奏しているのかもしれない。ケチケチ使って5ヵ月くらいは保たせている。

下手な化粧品を使うより、若返りクリームをずっと使用しているほうがいいと美月は思っている。

他は化粧水だけなので、そこまでコストがかかるわけではないからだ。

また、大人びた顔をした鈴華は、服装によっては20代半ばくらいに見える時もある。

時は流れ、鈴華は高校3年生になっていた。

街は徐々に姿を代え、新しい高いビルが増えた。

街路樹が道の端に色濃い緑の葉を付け、整然と並んでいる。

二酸化炭素の削減の為、ほとんどの道路脇には街路樹が植えられた。
あの小さな木が、いつの間にかこれだけ大きくなってしまった。

街路樹に目をやりながら、美月は歩いて仕事に向かう。

あのケーキ屋で相変わらず働いている。

店長の紹介で、店の近くに家を買ったのだ。

駅も近い。

生活に追われ、いつの間にか鈴華はもう18になっていた。

小さい頃鈴華が、

「ママはケーキ屋さんで働いてるんだ！」とお友達に自慢していた。
そのおかげで美月は長い事働けている。

来年には高校も卒業する。

鈴華は卒業したら、ダンスを習える専門校に通うことを決めている。

専門校はなかなか門が狭く、受験した半分が不合格だという。

そこを卒業すると、ダンスでの就職率は90%という名門校なのだ。

鈴華はテーマパークでの就職を希望している。

身長が168cmある鈴華は、親の美月から見ても格好いい、と思う。

女二人も揃えば、いつもネットでサプリのチェックにぬかりはない。

そのおかげか二人ともさほど体形を崩す事なく来れている。

それに週末の休日、鈴華は自分でアルバイトをしたバイト代で、ダンススクールにも通っている。
そこでダンスを踊るのも、鈴華のダイエットに拍車をかけているのだろう。

小さい頃に鈴華が自分から、バレエを習いたいと言い出した。

しかし、バレエのドレスとチュチュは高く、発表会を毎回は出させてやれなかった。

鈴華は

「レッスンだけでいいよ」と笑顔で言ってくれた。

小学校6年生まで習い、鈴華はバレエからダンスという道を選んだ。

ダンスなら、路上でもどこでも練習が出来る。

母の為…かもしれない。

しかし鈴華はバレエより、ダンスの才能があったらしい。
メキメキ上手くなっている。

5年やっているが、スクールで一番上手いと美月は思う。

それも自慢だ。

暎司は休みをなるべく鈴華の発表会に合わせたりして、娘の勇姿を観に来ていた。

6年生で出たバレエの発表会や運動会では、暎司は涙を流すほどだった。

暎司は変わらず月に何度か鈴華と会いに来ている。

8年程前に、美月は暎司からやり直して欲しい、とまた言われていた。

「考えた事ない」と美月はまた答えた。

この幸せが崩れるのが嫌だった。

愛情が暎司にあるのかも、もう解らなかった。

そして暎司は6年前に7つ下の人と再婚した。

鈴華には相変わらず会いに来ているし、養育費も送ってくれている。その為かなり残業をしたりしているので、今の奥さんともあまり上手くいつてないらしい。

しかしそれは美月の知った事ではない。

養育費をくれなくてもいい、と言えるほど美月はお人好しではないのだ。

それに再婚したならもう会いに来なくていいと言ったのだ。

しかし暎司は変わらず会いに来ていた。

変わらぬ17年間に過ぎた。

二人だけの幸せを守っていた。

この出来事が、美月の運命を更に大きく変える事になるとは思わなかった。

たったこれだけの出来事が…。

店のチャイムが鳴る。

ドアの開く振動で、自動でオルゴールが流れるようになってる。

「すみません、ケーキをホールで一つ。」

「はい。有難うございます。」

中年の男の客は電車の時間でも迫っているのか、慌ただしくお金を払い、ペコリと頭を下げ出て行く。

その際バックの中身がバラバラと散った。

「ああ〜！」

男は右手にケーキの箱、左手にしまおうとしていた財布を持っていたので、すぐ拾いにかかれない。

美月は慌ててバックの中身を拾いに行った。

男は自分でも急いで荷物を掻き集め、すみませんでしたと言って出て行った。

男の出て行った20分くらい後、店の中で軽快な音楽が流れる。

今店番は美月一人なので、一体何事かと思って音の鳴るほうへ歩く。

携帯電話が鳴っていた。

たぶん、あの男の人の物だろう。

美月は拾って、連絡をしなくては、と即座に思っていた。

32 17年間（後書き）

更新遅れました。すみません。

そろそろこの小説も最終回を迎えます。

次回作、また投稿しようと思っていますので、桜井 桃を今年も宜しくお願い致します。

33 恋の始まり

美月は電車を降り、駅前の小さいレストランのドアを開けた。

店員に案内され、テーブルについた。
窓際の席からは、表通りが見渡せる。

外は瑞々しい木々が並んでいる。

初夏の陽射しを受け、下を通る人々にキラキラと輝きを届けている。
まるで全ての人に、栄養を分け与えてくれているかのように輝いている。

こんなに天気の良い日にゆっくり外を見渡すのは、一体いつ以来だろうか。

日々の生活に追われ、気付けば美月は44歳。
あっという間だった。

美月はコーヒーを頼み、ふと今までの事を思い出していた。

体を壊すほどに悩んでいたあの頃も、今では若かった、で済ませる事が出来る思い出になっている。

今でも右手には傷跡が残っているが、たまに心に響く時がある程度だった。

暎司に助けてもらいながら、やっとここまで来れた。

鈴華が専門学校に行けば、学費は年間一括支払いで2年制。

あと2年頑張ればいいだけなのだ。

結婚して子供が先日産まれた暎司の為を思い、養育費は高校までで終了する事になっている。

しかし、鈴華の卒業時に、専門校の1年間の授業料の半分を負担したいと暎司は申し出てくれた。

あとの残りは、美月が頑張るしかない。
でもきつとやっていける。

いざとなったら、鈴華のバイト先のコンビニで、少しバイトさせてもらおうと思っている。

しかし、その後自分はどうするのだろう。

鈴華が巣立ってしまったたら。
鈴華が結婚してしまったたら。

一人きりになってしまう。
最近そればかり考えている。

一人で過ごすのは、どれだけ淋しい事だろうか。
暎司を恨まずにはいられない自分がいる。
しかし暎司の再婚して欲しい、との申し出を断ったのは自分なのだ。

美月が一人頭を悩ませていると、店のドアが開く音がする。

目をやると、中年の男性が入ってきた。

美月を見付けると、やや足早に近寄ってくる。

「吉川さん…ですね？」

「はい、そうです。あの、これ、携帯電話を…」

男は美月の言葉を遮り、

「本当にすみません。こちらまで持ってきて頂いて。白のジャケットは目立つんで、すぐ解りました。」

美月は店で拾った携帯電話を届けに来ていたのだ。

店員の顔など覚えていないだろう男との待ち合わせに、美月は解り易いように白のジャケットを着ていくと伝えたのだ。

電話でも低姿勢な素振りを見せた男だが、会ってみると更に低姿勢で、ペコペコと頭を何度も下げている。

確か名前は斉藤と言ったか。

「いやあ、助かりましたよ。」

斉藤は席について、紅茶を頼んだ。

「恥ずかしながら、コーヒーは苦手です。」

斉藤は封筒を差し出す。

「あの、これ電車賃と、少ないけどお礼です。」

美月は予想もしなかったお礼に驚いた。

「いえ、たかが携帯を届けたくらいでお金なんて困ります。」

美月は封筒を返そうとテーブルを滑らせた。

斉藤は尚も封筒を美月の前に置いた。

「いえ、持ってきて頂いてお礼もしない訳にはいきません。たいしたお礼ではないですけど、受け取って下さい。」

斉藤の強い口調に美月は戸惑った。
お礼など端から期待してもいなかったのだ。

「じゃあ失礼します。」

美月はそう言って封筒の中身を開けた。

電車賃だけ貰って返すつもりで。

しかし一万円札が入っており、美月は更に驚いた。

「あの、こんなには戴けません。」

「いえ、本当に助かりましたから。」

そんなやり取りを何度か続け、美月は思い切って切り出した。

「今日はお時間ありますか？」

「え？はあ、休日なんで、特に予定もありませんが。」

斉藤はきよとんとしていた。

「じゃあ電車賃を引いて、残ったお金で映画と食事でもいかがですか？」

「えー！」

斉藤は鳩が豆鉄砲をくらった、という顔をしていた。

「あ、奥様に申し訳ないかしら。それなら食事だけここでもしましう。」

斉藤は慌てて言葉を返した。

「いえ、あの、妻はもうずっと前に亡くしまして。ですからそれは大丈夫なのですが。」

「あ…そうなんですか。失礼な質問してすみませんでした。」

美月は頭を下げた。

「いやいや、もうずっと前ですから。あ…じゃあ映画行ってみましょうか？映画なんて10年以上見てないかもしれないですよ。」

二人は店を出た。

斉藤の案内で映画館に向かう。

駅からすぐ近くのビルの地下にあるらしい。静観を壊さないよう、最近の建物は皆低めに作られ、地下のほうが広いところも多い。

二人は見る映画を決めるべく、ポスターの説明書を読む。

譲り合いでなかなか決まらない。

焦れてきた美月は斉藤に切り出す。

「じゃんけんしましょう！勝ったほうの好きな映画で決まりで！」

有無を言わせずじゃんけん、という掛け声を始める。

勝負は返答の間もなく、咄嗟にグーを出した斉藤の勝ちだった。

申し訳ないから、とオタオタしている斉藤を残して、彼が気にしていた映画のチケットを美月は購入しに向かった。

「最近のはよく解らないんですもの。斉藤さんのオススメ試してみましよう。」

美月は笑顔でチケットを渡す。

斉藤は申し訳なさそうに付いてきている。

映画が始まるまでまだ30分ほどあり、二人はベーグルサンドを食べて待つ事にした。

少し名の知れたベーグル屋が入っているのだ。

美月は前からこの店のベーグルが食べてみたかった。

実は映画館に入って、一番先に目がいつていたのである。

「美味しそうに食べますねえ。まるでうちの娘を見てるみたいですよ。」

「娘さんと一緒にしたら可哀相ですよ。もう44ですから。」

斉藤は心底驚いた顔をする。

「44歳！？いや、見え不是吗！お若いですね〜！」

「有難うございます。でも童顔なだけです。」

照れながらも美月は少し嬉しくなり、斉藤との話も楽しくなっていたので、会話は弾んだ。

斉藤は46歳だった。

美月は正直50辺りかと思っていたのだが。8年前に妻を亡くして、男手一つで20歳の娘と19歳の息子を育ててきたそうだ。

苦労してきた分だけシワが刻まれているのかもしれない。

「娘は専門校を出まして、看護婦の見習いをやっております。息子はまだ大学生でして。あと3年は倒れる訳にはいかないですよ。」
ハハッと笑いながら、ベーグルの最後の一口を口に入れていた。

「そうですか。私もシングルマザーやってますから、気持ちはいよく解りますよ。18の娘がいるんです。」

18の娘！と斉藤は相変わらず豆鉄砲をくらっていて、その反応が美月をほっとさせた。

《こんなに素直じゃ、娘にからかわれるだろうな》

美月はフツツと笑って、斉藤を促す。

そろそろ映画が始まるのだ。

まるで夫婦のように仲よさげに二人は館内を歩く。

男の人が苦手になっていた美月も、いつの間にか斉藤の人の良さに引き込まれていた。

映画はコメディで、二人は笑い声をあげながら映画を楽しんだ。

映画の後はファミレスで食事をした。

お互い同じ境遇なので、会話は尽きず、世間話から悩み相談にまで

色々話は発展していた。

美月がふと携帯を見ると、時間は既に7時を回っていた。

「やだ！もうこんな時間？もう帰らなくちゃ！」

美月はすみません、と言いながら帰り支度をする。

「こちらこそ、本当にすみません。すっかり話し込んでしまった。」

斉藤も帰り支度を始めた。

レジに向かうと、既に会計は済んでいて、まだ温かい弁当を手渡される。

「え？これ。」

「娘さんの夕飯に。うちも買いました。」

気を利かせた斉藤は、美月が手洗いにでも立った間に頼んでいたらしい。

優柔不断だが、気は利くようだ。

「有難うございます。」

美月は素直に受け取った。

確かに帰ってから夕飯の支度をして、間に合いそうにない。

しかし会計が済んでしまっていては、お礼に貰ったお金が残ってしまっている。

美月が言おうと思っていた事を、斉藤が先に切り出した。

「あの、また連絡してもいいですか？」

美月もそうしようと思っていたので、間髪空けずに答えた。

「はい、是非！じゃあ携帯番号送ります。」

斉藤の携帯に向けて、美月の携帯を操作する。

「今日は本当に有難うございました。楽しかったです！」

駅まで斉藤は送ってくれ、二人は駅で手を振りながら別れた。

斉藤は、美月が見えなくなるまで手を振っていた。

4
4
歳と4
6
歳の、
恋の始
まりだ
った。

33 恋の始まり（後書き）

更新遅れました。

7日までには次話更新します。

評価戴き、本当に有難うございます。
あと数話で完結予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0315d/>

幸せの見つけ方

2010年10月10日07時43分発行